

ティーオーとトレーナー

皇帝紅茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トウカイテイオーを無敗のウマ娘として育て上げたトレーナーとその愛馬テイオーとその仲間達の話

目次

テイオーとトレーナーとチーム	1
テイオーとトレーナーとチーム名	4
テイオーとトレーナーと後輩	7
チームメンバーとトレーナーと菊花賞	10
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞	16
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿前）	21
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿前半）	25
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿中編）	30
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿後編）	34
トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（ハプニング）	38
テイオーとトレーナーと菊花賞	43
菊花賞の後	54
テイオーとトレーナーと嫌われ薬	60
クズトレーナーとウマ娘と嫌われたトレーナー	66
テイオーとチームと彼女らに嫌われなかったトレーナー	70
テイオーとトレーナーと新メンバー	83
トレーナーがルナから逃亡開始	91
トレーナーはルナから逃走中	97
トレーナーはルナから逃げられないのか？	103
テイオーとトレーナーとルナ	109
テイオーとトレーナー、一難去って	116
テイオーとトレーナーと出会い	123
テイオーとトレーナーと出張	135

テイオーとトレーナーと笠松へ	140
テイオーとトレーナー、カサマツトレセン学園へ	145
テイオーとトレーナーとカサマツトレセン前編	150
テイオーとトレーナーとカサマツトレセン中編	157
テイオーとトレーナーとカサマツトレセン後編	163
トレーナー達のお疲れ様会（他トレーナー前編）	174
トレーナー達のお疲れ様会（他トレーナー後編）	184
トレーナー達のお疲れ様会（マツクイーントレーナー前編）	190
トレーナー達のお疲れ様会（マツクイーントレーナー後編）	199

テイオーとトレーナーとチーム

トレーナーになってはや4年目、

最初の担当馬のテイオーをクラシック、
春のシニア、秋のシニア三冠を獲得し、
URAFファイナルも優勝させることができた。

テ「はちみーはちみーはちみー！」

今ではその功績が認められ、

私にもチームを持つことになりました。

テ「はちみーをなめーると!!!」

今は新しい担当を複数持ち、

チームメンバーとして切磋琢磨に育成して：

テ「あしがー!!あしがー!!あしがー」

ト「うるせええええええええええええええええ!!!」

「はちみー中毒者がよお!!少しは静かにしろやあああああああああ
ああ」

テ「は?トレーナーのがうるさいんだけど?」

「それにはちみー中毒者って何?全然中毒者じゃないんだけど?」

ト「あ?お前毎日何本それ飲んでるんだよ?」

テ「毎日3本だよ」

ト「多いはボケエ糖尿病になるわ!!大体固め・多め・濃いめって何
だよワケガワカンナイヨ」

テ「え?トレーナーって固め・濃いめ・多めが何かわからないのお
?」

そんなこともわからないとかwwwぷうwww

ト「黙れ貧乳!!」

テ「スズカよりあるんだけど?!」

ト「断崖絶壁と比べてる時点で貧乳だわwww」

テ・ト・? 「:」

ト「テイオーさんや…この話はやめないか…」

何か寒気っていうか見てはいけない景色が見えた気がするからさ」

テ「う…うん…そうだね…」

「と…と…ところで、トレーナーは今何してるの？」

ト「マイルで走れる新しいチームメンバーを探し中」

テ「…ふーん…ボクダケイレバイイノニ」

ト「あ？何しつとりしてんの？しつとりテイオーさん」

テ「トウカイテイオーだよ!!」

ト「そもそもお前中距離担当だろ？マイル走れないじゃん」

テ「そうだけどさあ…」

ト「だからチームのためマイル走れる担当増やそうかなって」

「それに俺のエースで一番はテイオーだからさ!!」

テ「まあ…それなら仕方がないかな／＼／」 テレ

ト「チョロｗｗ」

テ「何か言った？」 ニコニコ

ト「いや何でもないぞw」

数日後

ト「というわけでマイル担当をスカウトしてきました!!」

テ「はやっ!？」

ト「早くチームレース参加してフレンドポイントほしいからね!!」

テ「フレンドポイントって何?!」

ト「気にするな!!というわけで、

マイル担当としてマルゼンスキーをスカウトしました!!」

マ「はぁーい、マルゼンスキーよ」

テ「トレーナーアーちよつとお話しようか…」 ガシ

ト「なんだ？あと肩痛いから離して」

テ「今まで連れてきたウマ娘を言ってみて？」

ト「はぁ？な「いいから言え」…つあ…はい」

「短距離はバクシンオーだろ、マイルはマルゼンスキー、

遠距離はスーパークリーク、ダートはタイキシャトルだけど？」

テ「○ね!!」 ブン

ト「うお!?!あぶね!?!何しやがるテメエ」

テ「トレーナーのスカウト基準って何？」

ト「おっ○いけど？」

テ「悪びれもなく素直に言いつたよこの変態トレーナー…」

ト「黙れ貧乳!!」

テ「マックイーンよりあるよ!!」

ト「ライバルをディスるなよ。パクパクにされますわよwww」

? 「は? メジロにきましたわ」

テ・ト「あ…」

その後、トレーナーはマックイーンに1時間ほど、

プロレス技をかけられました。

またテイオーは主治医さんにお注射された…

テ「なんでお注射されなきゃいけないのお!？」

主「それはお嬢様の主治医だからです」

テ「ワケガワカラナイヨオ!!」

テイオーとトレーナーとチーム名

それぞれの距離にメンバーが揃い、

チームとして出発ができるようになってから

テイオーはふとある事を思い出しました。

テ「トレーナー」

ト「なんだ？」

テ「そういえばチーム名って決めてるの？」

ト「決めてるぞ!! チームおっp:ツグツハ!」ドンガラツシヤン

テ「イワセネエヨ!」

ト「ウマ娘が本気で生身の人間吹き飛ばすとか犯罪だぞテメエ!!
俺じゃなかったら死んでたわ!!」

テ「てかなんで生きてるのさ!？」

ト「それはテイオー様のトレーナーだからです」ワケガワカラナイ
ヨオ

テ「だいたいそんな名前にして何がいいのさ!!
もつとかっこいい名前とかあるじゃん!!

スピカとかシリウスとかさあ!!」

ト「そこらへんも考えたんだよねえ」

「だってチームおっ〇いにしたら、

リーダーがテイオーってwww

いたいたいたいたいたいたけるけるな!

脛は反則だって:ちよマジでいたい」

テ「ふんだ」

「てかカッコいい名前考えてたならそれでいいじゃん!!」

ト「ただカッコいい名前だと、

なんか中二病こじらせたみたいでさ恥ずかしいじゃん」

テ「おっ〇いのが恥ずかしいと思うんだけど?!」

ト「それにさ考えてみる例えば、

お前の憧れのシンボルドルフがさ」

テ「カイチヨーが？」

ト「俺らのチームを呼ぶとした時

チームおつ〇いって呼ぶじゃん？なんか面白くね？」

テ「色々と最低な発想でドン引きだよ」

ト「普段こそ寒くてつまらんダジャレを言って、

エアグルーヴのライフを0にしているくらいだし、

たまには面白いこと言わしても罰h「ほお：」

シ「トレーナー君、誰のダジャレがつまらないだつて？」

ト「」

テ「トレーナー：」

ト「テイオー!!練習へ行くぞ!!今すぐに!!」ガシ

シ「どこへ行くのかねトレーナー君」ニコニコ

ト「や：やあ：會長様：本日もとても美しくたたた：

なんか電気がでてません?!びりびりするうううう肩強くつかまな

いでもげる：もげるからあ」

その後、トレーナーは、

カイチョーに生徒会室へ引きずられていった：

シ「さて：少しお話をしようじゃないか：」

ト「」

数時間後

ト「私の秘蔵ダジャレ100連発言ったら許してもらいました!!」

テ「ええ：」

ト「ちなみに一緒にいたエアグルーヴは、

絶不調になって緊急搬送されました。」

テ「ええ：」

ト「ついでに通りすがりのナイスネイチャは、

笑いが止まらなくなりまして、一緒に緊急搬送されました」

テ「ええ：」

ト「これから、2人のトレーナーへ謝罪に行ってきます。

そのため、本日のトレーニングは、リーダーあとは任せたぞ☆」

テ」

ト「あとトレーニング表作るの忘れてたから、

それもついでのつく「ふん！」つぶべら!？」ドガツシャーン

その後、テイオーが作ったトレーニング表で、

練習を行った結果、

チームメンバーの育成評価がワンランク上がる快挙を見せた。

なおトレーナーは、

エアグルーヴとナイスネイチャのトレーナーさんに、

謝罪した後、チーム名のこと、たずなさんに絞られた。

結局チーム名はシリウスになりました。

テイオーとトレーナーと後輩

ある日の事

トレーナーがチームメンバーの練習を考えていた時

ト「クリークは当面スタミナ育成したいからプールに行かせて…マ
ルゼンスキーとバクシンオーは根性育成として階段ダツシユ…テイ
オーは…」

ドアへコンコン

ト「どうぞー」

? 「失礼しまーす」

ト「えつと…君は…確かテイオーにあこがれていた…サトノブラツ
ク!!」

キ「違います!!混ざってます!!」

ト「あー本当にごめんキタサンブラツクか…」

「URAでテイオーの応援で来てた以来だね久しぶりだね」

キ「はい!トレーナーさんお久しぶりです。」

ト「それにしても(テイオーより)成長したね」

キ「はい(身長が)大きくなりました」

ト「大きくなつたねえ…」

「(テイオーよ…お前の憧れカイチヨーもお前に憧れていたキタサン
も大きいのに…どうしてお前だけおっp)「オラア!!」ウボアア!!」
ガツシャーン

キ「トレーナーさん?!それとテイオーさん?どうして?」

テ「やあやあキタちゃん、ちよおつと変なこと考えてたトレーナー
を蹴飛ばしたただけだよ」

ト「どうしてわかった?!」

テ「ふん…トレーナーの考えてることなんてお見通しだよ」

「ところでキタちゃんトレーナーに何か用?」

キ「はい、テイオーさんのチームに参加したいかなって」

テ「へえーチームに参加ってええええええ?!」

ト「マジで!?(やったぜ!!)」

テ「キタちゃん!!こんなおっぱい星人なトレーナーのチームに入るなんて、やめておいたほうがいいよ!!」

ト「は?誰がおっぱい星人だゴラア!」

テ「今までの行いを顧みなよ!!」

ト「ぐうのねも出ない」

キ「それでも:私はテイオーさんと一緒にチームに入りたいんです」

「憧れのテイオーさんと同じスタート地点に立ちたい!そして、いつかわその憧れを超えたい!その為にはテイオーさんのトレーナーさんに色々学ぶのが1番だと思いました!」

ト「だそうだ?俺は別に入ってもいい、むしろ大歓迎だぞ。どうするテイオー?」

テ「ぐぬぬ:キタちゃんがそこまで言うなら:」

キ「テイオーさん!ありがとうございます。」

テ「でも!ボクはキタちゃんに負けるつもりはないからね!」

キ「はい!!」

トレーナーさんもこれからよろしく願います!」

ト「ああ:よろしくな!!ところで、友達のサトノダイヤモンドはどうなんだ?もしまだチームに入っていないなら:是非ともうち「トレーナー?」いえなんでもありません。」

キ「えつとダイヤちゃんは、マックイーンさんのチームへ入るそうです。」

ト「そうなのか:残念だな(大きかったのになあ)」

テ「「ジー」

ト「な:なんだよ:」アセアセ

テ「ふんだ!!トレーナーなんて知らない!!」

ト「こいつマジで心読んでやがる:それにしてもサトノダイヤモンド:マックイーンのチームに入れるかなあ:」

キ「どういう意味ですか?」

ト「だってあそこのトレーナー貧乳好きでロリコン疑惑あるし:」

キ・テ「「え?」」

こうしてチームにキタサンブラックが入りました。

なお数日前マッククイーントレナーはマッククイーンに「これ以上貴方好みの娘を入れてしまったら、私を見てくれる時間が減るから、もう小さい子を入れてはいけませんわ!!それとも私しか見れなく監禁致しますわよ?」と目にハイライトがない状態で言われ好みの子が入れられなくなったため、サトノダイヤモンドは普通にチームに入れた

重馬怖アアアア

チームメンバーとトレーナーと菊花賞

テイオー（以下テ）、キタサン（以下キ）、タイキシヤトル（以下タ）、マルゼンスキー（以下マ）、スーパーリーグ（以下ク）
バクシンオー（バクシンの為、本日行方不明）

どうも、キタサンブラックです。

テイオーさんのチームに入ってから2週間ほど経ちました。

その間に、色々ありました。

まずトレーナーさんが、

「キタサンをチームレースに入れる枠なくね？」って言いだしたり、さらによくよく考えたら、チーム出走枠を増やす方法や更にチームレース出走登録の方法が分からなかったことも判明しました。

それに怒ったテイオーさんがトレーナーさんをダートに埋めてました。

その後、たづなさんに教えて貰い、無事チームレースに出走しまして、先週、枠が1つ増えたようです。良かったあ…

現在、トレーナーさんは「キタサンは長距離か中距離枠だから、他の枠を探さねば」との事で、スカウト活動してます。

何故かスカウト活動に、テイオーさんは不満ありそうでしたが…なので今は、リーダーであるテイオーさんが中心となりトレーニングに励んでいます。

トレーナーさんもよくトレーニングを見に来ますが、どちらかというとトレーナー室にいる方が多いですね。

そんな日々が少し続いた中、ある日ふと気になった事がありましたので、トレーナーさんに聞いてみました。それは、トレーニングが終わり、トレーナー室に集まった時でした。

ドアへバアン！

テ「トレーニング終わり〜」

ト「普通に開けてくれ・・・」

キ「テイオーさんお疲れ様です・・・」ウトウト

トレーナー室には、テイオーさん以外は私含め、既にトレーニングを終え、それぞれが自由な事をしていた。

トレーナーさんは、チーム未所属のウマ娘リストを見ながら何か考え事をしていた。

マルゼンスキーさんとタイキシャトルさんは、近所にあるナウい店がとか、よく分からない言葉を連発するせいでタイキシャトルさんが困惑していました。

なぜか私はスーパークリクさんに膝枕されてました・・・

眠気とともに変な感覚を覚えつつその圧倒的な居心地の良さに・・・あっ・・・ダメだ甘えたくなる・・・語彙力がていか・・・す・・・

そんな私達を羨ましそうにチラ見するトレーナー

色々と危険だったので膝枕からひとまず離れることにしました。スーパークリクさんは残念そうな顔をしてましたが：いろいろと危なかったので：

サクラバクシンオーさんは、トレーニング終わったと同時にどこかへ走って行ってしまった・・・

テイオーさんはトテトテとトレーナーの元へ駆け寄って行きました。

テ「トレーナー！トレーナー！」

「今日の褒美ちょうだい！」

そうテイオーさんはトレーニングが終われば、トレーナーに毎回褒美を要求してくるのです。

可愛いなあと思いました。毎日このくらいトレーナーさんとやり取りしてたら平和なのについて思いました。

あとご褒美か：うらやましいなって少し思ったり・・・

そんなテイオーさんにトレーナーさんは毎日応え、頭を撫でながら、

ト「今日もよく頑張ったなえらいぞ！さすがテイオー様だな!!」などで

テ「ニシシ：」ピコピコピコ

あんなに目を細め気持ちよさそうにして、耳をピコピコして可愛い

…そして私もしてもらいたいなあ…

ト「ほら今日もご褒美のはちみーだ、毎日こんな甘い物飲んでよく飽きないよなあお前も」

そして毎日いつものはちみーをテイオーさんに手渡すトレーナー

テ「大好きだからね！毎日たくさん飲んで飽きないよ！」

ト「大好きだからって飲みすぎんなよ…また…いやなんでもない…」

テ「…また？」

またという言葉聞いた時、少しテイオーさんの雰囲気が変わった気がします。

ト「い…いや…なんでもないよ…それよりテイオー今日は早く帰るんじゃないかったか？」アセアセ

テ「あ…そうだった!!ボク用事があるんだった、またねトレーナー、みんなもお疲れ様ー」

ト「ああ明日な」

私含めほかの方々もそれぞれテイオーさんへ労いの言葉をかけ終わるころには、テイオーさんはトレーナー室をでて走って帰っていきましました。

そしてふと思ったのですが、どうしてトレーナーさんは、テイオーさんに毎日のはちみーを買って手渡ししてるのでしょうか？

手渡さずとも帰りの途中で買えるのに、お金を渡したり一緒に買いに行けばいいのに、どうして手渡しなんだろうってふと疑問に思いました。

キ「トレーナーさん」

ト「…うん?どうしたキタ」

キ「どうしてテイオーさんに毎日のはちみーを手渡ししてるのかなって…帰りに買いに行けると思うのですが…」

ト「ああ…あれは、約束したんだよね」

キ「約束?..」

ト「日本ダービー後にさ、お前の夢クラシック三冠取れたら毎日のはちみー一本をご褒美として、手渡してやるってね」

キ「なるほど…日本ダービー後ってことは…菊花賞で1着が取れたらってことですよね？」

菊花賞という言葉を使った瞬間、チームのみんながこつちを向いた。

え？なんかまずいこと言ったのかなあ…

ト「菊花賞…あ…うん…菊花賞だなあ…色々あったなあ…」

そういうと急に頭を抱えだしたトレーナーさん。

えつと菊花賞何かあったかな…確か…菊花賞は…ちようど用事があつて、観に行けなかつたから、あとで二ユースになったのを見たんだ…確か…

ト「そういえばキタは観に行かなかつたの菊花賞？」

キ「そうなんですよ、せつかくテイオーさんがクラシック三冠が取つたところを観に行けなくて本当に残念でした」

ト「いや…まあ…なんだろう…観に行けなくて正解だったかもね…」

キ「え？何かありました？二ユースで知りましたが、すごかつたじゃないですか!!」

ト「いや…まあ…ハハハ…」

「なんか頭痛がしてきた…クリーク…甘えていい？」

ク「はい…トレーナーさんこつちへいらっしやい」

ト「うん」

そういつてトレーナーさんはスーパークリークさんに膝枕された。

ク「あの時は大変でしたけど、よく頑張りましたねーいいこいいこ」
ナデナデ

ト「…うん…」

キ「ええ…いつたい…何があつたんですか？」

そう言うマルゼンスキーさんが

マ「ちなみにだけどキタちゃんは菊花賞の結果は知ってるわよね？」

知っている…あれはクラシック三冠とつたことよりも二ユースや

新聞にも取り上げられてた…

キ「はい…確か2着とは大差を最初からゴールまでずっと維持し続けて、さらにありえないレコード叩き出したって…」

マ「ええ…そうね…あの時のテイオーちゃんはちよつと正気じゃなくてね、色々とおつたのよ…」

「あの時は異変に気付いたルドルフも、何とかしなきゃと色々頑張ってたけど最終的に菊花賞で「何あれルナ怖い…たすけてとれーな…」って言いながら心壊れちゃってね…幼児退行しちゃうし…」

キ「ええ…」

マ「そのあと、1週間ほどトレーナー君がつきつきりで介護して回復はしたけど…」

キ「ええ」

私はいろいろと驚愕した…菊花賞…一体何があつたんだ…ルドルフって確か…生徒会長のシンボリルドルフさんですよ？あの人が幼児退行？それにトレーナーさんが介護？

色々と聞きたい情報が多すぎて混乱してきた…

そんな混乱している状態にも関わらずタイキシャトルさんも

タ「アノレース、スズカと一緒に観てまシタ、あのレース観戦後にスズカ「私が今まで見ていた景色は所詮この程度だったのね…フッフ」って言って…」

人が変わったように急にアメリカへ行ってしまいましたネ…今ではアメリカで誰も追いつけないくらい強くなってますネ…」

スズカって確か異次元の逃亡者サイレンススズカさんでしたっけ…渡米は確かにニュースになりましたけどそんなことが…

ひとまず、その菊花賞にテイオーさんに何があつたのか…それが知りたい、再びトレーナーさんに聞いてみることにした。

なんかトレーナーさんおしゃぶり加えてスーパークリークさんに甘えてて聞きづらい雰囲気ですが行くしかありません。

キ「トレーナーさん…菊花賞のときテイオーさんに何があつたのか教えてくれませんか？」

「憧れであるテイオーさんを知りたいのはもちろん…今後テイオーさ

んを超えるためにあの異常に早かった菊花賞を知っておく必要があるんです。だからお願いします」

ト「…」

「バブバブバブバブ（仕方がないそこまでいうならいいぞ…たd）」
ク「ほらあトレナーちゃんうまく話せませんねーおしやぶり外しましやうねえ」ツス

ト「…キタ…後悔はしないな？最悪テイオーにドン引きするかもしれん…それでもいいな…？」

キ「…はい…それでも知りたいのです。」

ト「わかった…あれは…日本ダービーでテイオーが一着を取ったころ…」

一方その頃マックイーンのチームルームでは、

サトノダイヤモンド「トレナーさんマックイーンさんがクラシックの時に走ったあの凄かった有馬記念について聞いても大丈夫でしょうか?？」

マック（ト）「つう…・頭がガガガガ」

トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞

テイオー（以下テ）、メジロマックイーン（以下メ）、医者（以下医）、トレーナー（以下ト）、メジロマックイーン（以下マ）のトレーナー（以下マックイーン（ト））

テイオーとクラシックで頑張ってた頃の話

皐月賞1着、日本ダービーも見事1着をとり、ついにテイオーの夢だったクラシック三冠まで、あと菊花賞だけとなった。

テイオーの夢の為に私はより一層頑張るぞーと意気込んでいた。

そんな時、突如悲劇は起きた。

ダービー後のウィニングライブ、我が愛馬テイオーの晴れ姿を見ていた時、ふとテイオーの異変に気付いた。

もしかしたら、そんな不安がよぎり、ライブ後急いで、テイオーを病院に連れていき診察を行った。

テ「もお…トレーナー大げさだよ、別にボクは何ともないんだってば」

ト「万一つてこともある、一応見てもらったほうがいい」

テ「早く終わらせてよ、ボク菊花賞に向けたトレーニングを始めたんだから」

医「トウカイテイオーさん」

テ「何？」

医「太ってます」

テ・ト「え？？」

医「太り気味です」

「甘い物はやせるまで禁止にしましょう」

テ「…ええええええ!!」

医「はちみーは禁止にしてください」

テ「はちみー禁止い？いやだやだやだやだやだやだやだやだやだ」

ト「太り気味って本当ですか？」

医「本当です」

テ「むう…女の子に向かつて失礼だぞお!!」

ト「とにかくだ!!とりあえず!ほら体重計だ、それに乗ってみろ」

テ「え…さすがにトレーナーに見られるのは恥ずかs「いいから乗れ」はい」

ト「…嘘だろお…「わー!わー!」Kgも増えてる…」

テ「ええ…ワケガワカラナイヨオ」

ト「いやいやいやどうすんのこれ…菊花賞までにもとに戻せるかな…てかそれまでの練習にも影響するしやばいだろ…」

テ「だ…大丈夫…だし…ワガハイは無敵のテイオー様であるぞよ?」

「菊花賞なんて余裕余裕…」

ト「いやいやいやいやいやこんな重量上がったら色々と支障がくるだろ…」

「とりあえず…菊花賞までどうすればいいか放課後まで考えるから、お前は授業へ行ってこい」

「あとはこちら禁止な!!右手に持つてるはちみーも没収な!!」

テ「やだやだやだやだやだやだ」ジタバタ

ト「うるせえ」ハチミーボツシュウ

テ「あああ!!返して返して返して返して!!」ポカポカポカ

ト「ダメだ!!あと殴るな!痛いわあボケエ!!はよ授業へ行けや貧乳!!」

テ「Cはあるんですけどお!?!」

ト「いやいやいやグラスと同バストだと貧乳なんですうw」

?「あら?これはこれは」

テ・ト「」

テ「ボ…ボク…授業へ行ってくるね…サヨウナラトレーナー…」

ト「い…いや…待って…テイオー様待って…ちよ…おn」ガシ

?「トレーナーさんゆっくりお話ししましょうかねえ」ニコニコ
イヤコレハチガウンデス

ヒンニユウモタイヘンスバラシイトオモイマス

グラスサンソノナギナタハチヨットマツテ

エイゴデハナシダサナイデコワインダケド
ステイスステイスティ

イヤアアアアアアアアアア

放課後

ト「さて、テイオー練習方針が決まったぞ!!」

テ「トレーナー全身包帯巻いてるけど大丈夫だった?」

ト「テイオーよ…時には知らなくてもいいこともあるさ…」

テ「あ…ハイ」

ト「さてテイオーよ…」ガシ

テ「え? 頭つかんでどうしたのいたいたんだk…いたたたたたいたいたいたいたいた」ギチギチギチ

ト「昼間とトレーナー室来る前に、はちみー飲んだだろ?」

テ「え? なんでしつて…いたいたいたいたいた頭が割れるう!!」

ト「はあ…はちみー禁止だつてあれほと言ってるのに、どうして飲もうとするんだよ…」

テ「そこにはちみーがあるからさ!!」

ト「はあ…まあ今後飲ませないように対策したけどな!!」

テ「え? どういうこと?」

ト「菊花賞まで、ダイエツトかつ練習のため臨時講師を呼ぶことにしたよ」

テ「臨時講師?!」

ト「そうだ!! お前がはちみーを飲まないように、監視と練習を一緒に行ってくれる仲間を一時的に引き入れることにした!」

テ「え? 一緒に練習? 仲間? 引き入れるって? もしかしてウマ娘を?」

ト「そうだ!! お前もよく知ってるやつだ」

テ「えつと誰だろう…」

ト「というわけで紹介するぞ!! お前のライバル!!」

メ「わたくしメジロマッククインですわ!!」

テ「げええ!! マッククイン!? なんでえ!」

メ「もちろんライバルの窮地を救うため、当然のことですわ!」

テ「マツクイーン…」ジワ

ト「まあ…確か動機は、今までさんざんダイエット中、目の前でスイーツを食べたからそのうらm「フン！」ゴキツ」バタン

テ「トレーナー!!」

マ「それではテイオーさん、よろしくお願いいたしますわ」ニコニコ

テ「えつと…なんでさん呼び？マツクイーン？」

こうして、テイオーはマツクイーンの協力のもと菊花賞までダイエツト+トレーニングを開始するのであった。

マ「今まで目の前でスイーツを食べた恨みをここでお返ししますわ!!テイオーの目の前ではちみーごくごくですわ!!」

マツクイーン（ト）「なんか嫌な予感がするのですが…」

トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿前）

テイオー（以下テ）マックイーン（以下マ）トレーナー（以下ト）
その他ウマ娘もですよがわかりやすい略称にします。

メジロマックイーンの協力を得て、今日から菊花賞へ向けて練習が始まった。

テ「はちみーはちみーはちみー」

「あ？はちみーだ!!」

登校中公園にいつものように、お店が来ていたので、

テイオーははちみー禁止のことを忘れ店へ向かう

店？「いつらしやいませ」

テ「硬め・濃いめ・多めで!!」

店？「はい、針の硬め・太め・長めですね」

テ「ん？」

テイオーは、店員の顔を見ると…そこには

主「主治医です」

テ「なんで、お店の店員やってるお?!」

主「それは、お嬢様の主治医だからで」ワケワカンナイヨ

？「まったく…昨日あれほどトレーナーさんに、はちみー禁止と言

われていましたのに…あなたはまったく…」

主治医の後ろから呆れ顔をしたマックイーンが出てきた、はちみー
を飲みながら

テ「マックイーン!?ええ!!なんでえ?!」

マ「あら？先日あなたの監視役になるといいましてよ?」

テ「そんなあ…」

マ「さて、トレーナーさんの約束を破ったテイオーさんには罰を与
えなくてはですわ」

テ「ま…まさか…」

主治医の左手を恐る恐る見た…そこには…

テ「ヒャー!!なんでお注射もってるの!？」

主「それは、お嬢様の主治医だからで」

テ「ソレシカイエナイノー?!」

プス

テ「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その後、はちみーが飲めなかったとぶーぶー言いながら、

トレーニングに励むテイオーがいた、

少しだけ腕周りが引き締まった気がする

その数日後、

あれからもテイオーは、はちみーを飲もうと頑張ったが、どこのどの店に行ってもマックイーンと主治医がいて、お注射（栄養剤）を打たれ続けた。

嫌いなお注射を打たれながら目の前でマックイーンにはちみーを飲まれるそうだった日々を過ごしていた。

もうお店では買えない。そう察したので、テイオーは次なる手を用意していた。

テ「はちみーはちみーはちみー」

「ふふふ…お店を抑えてるからってマックイーンも詰めが甘いんだから…」

テイオーは食堂調理室へ急いで向かう、はちみつと書かれた大瓶をもって

そうテイオーは定期的にお問い合わせをして食堂調理室を借りてはちみーを作っていたりしてた。

だがそう人生うまくいくわけもなく…

テ「え…?」

目の前に見える光景、黄色の立ち入り禁止テープで道を塞ぎ、その先には無残になった食堂調理室があった…

テ「ど…どうして…」

そうつぶやくテイオーのその近くにいたテイオーもよく知るウマ娘が教えてくれた。

同じく絶望的な顔をしているスペシャルウィークが

スぺ「昨日の夜…タキオンさんが実験をしてたらしく、その…タキオンさんのトレーナーさんに調理室で薬の配合をお願いしてたらしいのですが、

その分量を間違えたみたいで…調理室が爆発したみたいですよ…ごはん朝から食べてないのにどうすればいいんでしょうか…」

そう言うとスぺは膝から崩れ落ちた

テ「そ…そんな…」ガシヤーン

そういい、持ってた大瓶を落としたり…

テ「ああ!?!ストックのはちみつがああああ?!」

はちみつの大瓶が割れたみたいだ

スぺ「はちみつ?!」

テ「スぺちゃん!?!」

スペシャルウィークのはちみつと知るやいなや、

その落ちたはちみつを手で掬い舐めだした

テ「ちよつと…スぺちゃん!!お腹が限界だからって汚いからやめよ

うよーそれにそれはボクのはちみつだよお?!」

そう言いテイオーはスぺを止めようとするだが

スぺ「…げ…せん…」

「あげません!!」

テ「ええ!?!」

呆気にとられてる間に掬い舐めれそうなのはちみつは全部スペシャルウィークに舐められてしまった

放課後

テ「トレーナー」

ト「テイオーどうした?」

テ「はちみーが飲みたいよお」

ト「ええ…でもなあ…まだ始めたばかりだろ?」

テ「飲みたいんだよお!!」

ト「菊花賞勝てたら好きだけ飲んでもいいからさ…我慢しようよ…な?」

テ「うう…でもお…」

ト「太ってたらバストサイズがあがるってのは迷信だしさ!!別にテイオーは小さくて」「ふん」ドコオ みぞおち…」バタン

テ「トレーナーの馬鹿ああ!!」

ト「お…おいテイオーどこ行くんだ?」

テ「トレーナーの馬鹿もう知らない!!」ツダ

そう言いテイオーはどこかへ行ってしまった

ト「…どうしたものか…俺って本当にダメだなあ…」ポリポリ

一方そのころ

マ「飲んでみましたけど、意外とおいしいですわね、ケーキやクッキーにあいますわ!!」

マツクイーン(ト)「えっと…大丈夫ですかマツクイーンさん?」

マ「大丈夫ですわ!!ちゃんと運動してますし、節制してますわ!!」

マツクイーン(ト)「な…ならいいんですけど…」

トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿
前半）

テイオー（以下テ）、ルドルフ（以下ル）、トレーナー（以下ト）
他わかりやすいように略称してます。

前回の件から数日後のある日

ドアへコンコン

ト「どうぞー」

? 「失礼するよ」ガチャ

入ってきたのは、テイオーの憧れ、現生徒会長にて、絶対的な強さ
と言われた皇帝シンボリルドルフであった。

私が学生の頃に知り合い、この学園に来た時彼女のお願いで、テイ
オーの担当になったという経緯もあったりする。

ト「ルドルフかどうした？」

そう聞くと、ルドルフは少し不満げな顔で

ル「トレーナー君2人きりの時は、どう呼んでほしいか前から言っ
てるのだが…」

ト「生徒会長のシンボリルドルフさんどうなされました？」

ル「すまなかった…他人行儀はやめてくれ…ルドルフでいいです
…」プルプル

耳をぺたんとシヨンボリルドルフになったルドルフ

ト「はあ…で…どうした？ルナ？」

ルナと彼女の幼名を呼ぶと耳がピクリと反応し、機嫌が治ったのか
少しうれしそうな表情をみせる。

がすぐに我に返り、コホンと咳ばらいをした。

ル「実はテイオーの事でな…単刀直入に聞こう、テイオーと何か
あったのかい？」

ト「少し喧嘩したかな…謝りたいんだけど、話しかけてもすぐ逃げ
られて捕まらなくてな…」

ル「そうか：最近、テイオーが夜な夜なトレーニングをしているみたいだね…」

ト「それは本当なのか?！」

ル「ああ：何があったのかは知らないが、同室のマヤノトップガンが毎晩テイオーが出かけているのをフジキセキに教えてくれてな、そこから知って調べてみたら、トレーニングをしていることが分かった」

ト「そうか：伝えてくれてありがとう」

ル「追い込むとんでも抱え込んで無茶をするから：テイオーの事頼んだ…」

ト「ああ：ルナもあまり心配しすぎて無茶はするなよ：お前も大概、1人で抱え込むタイプだからな」

ル「今の君を反面教師に気を付けるさ」

ト「なかなか耳が痛いところをつくな：昔のルナはやんちゃであるなに可愛かったのに」

ル「昔の話はよしてくれ：恥ずかしい…」

ト「ええ：あんなに可愛かったのに：昔はよく：ルナはトレーナーのお嫁さんにn」／／「ドン！グツフミゾオチ…」バタン

ル「次それを言ったらただでは済まさんぞ／／」

ト「い：いや：もうみぞおちに「わかったな！」あっはい…」

ル「とにかく、テイオーの事頼んだぞ」

ト「ああ…」

ル「それとメジロマツクイーンが、最近食べ過ぎてて困ってるって彼女のトレーナーが」

ト「それは知らん」

ルドルフに教えてもらってから、テイオーに謝りたいのとその件で、話そうとするが、逃げられるし、捕まえれたとしても、「ほっといてよ!」「そんなことしてない!」など割と強めに答えられるからなかなかうまくいかない。

数日後

そうこうしているうちに俺とテイオーは夏合宿へと向かうことに

なる。

テイオーは海だー！とテンションが上がっていた、ただ遊びに来たわけではないので、すぐに練習を始める。水着に着替えたテイオーに練習の指示をだした。

トレーニングが始まった。今回はメジロマックイーンもテイオーが練習しているときはこちらが預かるので一緒に練習をさせている。

ただマックイーンはなぜかジャージを着ていた…不思議だなあ…

日本ダービー後からテイオーもだいぶん太り気味が解消されたのか、おなか回りも引き締まってきているのがわかる、これならはちみー解禁もちかいなーって思ってきた。そうこう考えながらトレーニングを進めた。

数時間後、初めての砂浜での練習ってのもあり、疲労もなかなかたまってそうだった。なので今日は、日が落ちる前にトレーニングをやることにし。

テイオーは、まだできると抗議していたが、初日からぶっ飛ばしても、後々響くからダメと説得し、しぶしぶ聞き分けてもらった。

トレーニング後、私はホテルの自室に戻り合宿で行うトレーニングの予定などを考えていたのだが、少し練習内容をどうするか悩んでいたのも、他のウマ娘のトレーニングでも参考にしようかなと海辺へ向かっていた。

決して大きい娘の水着姿が見たいわけじゃなく、これはあくまでもトレーニングのヒントを得るための物だからな!!

だが現実是非常であつた…

あの娘は…ライスシャワーだっけ…うん…可愛いね…ハルウララ…元気に練習してるなあ…あ？マックイーンとロリコントレーナーじゃん…やっぱり水着忘れたのかな？まだジャージだよ…あとなんかスズカがこちらをすごい形相でにらんてるけど…

一生懸命トレーニングしている娘たちを眺めているとふと…遠くのほうで泳いでいるテイオーに気付いた。

ト「テイオー？あいつ…」

テイオーがトレーニングをしていると気づいたトレーナーはテイ

オーの方へ足を進めるのであった。

〈テイオー視点〉

トレーナーに怒鳴ってから数日が立った。

トレーナーが謝ろうとボクのもとへ来るが、どうしても目を見て話せなくて突き放してしまっている。

あれからはちみーを絶ってはいるが、やはりどうしても我慢ができない…早く飲みたくて、どんどん喉の渇きが広がっていくような感覚がくる。

でも、今飲んだら歯止めが利かなくなつてまた元に戻つてしまうかもしれない。

それだけは嫌だ…早く痩せれさえすれば…どうすればと考えていた時、マックイーンのトレーナー室である声が聞こえた。

マックイーン(ト)「マックイーンさん最近、はちみーにハマつたからって飲みすぎですよ」

マ「大丈夫ですわ!!その分たくさん運動すればよろしくてよ!!」ゴクゴクデスワ

そうか…たくさん運動すればいいのか…消費されるもんね…

たくさん運動…そうか…今よりたくさん運動すれば痩せるスピードも速くなるはずだよね。

それに、もつと強くなれるしいいこと尽くめじゃないか…

そう考えるようになってから、トレーニングが終わったら毎晩公園や河川敷へ行きトレーニングを行うことになった。

トレーナーやカイチョーに心配されたけど、強く言い返したら何も言つてこなかった。

そうこうしているうちに合宿が始まった。

合宿場についた、きれいな海にテンションがあがったが遊びに来たわけじゃない、すぐに水着に着替えてトレーナーのもとへ向かった。

痩せてきているとはいえ、少し水着がきつかった。

トレーナーに指示されながらマックイーンとトレーニングを始める、なぜかマックイーンはジャージを着ていた。理由を聞いたら、

「水着? わ…忘れただけでしてよ?!」

つと強く言われた。

忘れたなんてマツクイーンもおつちよちよいだなあ

砂浜での練習は足にすごく負荷がかかっている気がしたし、すごく疲れた。

それを察したのか、トレーナーがトレーニングを切り上げると言い出した。

まだまだ練習したいので、ボクは抗議したけど、聞き入れてくれなかった。

練習が終わり、自室に戻ったが、やはり、まだ練習がしたかったの
で、再び水着に着替えて、海辺へ向かった。

さつきまで練習してたし、柔軟はほどほどでいいかなと思いたいし
てせず練習を開始した。

さつきまで足に負荷かけすぎたし、そんなにかからない水泳を行う
ことにした。

水泳をしてから数時間、泳いでいた時、足に衝撃が走った。足を
つってしまったみたい。

ボクは慌てて溺れないようにもがくが、ボクがもがけばもがくほど
どんどん沈んでいった。

無理して練習した報いなのかな…ごめんね…トレーナー…そうふ
とトレーナーに心の中で謝りながら意識が遠のいていく…

「テイオー!!」

近くで叫んでいる声が聞こえた気がした。

トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿
中編）

ボクは昔の思い出を見ていた。

それはボクがカイチョーに憧れたきっかけ、そしてボクの夢ができた日だ、カイチョーがクラシック三冠を取った菊花賞の日、カイチョーは圧倒的な力を見せつけ見事に勝利を収めた。

ボクは居てもたつてもいらなくなり、カイチョーが記者会見している場所へと向かっていた。

だけど…

テ「ここ…どこ…？」

ボクは迷子になっていた。

急がなきゃ…カイチョーが記者会見を終えて帰ってしまう。

そうになったらボクの思いを告げれない、いろいろな感情が沸き上がり泣きそうになっていると…

？「どうしたの君？」

後ろから声をかけられた。

ボクは振り向くと、そこには一人の青年が心配そうに話しかけてきた。

……………

身体が重たい…あれ…ボクどうしたんだっけ…

確か…海でおぼれて…で…今…どうなったんだっけ…

？「い…お」

？「て…お…」

テ「ん…」

重い瞼を開けるとぼんやりとだが涙目のトレーナーがそこにいた

テ「ト…トレ…ナー…」

テイオーはぼんやりとしながらそう返事をした…

ト「テイオー…よかった…本当によかった…」

トレーナーはテイオーを力強く抱きしめた

テ「トレーナー痛いよ…」

ト「ああ…ごめん…本当にごめん…」

抱きしめる力は弱まっていく…それとともにトレーナーは震えていた。

きつとボクのために泣いているんだろうと分かった。

ボクは…トレーナー…を泣かせてしまった…

トレーナーに言われてたことを守らず勝手にやったこのボクを…

そんなことを考えていたらボクも涙が出てきた…色々な感情が抑えられなくなってきた。

テ「うう…ぼ…ボクもごめん…さい…トレエ…ナア…ゴメン…」ヒッグヒッグ

2人ともいつしか、外にいるのに、大声でわんわん泣いていた。

数分間泣き続けた…トレーナーは、ボクより先に落ち着いたのか、ボクを温かく抱きしめながら頭を撫でてくれた、その撫でてくれる手はとても温かく、ボクは自然と落ち着いていった。

テ「トレーナー…勝手に無理な練習をして、ごめんなさい…」

ボクは改めてトレーナーに謝った。

ト「テイオーが謝る必要はないよ…そもそも俺がテイオーの気持ちがあわかってやれなかったから…色々と焦ってたんだよな本当にごめん」

ずるいよ…そんなこと言われたらこれ以上謝れなくなるじゃないか…

テ「うん…ボク…はちみーも早く飲みたかったし、それにトレーナーに元に戻った事で、安心してほしくて…痩せるためには、運動しまくって汗を流せばいいと思っただ、たくさん強くなれるしいことづくめだと思って…」

ト「そうか…テイオー」

テ「なに？」

返事をしたとき、トレーナーはテイオーの頭に手を乗せ

ト「一生懸命テイオーなりに頑張ったな偉かったぞ」

素晴らしいテイオーをゆっくり撫でた

テ「ちよ…トレーナーくすぐったいよ／＼／」

先ほど撫でてくれた時は温かいと感じていたが、
褒められながら撫でられるのってなんだかむずかゆいけどそれ以上、うれしかった。

数秒間撫でてもらった後、トレーナは撫でている手を戻した。

テ「っあ…」

少し名残惜しそうにするテイオー

ト「さて…ホテルに戻るか、もう日が落ちてるしな、明日は大事を取って午前は休みな」

テ「うん…わかった」

そう答えると、トレーナーは

ト「ほらおぶるから背中に乗れ」

テ「ええ…さすがに、帰る途中誰かに見られたらはずかs「いいか乗れ」…はい…」

ト「こういう時はトレーナーに甘えるってもんだろ」

テ「…なにそれ…」

ト「そういうもんなの」

テ「…うん」

トレーナーの背中におぶってもらいながらゆっくりホテルまで帰った。

トレーナーの背中ってこんなに広いんだね…

とても居心地がよくて気持ちよかった…なんだか…眠たくなってきた…

ト「テイオー？」

寝息を立てている…どうやらテイオーは寝てしまったようだ

ト「寝ちやったか…明日からもよろしくな相棒」

そう口ずさみ、起きないようにゆっくりと目の前にあるホテルの入り口に向かった。

その光景を自室の窓から見ていたルドルフは、うまく関係が戻ったことを察し安堵した。

一方そのころ

マックイーン「トレーナーさんもつと声を出しなさいませ！」

マックイーン（ト）「えつとマックイーンさんこれ以上声を出すと、隣の部屋の方に迷惑が「いいから」…はい」

マックイーン「さあ行きますわよ!! かつ飛ばせーユーターカー!! さあトレーナーさんも!!」

マックイーンは自分のトレーナーがいる部屋で撮りためていた野球を観戦していた。

翌日、テイオーが朝ご飯を食べに食堂へ向かっていると、廊下でマックイーンとマックイーンのリレーナーが「私は昨晚騒ぎすぎて、隣の部屋で寝ていたブライアンを怒らせました」と書かれた札を首にかけて正座させられていたそうなの

トウカイテイオーと新人トレーナーと菊花賞へ（合宿
後編）

合宿も最終日、最後の練習とのこともあり、
各ウマ娘普段も一生懸命だがそれ以上に頑張つて練習していた。
勿論、テイオーもその中に含まれる。

そのテイオーの練習を見ていたトレーナーは最近少し悩んでいた。
テ「あの一件からテイオーのスキンシップが増えた気がする…」
やけに最近引っ付いてくるし、

事あるごとに抱き着いてくる…暇なときは私の部屋によく遊びに
来るし…

元々信頼し合う仲ではあるとは思っていたが

前回の一件で、LikeというよりLove寄りになってね？ボク
だけみてよとか言い出してしつとりしだすぞ…

重馬がくるか…まずいぞ…

いや好かれるのはうれしいよ？可愛い娘にスキンシップされるの
もううれしいよ？

でも重いのはキツイですわ…

あーいつぞやのルナとかも苦労したなあ…あとあいつも…

ただ重馬場の経験がある私だからこそちゃんと対処すれば…うん
大丈夫だな!!

そう自分に言い聞かせたトレーナー、
シニアの春あたりで地獄を見ることを知らず
そういえば、もう太り気味は解消されたし、
はちみー禁止も解消だとテイオーに伝えないとなあ

そう考えていたら、後ろから誰かに抱き着かれた。まあ一人しかい
ないんですけど、

テ「トレーナー走り込み終わったよー」

うーんやっぱスキンシップ多いよなあ…

ト「テイオーちよつといいか」

テ「なにトレーナー？」

そういうとテイオーは抱き着いていた手を放してくれたので、テイオーの前に振り向いた。

ト「明日からはちみー飲んでいいぞ、十分スリムになったし目標は達成したと思うしさ」

トレーナーがそういうとテイオーは少し顔を下に向け考え出した。
あれ？喜ぶとおもったんだけど…

テ「えつと…トレーナーはちみーはまだ禁止でいいかな？」
予想外な回答が来た

ト「え？…どうして？飲みたかったんだろ？もう痩せるという目標は達成できたと思うしいんだぞ？」

テ「えつと…以前トレーナーは菊花賞勝てたら好きだけ飲んでいって言ったよね？」

そういえばそんなこと言った気がする…

テ「だから菊花賞まで我慢する」

テイオーの顔を見る、本気の顔であった。そしてその目は決意が宿った目であった。

ト「そうか…なら菊花賞勝つぞ、テイオーを絶対に勝たせる！頑張ろうな！」

テ「うん!!それでねトレーナーお願いがあるんだ」

ト「お願い？」

テイオーは顔を赤くしながら上目遣いでつてナニコレ可愛くね？

写真撮っていい？その写真大量に焼き増しして売っていい？その金で焼肉食べに行つていいか？

テ「えつとね／＼／ボク毎日練習やレースを頑張るからそのご褒美が欲しいんだ」

ト「ご褒美かあ…ご褒美の内容は？」

ここでいいぞと即答してもいいかもしれないが、無理難題な要求をされたらたまったもんじやないので、まずは内容を聞くことにした。

テ「えつと／＼／」

もじもじしてるなあ…自室のカギをくれとか…ボク以外の女を見

るの禁止とか言われるんじゃないやねこれ？

テ「毎日褒めながらナデナデしてほしいかな…／＼／＼」
良馬だったあ！よかったあ！

ト「ああいいぞ」

テ「じゃあ早速お願いしてもいいかな？／＼／＼」

そう言うのと、テイオーは頭を前に差し出した。

その頭を優しく撫でた。

ト「合宿最後まで頑張ったな！さすが俺の相棒だぜ！」

テイオーは嬉しいみたいだ、しつぽや耳の動きがそう物語っている
その後、数秒間は褒めつつ撫でた。終わった後にふとひらめいた。

ト「あ…そうだテイオー、菊花賞勝てたその日から毎日ちみー
本俺からプレゼントするよ」

テ「本当に？」

ト「ああ約束だ!!」

そういうとすぐくうれいのかテイオーは勢いよく抱き着いてきた。
た。

テ「約束だよ!!絶対だよ!!」ギュー

ト「おう…」ギチギチギチギチ

抱き着く力強すぎ折れる…

こうして合宿最終日は終わった。

菊花賞まであと1か月と数日

次の日、合宿へ帰るため、バスに乗るテイオーとトレーナー

テ「あれ？マックイーンがないんだけど？」

ト「え？」

一方そのころ

マ「ゴールドシップさんに教えてもらった場所に行きましたのに、
これは一体どういうことなの？お店なんてどこにもないじゃない
?!」

数時間前、ゴールドシップにあの海岸から5キロ先にある離島に、

伝説級に美味しいカキ氷屋があると聞いたマックイーンは、居てもたってもいられず、水着は持ってきていないので、ジャージを着たまま、泳いで離島まで来ていた。

だがその離島は無人島であったため、そんな店はなかった。

数時間後、ビショビショで意気消沈した彼女を彼女のトレーナーが海岸で見つけ、無事帰った。

マックイーンとそのトレーナーは罰則として1週間、朝の清掃活動を言い渡された。

理事長に呼ばれて、どうにかしろって言われるし、たずなさんには怒られるし、ラーメン奢らされるし、飲みにも誘われるし、悪酔いに付き合わされるし、そもそもどうしてこうなったんだよ…

もう我慢とかせずにはちみー飲ませるしか…
いやいやそうしたらテイオーの決意が無駄に…

テ「あ…今週分の薬を飲まなきや」

「飲まなきや？薬を？トレーナーはテイオーを見た。

テイオーは見慣れない容器に入った液体を飲んでた。

ト「テイオー、薬って何？」

テ「ん？どうしたのトレーナー」

ト「質問に答えて」

テ「えつとね、欲を抑える薬だつて、タキオンがくれた…あれ？トレーナー？」

テイオーがすべてを言う前にトレーナーは部屋を飛び出していった
理科室

？「ふう…朝の紅茶は美味しいねえ…それにしてもモルモット君は早く退院しないかねえ…彼の弁当が恋しいよ」

ドアへドツカーン

ト「おらあ!!マッドサイエンティストはいるかあ!!」

？「おやおや…騒がしいな…テイオーのトレーナー君」

ト「タキオンテメエ…テイオーに何盛った!？」

タ「盛ってなんてしてないさ、私はテイオーに頼まれたから作っただけなんだがね」

ト「作った？」

タ「3、4週間前だったかな、テイオーに菊花賞まではちみーの雑念なく調整したいから欲を抑える薬が欲しいといわれたから作ったまでだよ」

最近すごくキレのいい練習をしていたのはそれが原因だったのか。

ト「ちなみどんな薬を渡したんだ」

タ「なに飲んだら1週間、一番食べたい物か飲みたい物の欲を抑え

る薬さ」

そう言う液体の入ったフラスコを取り出す。

タ「これを飲めば、一番食べたい物が飲みたい物が無関心になるというものさ、まあ今見せたものはテイオーに渡した薬の失敗作だけだね」

ト「え？無関心？事あることにはちみーはちみーつぶやいてて怖いんだけどお？」

タ「おや？おかしいな…」

ト「まさか…お前…」

タ「私としたことが、少し抑えるの効力を低く見積って作ったみたいだね、多分溜めてる欲が多すぎて少し漏れているみたいだ」

ト「どうしてくれるんだよ!!こっちは苦情ガンガンに来て困ってるんだよ!!」

タ「すまなかったね、ここ数か月モルモット君の弁当を食べれてないから調子が出なくてね、そこまで頭が回らなかつようだ」

そういえばこいつのトレーナー4か月前、食堂調理室爆破させて全治半年の入院してるんだっけか、てか爆発したのに全治半年って身体強すぎるだろ

タ「あああと薬の効力が完全に切れたら欲が爆発するから気を付けてくれたまえよ」

え？は？なんて言ったこいつ？

ト「爆発？どういうことだ？」

タ「薬の効力で欲を抑えてるんだ、その効力が切れたら今まで抑えて溜めていた物は吐き出されるだけださ」

ト「はああああ?!それってめちゃくちゃまずいじゃないかよ!!」

テ「飲んでからちようど1週間だからね、うまく時間調整して菊花賞終わった夜に効力が切れれば大変だろうが何とかなるだろう」

ト「：飲んだのさつきなんだが…」

そうテイオーが飲んだのは、さつきちようど朝の8時!!

薬の効力がなくなるのは菊花賞がある日の朝8時!!

タ「…」

ト「ちなみに…テイオーはまだ薬のストックを持っているんだよな？」

タ「菊花賞の日分までしか作ってないね、更にもう1本薬を作ろうにもちょうど材料がなくてね…補充するのには早くて10日かかる…」

ト「」

タ「ま…まあ頑張ってくれたま「オラア」ん何を!?ゴクツ ああ飲んでしまったじゃないか!!」

とつさに、トレーナーは先ほど見せてくれた薬をタキオンに飲ませたのだった

ト「テメエもテイオーと一緒に1週間欲を抑えて爆発するんだな…」

タ「なんてことをしてくれたんだ…ち…違うんだ…この薬は失敗作で一番欲する食べ物か飲み物を摂取しない限り、ずっと欲が爆発し続けるんだ!!」

ト「解毒薬は?あとテイオーの分」

タ「作ってない…」

ト「うん…まあ…あいつが退院するまで頑張れ…」

そういつて部屋を出ようとしたが、腕をつかまれる

タ「待ちたまえよ!どうしてくれるんだ!責任を取ってくれよ!」

ト「いや、お前のトレーナーじゃないし無理やん」

タ「確か君は料理が上手だっただろ?この際誰が作ったかはい!

君が弁当を作りたまえ」

ト「いやいやアイツじゃなきや無理だろ、まあ頑張れ」

そーいい手を払い除け部屋を出る

後ろでタキオンが待ってくれよ!弁当作ってくれよ!と色々叫んでたが放っておいた。

まあ明日試しに作って食べさせてみるか

さて

ト「マジで菊花賞どうしよう」

テイオーの溜めてた欲が爆発する、漏れかかるくらい溜めている欲

が爆発するとかマジでやばいだろ

とりあえず、生徒会や知り合い、最悪頼みたくはないがあいつにテイオーを抑えるのを頼むか

「はあ」

これから大変になるんだろうと分かるとため息しか出なかった

その日の夕方、欲の爆発に耐えられなかったタキオンは、彼女のトレーナーが入院している病院へ向かう。

だが数ヶ月前に入院中だった彼女のトレーナーを実験しようとしたことがあり出禁を食らっていた。その為会うことは出来なかった。なおその際色々ありまして、生徒会の仕事が沢山増えてた。涙目のルナに手伝ってとお願いされたので、私のせいでもあるし代わりにやる事にした。5日くらい徹夜で作業した。

一方その頃

マ「さあ天皇賞・秋に向けて練習ですわ！」ゴクゴクデスワ

マ(ト)「マックイーンさん練習前にはちみー飲むの辞めてくれませんか？」

マ「はちみーを飲むと練習効率が20%上がるから必要な事ですよ」

マ(ト)「はちみーはビコーペガサスのサポカだったのか… あっ！そうだマックイーンさん新しい勝負服できましたよ」

マ「本当ですか？」

マ(ト)「はい、ここにありますよ。着てみますか？」

マ「そ… そうですね、今日はやめておきますわ」

マ(ト)「そうですね、着たい時は言ってくださいね」

マ「ええ…」

テイオーとトレーナーと菊花賞

トレーナー（以下：ト） トウカイテイオー（以下：テ） シンボリルドルフ（以下：ル） サイレンススズカ（以下：ス） スーパークリーク（以下：ク） メジロマックイーン（以下：マ） マックイーンのトレーナー（以下：マ（ト））

【注意：ちよつとした下ネタがあるためダメな人はバックお願いします】

菊花賞当日

あれから色々とありました。

テイオーの欲漏れは日に日に大きくなっていき、周りを恐怖させていくわ。

終いには無意識に、目の前がはちみーに見えて無意識に舐めだすし

この前唾液でべとべとになってションボリしてるルナがこつちに
来て泣き言を吐いてたし…

マックイーンってスイーツいつもパクパクしてて甘そうだよねって
言いだして（物理的に）食べようとしたと苦情が来たし

タキオンに弁当作って食べさせたがやはり彼女のトレーナーが
作った物じゃないと意味がないらしく、

理科室で荒れてるし…この前2度目の病院突撃があつて、ニュース
になつてたなあ…

はちみーを飲ませようにもテイオーが涙目で飲まないと否定する
ので、無理強いできないし

気づけば菊花賞当日になつてるし…
6時30分：あと1時間30分かあ…

もうじきテイオーが来る…ひとまずホテルから京都競馬場までの
移動は大丈夫か…

ドアへコンコン

来たか…テイオーかそれとも…

ト「どうぞー」

ドアへガチャ

ル「トレーナー君、失礼するよ」

そこに入ってきたのは、生徒会の3人と応援として頼んでおいた人たちであった

ルナ、エアグルーヴ、ナリタブライアン、マルゼンスキー、スーパークリークそして…

？「お久しぶりです、トレーナーさん」

来たか…重の…

ト「や…やあ…スズカ…お久しぶりだね…」

そこにいたのは異次元の逃亡者ことサイレンススズカであった…
相変わらずその目はどす黒い…

ス「ええ…最後に話したのは25日ぶりですね…」

ええ…相変わらず目にハイライトないし怖いんですけど…

ト「お…そんなに経つのね…元気そうでよかったよ…で…お願いがあつてね」

ス「テイオーさんが暴走するから抑え込めばいいですよね？」

ト「あれ？話は既に聞いた感じ？」

ス「いえ…トレーナーさんの事はなんでも知ってるので…」

ええ…この娘どうしてこんなにしつとりしてるの…

ス「トレーナーさんとこれからも同じ景色を見るためには、なんでも知っておく必要がありますので…」

ト「そ…そうか…まあ…助かるよ…ありがとう…」

ス「はい…これで一つ貸しですね…」

ト「…」

何要求されるんだろう…以前は昨日の洗濯物要求されたし怖えよ…

ル「スズカは相変わらずだな…ソレデモサイシユウテキニハトレーナーくんハルナノモノニスルガ…」

ルナがなんかボソボソ言ってる…聞かなかったことにするか…
てか、サブトレ時代に矯正出来たと思っただけ…おかしいな…

ヤメルンダテイオー

ハチミーハチミーハチミーハチミー

アツソコハミミ

ハチミーハチミーハチミーハチミー

なんかすごいことになってそうだから本人の名誉のため見ないで

おこう：

京都競馬場

7時30分

選手控え室へ向かっているルナをおんぶしながら…

到着した時すでにルナは色々を見せてはいけない状態になっていた…

しばらく立てないということなので、おんぶしている…

隣でスズカが羨ましいのか…妬んでるのか…すごく複雑そうな顔をして私の腕を握ってくる…

しばらく移動していると、

ルナが何とか立てるようになってたがまだおんぶされたいと耳打ちしてたが、それが聞こえたスズカが無理やり引きずりおろしてた。

さて選手控え室についた…

ト「さて…テイオー着替えてきな…」

テ「ハチミーハチミーハチ…うん!!行ってくるね」ハチミーハチミーハチミー

そして…

腕時計くピピピピ

8時になつて

控室へガシャーン!!

一同「!？」

一同で控室に入るそこでは…

テ「ハチミーが飲みたいいいいい!!ハチミーはどこお?ハチミーハチミーハチミー」

テイオーがハチミーを求めているんなものを手にとっては違うと
いつて投げたり壊していった…

うわあ…暴れてるよ…って違う違う…抑えなきゃ…

そう思った時、すでにエアグルーヴとナリタブライアンがテイオーを止めに動いていた。

なおルナは、今までテイオーにやられた仕打ちを思い出したのか…
がくがく震えながら…私の後ろに隠れた…おい生徒会長…

ブライアンがテイオーの後ろに回り込み動けないようにホールドし、エアグルーヴが縄をもって雁字搦めにしようと近づいた。

これはいける!!と思った次の瞬間

エアグルーヴ・ブライアン「え？」

ブライアンがそのまま投げ飛ばされ、エアグルーヴは突き飛ばされた

ドン!!…ガシャーン!!

壁に激突してそのまま意識がなくなるブライアンとロッカーに激突してその衝撃で気絶するエアグルーヴ

テイオーはそのまま何事もなかったかのように俯いたまま扉の方へ走ると言うより突進してきた。

が扉の目の前にトレーナーがいたため目の前で止まった。

テ「ハチミー…ハチミーは…どこ…トレーナー…はちミーがないんだ…だからさ…はちミーを今まで我慢した分飲みに行くんだ…だからねそこをどいて？」

ト「いや…菊花賞はどうしたんだよ…菊花賞1着とるまで我慢するんだろ…」

テ「もう…どうでもいいんだ…はちミーが飲みたくて飲みたくて仕方がないんだ…だからね…どいて!!」ドン

そう言う私の頭より左にある壁を殴った、壁がえぐれてた…怖いんだけど…食らったら死ぬじゃん…

ト「…つく…」

どくしかないのか…そう思ってたらテイオーを抱きしめる一人のウマ娘が…

ク「さあ…テイオーさん危ないことをしてはダメですよ〜」

キター我がママ!!クリークママの甘えさせる攻撃だあああああ

ああ!!

テイオーにも効いてるのか、目は虚ろなままだが、徐々に弱ってる気がする

テ「ハチミー…あ…ハチミー…マ…マ…」

効いてるぞ!!このまま本番前まで赤ちゃん返りさせるしかない!!

ク「フフフ…テイオーさんいいこでちゅねえー」

そっぴいなながら抱いているテイオーをゆっくり撫でるクリーク

テ「あ…ああ…」

行ける!!このままいけえええええええ!!

テ「あ!!はちみーだ!!」

ト・ク「え?」

テイオーはそのまま

テ「いただきまーす」ムニユパク

ムニユ?ま…まさか…

ク「つあ…ちが…テイオーさん／／やめ…／／」

なんとテイオーのやつクリークのおっ〇いを服の上から吸いだした…つておい!!羨ましいぞ!!そこを変われ!!

てかやばい…こんなの見てたら俺の愛馬がズキユウドキユンしてウマダツチしてしまう!!

なんてくだらないことを考えてたらいきなりゴキつて音とともに視界が変わった目の前には笑顔のスズカが

ト「スズカさん…首が痛いんですけど…顔をいきなり左に回すのやめて…」

ス「トレーナーさん見てはいけませんよ…フフフ…」

ト「いや…あの絶景をみないと後悔s「いけませんよ?」…ハイ」

ス「あんな脂肪の塊を見るくらいなら私だけを見てればいいんですよ?」ニコニコ

ト「はい…」

数分後

ク「ビクビク

クリークはもう…いやこの状況説明したらR18になるだろ…っ

て状態になつて気絶してた

テイオーはそのまま私の方へと向かつてきた…

万事休すかと思つたその時

? 「待たせたね!! トレーナー君!!」

ト「ル…ルドルフ!!」

なんとさつきまで怯えてたルナが復活を遂げた、先ほどまでの情けない姿を忘れさせるような威風堂々とした姿に変貌して、この皇帝状態のルナなら今の暴君状態の帝王に勝てるかもしれない!!

しかし…なぜここまで復活したんだ?

そう考えてるとルナの後ろでマルゼンスキーがピースサインをしている…今まで慰めてたのか…マルゼンスキーさん最高だぜ!! マジでイケイケでチョベリグでお前がナンバーワンだ!!

「汝、皇帝の神威を見よLv. 6」

ル「さて…テイオー今までさんざんこの私をもて遊んでくれたな…

あまり皇帝を無礼るなよ!!」バチバチバチ

すごい…これが皇帝の威圧つてやつか…腰が抜けるやつもいると聞いていたがこれなら領ける…

テイオーもこの威圧には流石に堪えているようだ…

ルナはそのまま追い打ちを掛けるため次の一手に踏み切った

ル「知っているかテイオー?」バチバチバチ

「はちみつの製法は緻密なんだとき」ッ

あ…ダメだこいつ…やっぱ駄皇帝だわ…

テイオーはあまりのくだらないダジャレに数秒間固まった…
そして

「汝、帝王の神威を見よLv. 11」

テ「カイチョー…咄嗟に、はちみつのダジャレを言って何がしたいわけ?…あまりはちみーを無礼るなよ!!」バリバリバリ

え?何あの固有スキル?てかLv11ってなんだよ?!単純計算で☆10になってるやん!!何あれ怖ってか威圧感やばすぎる…

その圧を受けさつきまでの皇帝の威勢は消え去り、ルナは膝から崩れ落ち…

ル「ゴメンナサイ…ウウ…ゴメンナサイ…ヘンナコトイツテゴメンナサイ…」エグエグ

あーダメそうだ…ガチ泣きしてるよ…てか最近メンタル弱すぎ…
さて…今度こそ万事休すか…スズカにたの…あれ?スズカは?

隣にいたはずのスズカがいないことに気づいたトレーナー

次の瞬間

とすつ!

テ「つう!!」バタン

テイオーが突如倒れ、スズカがその場に立っていた…

ええ…何したし…

ス「トレーナーさんこれでいいですか」ニコニコ

ト「あ…あ…」

数時間後

ナレーター「クラシックロードの終着点、菊花賞を制し最強の称号を手にするのは誰だ!」

「さて今回クラシック三冠が目の前となってる5番トウカイテイオーが一番人気となりました」

「そのトウカイテイオーが見えないが、何をしてるのでしょうか?」

「おっと…あそこにい…あれ?なぜサイレンススズカがいるのでしょうか?」

ナレーターが見る観客が見る先ではレースに出るはずではないスズカがテイオーを抱えてやってきた…

「えつとどういうことでしょうか…サイレンススズカが5番ゲートに入ったぞ何が起きているのでしょうか…」

5番ゲートない

ス「さてと…」つす

そう呟き手方でテイオーの首後ろを叩く

テ「はちみー!!あれ?はちみーは?」ハチミーハチミーハチミー
起きるテイオー

ス「テイオーさん今から菊花賞のレースですよ?」

テ「え?はちみー飲みにいきたいから菊花賞でなくてもいいかな」
ハチミーハチミーハチミー

無論気絶させたからと言って薬による爆発がなくなったわけでは
なかった

スズカは考えたこのままゲートに入れてもテイオーはゴールへ行
かずそのまま逃亡してはちみーを飲みに行ってしまうだろう…

そんなことになってしまったらあの人が悲しんでしまう…正直テ
イオーを助けるのは気が引けますが…仕方がありません…

そう思った、スズカは、テイオーに耳元で周りに聞こえない声で伝
えた

ス「……………」ボソ

テ「?!」

その瞬間テイオーの目の色が変わった…

ス「さて…テイオーさん私は客席に戻りますね…あとはあなた次第
です…私としては…なんでもありません、頑張ってくださいね」クス
クス

そう言うとスズカは観客席の方へ走って行った

テ「…」

ナレーター「えー思わぬハプニングがありました、レースを続行
したいと思います。各ウマ娘ゲートイン完了、出走準備が整いまし
た…」

テ「トレーナ…ボク…だ…」

バン!!ゲートが開かれる!!

テ「トレーナーとトレーナーのはちみーはボクのものだあああああ
ああああああ!!」ツゴ!!

そう叫んだ瞬間

テイオーは作戦など何も考えずに最初から全力で走っていた

そして…

ナレーター「」

観客「ええ…」

トレーナー「マジでか…」

ルドルフ「…ナニアレコワイ」ガクガク

スズカ「…」

ナレーター「トウカイテイオー今ゴール!! 2着は…ってまだ他のウ
マ娘たちはまだ2周目にはいった所って…ええ…」

テイオーはそんな異常な状況など気にせず全速力で

テ「トレーナー!!」

ト「ちよ…グツハ!!」

トレーナーにタツクルをかましてた

テ「勝ったよ!! ボク三冠とったよ!!」

ト「あ…ああ…よく頑張った…テイオー…」ガクツ

テ「トレーナー? トレーナー!?!」

こうして菊花賞はトウカイテイオーが1着になり、クラシック三冠
を取ったのだった

? 「彼と同じ景色は…今のままでは見れなさそうね…タイキちよつ
とお願いがあるんだけど…私アメリカへ行こうと思うんだけど…」

その劇的な菊花賞が終わってから1週間後

東京競馬場控室

今日は天皇賞・秋があつた。

あつた…そうレースは終わっていた。

マックイーンはトレーナーの前で正座をしていた。

彼女のトレーナーはそんな彼女を上から見ていた…普段とは違
いすごく怒っているご様子であつた。

マ(ト)「マックイーンさん、まずは天皇賞一着おめでとうございませす」

マ「あ…ありがとうございます」「しかし!」

マ(ト)「最終直線残り100を切った時突如失速しましたね?なぜでしょうか?」

マ「そ…それは…」

マ(ト)「そして危なげながら一着が取れました。ですが…ゴールしたあとどうなりましたか?」

マ「え…えつと「いいなさい」…はい…その…スカートがズレてしまいました…下着を晒してしまいました…」プルプル

マ(ト)「そうですね…なぜスカートがずれたのですか?」

マ「スカートのホックが壊れてしまったからですわ…」

マ(ト)「100を切ったときに壊れたんですね?しかしなぜスカートのホックが壊れたのですか?」

マ「そ…それは…」

マ(ト)「ひとまずこの体重計に乗ってください…」

マ「えつと…「いいから乗れ」はい…」

マ(ト)「すごく増えてますね…」

マ「はい…」

マ(ト)「いつから太つてると自覚がありましたか?」

マ「合宿へ行く前からです…わ…」

合宿中水着を忘れてたりしたのは…ばれないようにワザと忘れてたのか…などと色々と思ひ当たる節があつたなあと反省するマックイーントレーナー

マ(ト)「……」ボツ

マ「えつと…トレーナーさん?」

マ(ト)「次の有馬記念まで、スイーツ禁止です」

マ「そ…そんな!?それは流石にあn「わかりましたね?」…はい…ち…ちなみに…チートデイは?」

マ(ト)「そんなのあるわけないですよ」

マ「そ…そんなあああああ」

菊花賞の後

現在

トレーナー室

ト「とまあ…菊花賞はこんな感じで終わりましたとさめでたしめでたし…」

キタ「ええ…」アセ

つまり…大好きなはちみー我慢してたのが爆発してあんな事になつたと…

ト「いやあ…その後大変だったなあ…」

「テイオーにはちみーあげた後、ウイニングライブにはちみー飲みながら踊りやがったからさ、宣伝活動になるから違法だの大人の都合で大変な目にあつたし…」

「違法な薬物摂取したのでは？つて疑われて、身の潔白を証明するの大変だったし…」

「その対応に追われてる中、ルドルフは幼児退行して1週間面倒みる羽目になるし…」

……

菊花賞の次の日

トレーナー室

ト「はちみーの件で理事長やたずなさんにすごく怒られました…つらたん…たずなさんに今晚飲みに拉致られるの確定しました…卑し
か女杯…」

「さて…テイオーが来るまでトレーニングやら昨日の後処理をしますかね…終わりそうにないから今日の飲み終わったら仕事に戻ろう…」
「素晴らしい仕事に取り掛かろうとした時、

ドアへコンコン

ト「どうぞー」

？「失礼するぞ」

ト「お？エアグルーヴか？昨日は助かったよ、ブライアンともに怪我はなかったみたいだけど、今のところ大丈夫かい？」

エア「ああ特に何も無い、ただ…：会長がな…：すまないちよつと生徒会室まで来てくれ」

ト「ルドルフに何かあったのか?!」

エア「ああ…：ちよつと私達には手に負えなくて…：すまないが助けてくれ」

そう言われ、エアグルーヴと一緒に生徒会室へ来た、そこには、ルナが大声で俺の名前を叫びながら泣いていた…：ええ…

ト「ええ…：ナニコレ?」

エア「私もさっぱりわからない、今日来たら、すでにあんな感じになっていた…」

ト「ナニソレコワイ」

どうなっているんだ…：とりあえず本人に聞いてみるか…

ト「やあ…：ルドルフ…：大丈夫か…?」

俺の声が届いたのか耳としっぽがピンとなったあと、泣き顔から満面の笑みになりこちらへいそいそとやってきた

ル「やつときてくれたトレーナー」ダキ

そういうと抱き着いてきた…：ナニコレ?

エアグルーヴはすぐく気まずかったのか、いつの間にかいなくなっていた…：おいていかないでくれよ…

ト「えつとさルドルフ?」「ルナ!!」「え?」

ル「ルドルフじゃないもん!!ルナだもん!!」

ト「はあ…：でルナはどうしてさっきまで泣いていたんだい?」

ル「えつとね…：トレーナーさんがどこかへいくこわいゆめをみちやつて…：それでおきたらトレーナーがいなかったからこわくなつてないちやつた…」

ト「そうか…：大丈夫だよ、トレーナーは何処にもいかないから」

ル「ほんと?」

ト「本当だよ」

ル「じゃあこれからずっとルナといっしょにいてね」
「パア」

やつちまつた…

それから一週間

ル「トレーナーあそびにいこ？」キヤツキヤ

「トレーナーきのうのよるどこいったの？」ハイライトオフ

「トレーナーのおうちでおとまり♪いいでしょ」ウワメツカイ

「おふろいっしょにはいろうよ」ネーネー

「いっしょにねよ？」ギュー

「といれ…ついてきて…」ウルウル

テ「か…カイチョー?!」

ル「はちみーおばけ…こわい」ガクブル

テ「ええええ!!」

……

現在

キタ「会長さん…」

ト「まああいつも色々と苦労してたみたいだしな…メンタルギリギリだったんだろうなあ…元に戻った時幼児退行してた記憶があったらしく、1か月引きづってて俺と目が合うと赤面しまくってたっけなあ」

「でまあその後、ルドルフの面倒をみてた事もあり仕事が溜まりまくったので、消化しようとした矢先にさ…」

キタ「その後も何かあったんですか?!」

ト「ああ…」

……

ルナからルドルフに戻った次の日

ト「やつと仕事に戻れる…始末書やら後処理の書類が俺の身長くらい積みあがってるやん…」

期限間近なものなど必要最低限の事は消化していたが、増える一方の書類、テイオーには申し訳ないが当面自主練をお願いするか…

ト「さて…やりますか…」

素晴らしい仕事に取り掛かろうとした時、

ドアへコンコン

あれえ？先週もこんなことあったぞお？

マジで面倒ごと勘弁してくれよ!!

誰かは知らんがここはいるsガチャ

?「トレーナーさん居留守はダメですよ?」

げえ:

ト「:スズカ:」

スズ「はい、あなたのスズカですよ」フッフ

相変わらず目のハイライト忘れてるし:嫌な予感しかしない:

仕事早くしたいし、さつさと用事を聞いて済ませることにするか:

ト「えつと:スズカ何のようかな?」

スズ「えつと菊花賞での貸しを返してもらおうかなと思います」

菊花賞:確かに彼女がいなかったら、テイオーは勝てなかっただろ

う:多少衣服が減つたりしてもいいか:

ト「ああ:そうだな:無理な願いは聞けないが借りは返さないと
な」

スズ「ありがとうございます」

そういつた瞬間スズカが一瞬にして消え:つう!視界が少しずつ

暗く:

スズ「ふふふ:では行きましょうか:」

.....

現在

ト「そして:気づいたらスズカと一緒にアメリカにいたんだ:」

キタ「ポカーン

ト「数週間ほどアメリカでスズカのレースを見ながら臨時トレー
ナーさせられた」

「貞操の危機もたくさんあったけど何とか逃げ切り、テイオーやルド
ルフに助けてもらいたい何とか日本へ帰ってこれた」

キタ「た:大変でしたね:」

ト「んで、日本に帰ってきたら更に溜まっていた期限切れやぎりぎ
りの書類を必死に終らせた後ぶっ倒れ、1か月入院しました」

「1週間の入院だったんだけどさ、運が悪いことにタキオンのトレー
ナと同室で、弁当に飢えてるタキオンの襲撃で怪我してしまい、期間

マ「さあ!!トレーナーさんいきますわよ!!」ガシ

トレーナーの腕をつかむマックイーン

マ(ト)「え?どこへ?」

マ「勿論!!スイーツバイキングにですわ!!」

マ(ト)「いやこの後、記者会見とかウイニングライブ」いきますわ

よ!!」：はい：」

マ「今まで我慢してた分、パクパクですわ!!」

：

現在

ト「その後、籠が外れたマックイーンは、中山競馬場付近のスイーツ店を閉店に追い込むほど食べつくしたとか」

「この件に関して、間接的原因に臨時講師とかの件で俺も関わっていたので、仕事が増え年末休日がなくなった」

キタ「えつと：なんて言えばいいのか：本当にお疲れ様です：」

ト「さて：長話になったな：いつの間にかキタ以外帰ったみたいだしキタもかえつて：ルドルフ：いつからいた：」

私とトレーナーさんが入り口を見た時、そこには笑顔の会長さんがいた

ル「トレーナー君がテイオーの日本ダービー後の話をしだした時からかな?」

ト「すべてじゃん：」

ル「さて：トレーナー君、その話は他人に話してはダメだと伝えてたはずだったが：」バチバチ

ト「」

ル「キタサンブラック：すまないが私はトレーナー君と話がある、今日はもう遅いし帰りたいまえ」

キタ「は：はい：トレーナーさんお先に失礼します：」

ト「ちよ：キタちゃん：まって：俺も帰：」ガシ

ル「トレーナー君どこへ行くんだい?」ニコニコバチバチ
ト「」

その後、トレーナー室から、トレーナーの悲鳴が響いた

テイオーとトレーナーと嫌われ薬

菊花賞の話をしてからルナに、すんごく怒られた。

それから数週間後、

ある日

タキオン「ふむ…好感度を爆上がりする薬を作ってはみたが、逆に爆下がり薬を作ってしまったようだ…これは処分しなくては…でも何かの実験に使えるかもしれないから保管しておくか」

クズトレーナー「ふうん…嫌われ薬つてやつか…いい事聞いたぞ…これをあいつに飲ませれば…俺様の時代が…」

…

現在

ト「なあテイオーさん」

テ「なんだいトレーナー」ジヨリジヨリジヨリ

ト「タキオンがさあ嫌われ薬なるものを作ったそうなんだよ」

テ「へえ…最近流行ってるからついに、ここにも来たんだね」ジヨリジヨリジヨリ

ト「前から流行ってたけどなあ…何番目かは知らんが、そして、その嫌われ薬が先日盗まれたそうな」

テ「それは大変だねえー、誰かが飲んだら大変だ」ジヨリジヨリジヨリ

ト「それがさあ…俺が飲んだみたいなんだよねえ」

テ「あらら…トレーナーもおつちよこちよいだねー」ジヨリジヨリジヨリ

ト「どうやら盛られてたらしいんだよね」

テ「トレーナー恨みでも持たれてたの？変なことしすぎて恨み買ったんじゃないかな？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「変なことした記憶しかないから、ぐうの音も出ない…まあそいつは俺の先輩でテイオーやチームが活躍するのを妬んでたらしいんだあ」

テ「へえ…嫌われてあわよくば自分のチームに引き入れる算段だったあ」

たのかなあ？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「そんなところなんだろうなあ」

テ「トレーナー嫌われ薬飲んでから大丈夫だった？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「まあ色々痛い目にあつたよ、今日は朝からモブ娘ちゃんに殴られたり、ナリタタイシンにキモイ言われたり、マックイーンに回し蹴りされたり…」

テ「いつもの事じゃん…」ジヨリジヨリジヨリ

ト「いや…あいつらいつもより目がマジだから流石にメンタルに堪えたわあ」

テ「可哀そうにねえ〜あと数日で効果切れるから頑張ろう」ジヨリジヨリジヨリ

ト「ところでさ、テイオー」

テ「何？」ジヨリジヨリジヨリ

ト「もう、クズトレーナー先輩の髪の毛ないぞ？」

テ「あ…本当だ」ジヨリ

そういうテイオーは手動バリカンを近くにテーブルへ置いた。

そこには嫌われ薬を盗み、トレーナーに仕込み飲ませた、犯人が見るも無残な姿で拘束されていた。

：

3日前

トレーナーは何か違和感を感じていた。

ト「今日の昼休憩後からなんか周りの視線が怖いんだけど…」

なんか昼ご飯を食べた後から周りの視線から殺意的なものを感じるようになっていた…

うーんまあ気のせいだろ…さてもうじきキタちゃんが来るかな…

ドアへガチャ

ト「キタちゃんこんにちは、さつそくトレーニングはじめよう…ん？キタちゃん？」

キタちゃんはその場で怒った顔をし…

キタ「そのキタちゃんって呼ぶのやめてもらっていいですか？」ツ

本気で投げつけたと同時に顔面に向かってとび膝蹴りがさく裂し
た

テ「○ねえ!!」

ト「うお!?あぶねええええ」ヒョイ

間一髪トレーナーはよけた!よける前にあつた机は粉碎し救急箱も壊れ中の物が散乱した

∴

カメラに映っている映像をみて喜ぶクズトレーナー

クズトレーナー「よし!!いいぞそのままボコボコにしたれwww」

∴

ト「テイオー何しやがるんだ!!」

テ「トレーナー昨日どこで何してたの?」

ト「は?何いっ「言えよ!!」はい!!マツクイーンのとトレーナーと飲みに行つて、酔つた勢いでそれぞれ分かれて、性癖全開のお店へ行きました!!ちなみに俺はおっぱへ!!」

テ「ねえどうしてそんなお店へいくのかなあ?」ギロリ

ト「やっぱチームメンバー、テイオー(笑)含めみんな大きいとムラムラするから仕方がない事なのです!!」

テ「○ねえ!!」ブン!!ドゴオ!!

テイオーの右ストレートがさく裂!!ただトレーナーはよける!!殴つた先にあつた壁はえぐれる!!

∴

クズトレーナー「あれえ?なんか反応が違う∴」

∴

テ「ボクはまだ成長期なんだい!!これからキタちゃんみたいに大きくなるんだ!!」

そういう涙目なテイオーの肩をポンポンたたき∴

ト「あきらめろ∴現実をみる∴3年前と比べても全然そd「オラア!!」ドゴオ みぞおちい!!」ボタン

テ「トレーナーのばーか!!」

そう叫びテイオーは部屋を出て行つた∴今日はやけに暴力を振るわれるなあ∴

∴

クズトレーナー「なんか∴反応が思ったより違つたが∴きつと個々

によって薬の効果が違うんだな!! うんそうに違いない!! トレーナーのやつぎまあないな!! この調子で破滅すればwwお?」フハハ

…

そんな中また1人のウマ娘がトレーナー室へはいつていくのが映った

一方そのころ

どうもマックイーンのとレーナです

今マックイーンさんとチームの遠距離担当ライスシャワーさんの目の前で正座させられています

マ「さて、トレーナーさんなぜ正座させられているのかお分かりですか?」

マ(ト)「い…いえ…なんのこと?」「お嬢様な妹【自主規制】」え… どうしてそれを?!」ビク

マ「あなたの上着ポケットにお店の名前が書かれたレシートがありましてよ? さてこれはどういうことかしら」ハイライトオフ

ライス「お兄様… どうして… ライスがダメな子だからそんなお店に行くの?」ハイライトオフ

マ(ト)「そ… そんなこと… ないぞ… 俺は「ならどうして!!」」

ライス「もしかしてお兄様はライスを裏切ったの?」

マ(ト)「いや裏切ったというわけじゃ…」

ライス「オニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタオニイサマガウラギッタ」

マ(ト)「ガクブル

マ「さて… トレーナーさん… 裏切った罰ですわ」ニッコリ

そういうと手錠をとりだした

マ(ト)「」

その後、マックイーンのとレーナーが1週間ほど行方不明となった、見つかった時彼はここ最近の記憶がなかった

クズトレーナーとウマ娘と嫌われたトレーナー

前回のあらすじ

キタちゃんが反抗期になった。割とメンタルきつかった
テイオーにシバかれた。いつもの事なので、特に問題はなかった
さて：何かが：おかし：キタちゃんの嫌われるようなことした
かな：

いい子だったのに：シヨツクだなあ：

落ち込んでるトレーナー

ドアへガチャ

？「こんにちは、あらトレーナーさん…」

ト「お？クリークか…」

クリークはトレーナーの顔を見ると顔を曇らせた

：

クズトレーナー「お？スーパークリークか：彼女にも拒絶されて甘
える事もできなくなればやつは」

もう破滅に向かって一直線だろう：そう思った彼は汚い笑みを浮
かべて見ている

30分後

クズトレーナー「え？：どうということ…」

彼の予想とは違った光景が映像に映し出されていた

：

ト「クリーク：キタに嫌われちゃったよ…」ギュー

ク「あらあらどうしちやっただんでしょうね」フッフ

いつも通りトレーナーはクリークに甘えていた

ト「反抗期なのかなあ：悲しいなあ…」

ク「きつと何かあったんですよ、トレーナーは悪くないですよー、だ
からそんな暗い顔しちやっただら私も悲しくなっちゃうのでメツです
よー」ナデナデ

：

クズトレーナー「どうということだ：薬は効いてるはずなのに：まさ

かもう効果切れ？早くないか？」

：

そうして、トレーナーがクリークに甘えるという見てて正直キモ…
辛いものを見せられ30分後、

クリークに甘えたこともあり、元気が戻ったトレーナーはそのまま
チームメンバー勧誘のため：外へ出た

その後ろを尾行する、クズトレーナー

：

クズトレーナー「どういうことだ…本当に効果が切れたのか…」ブ
ツブツ

：

トレーナーに向かう1人のウマ娘が

？「チエストですわー」ブン

ト「うおっ!?バット?!」

トレーナーは後ろからバットで殴られそうになるも、寸前でよけた

ト「何するんだよマックイーン!」

マ「なんでよけるんですの？」

ト「いや食らったらマジで洒落にならん…」

マ「私のトレーナーさんが先日あんなお店に行ったのは、貴方のせ
いですわ!だから粛清しますわ!」

ト「いやあいつノリノリだも「だまりなさい!」」

マ「あとなんかあなたを見てたら無性にむかつかますし、おとなし
く私のためになぐられなさい、大丈夫半殺しですませますわ!!」ボコ
ボコデスワ

ト「見逃してくれない?」

マ「だめですわ!!」

ト「マックイーンここに高級スイーツバイキングのタダ券があるの
だが」ツス

マ「今回は見逃しますわ!!」

：

クズトレーナー「マックイーンは…うん…まあ…ポンコツで有名だ

し仕方がないか…」

その後、薬は切れているわけではなかったのがわかった

あいつはウマ娘とすれ違いざまに水をかけられたり、ぶん殴られたりされていたい気持ちだ

そして

：

グラス「トレーナーさんなぜ避けるのですか？諦めましょ？」ブンブン

ト「いやいやグラスさん流石に薙刀はあかんつて」ヒヨイヒヨイヒヨイ

グラス「ダメですよおゝあなたみたいなきずを見てるだけでむかつくので、ちゃんと切られてください」ブンブンブン

ト「いやいやいや俺が何をしたっていうんだよお!!あれか?あれなのか?この前、グラスがノーパンだと噂を流した恨みか!」ヒヨイヒヨイヒヨイ

グラス「は？」ピタ

ト「あ…やば…」サー

グラス「I will surely kill you (私はあなたを確実に殺す)」

：

ト「アダダダダ」

エル「エルのヘッドロックはどうデスカ?このまま一気にやられてくだサイ」

ト(さすが89…柔らかくて別の意味で昇天しそうだ…)

「まだまだあ!!次はフオール技で頼む!!しっかりその感触を感じたいんだ!!」

エル「なんか気持ち悪いのでやっぱやめマス…」

ト「そ…そんな…」ガーン

：

ライス「お兄様をたぶらかしたあいつを…」

「ライスだつて殺つてみせる!!」ドス!!

ト「模型のナイフが刺さったあああいてえええええええええええ」

ウララ「トレーナーごめんね…なんかトレーナーを見てると嫌な気持ちになるから…近づかないでほしいの…ごめなさい…」

ト「なん…だ…と…」ガク

キタサンの時よりすぐメンタルが傷つくトレーナー

…

どんどんと怪我（大体自分のせい）とメンタル、心身ともに傷ついていくトレーナーを見て満足するクズトレーナー

彼は薬の効果が上々なのを確認して満足したのか、帰宅した

ト「…さすがに堪えるなあ…」トボトボ

そうつぶやきながらトレーナー室へ戻るとそこにはルナがいたル「やあトレーナー君今日は大変だったね、ところで…」

ルナの顔はとてつもなく怒りに満ちた顔になっていた…

あれから2日後

あいつ（トレーナー）はたくさん拒絶され暴力を受けていた

ククク…やつも限界なはず…ぼちぼち辞めてくれるところかな…

トレーナーはあれから、

アグネスデジタルに何か交渉していたところ、それを見たナリタブ

ライアンに殺されそうになったり

グラスワンダーに執拗なまでに終われ、抹殺されそうになったり

スペシャルウィークに素で気持ち悪いといわれ、めつちやメンタル

減らされたり

トウカイテイオーに蹴飛ばされたりと

他にもいじめにも近い仕打ちを受けていた

スピーカーへトレーナー、トレーナー速やかに生徒会室へ

あいつが、生徒会室？クククついに…辞職しろと詰められるんだな

…ついにこの時が来たか…

さてあいつが詰められて絶望する姿をみなくては…

クズトレーナーは生徒会室へ足を進めていった

イヤダ!!

フン!!

アア：オレノウマホガ!?

： どういうことだ：なぜ嫌われていない：薬は完璧に効いてたはず

：

それにあいつは昨日その効果でナリタブライアンに殺されかけてたはず：

ザンネンパスワードセットイシテマシタ！ペロペロバア

パスワードヲハケエ!!

ハカネバウマホコワス!!

エエ：

？「覗き見とは感心しないな？」

クズトレーナー「え？」

コウカンドガモットモタカイヤツノタンジヨウビダヨ？

コウホガオオスギテワカランワ!!

そこには生徒会長シンボリルドルフとマルゼンスキーが立っていた。

クズトレーナー「す：すみません会長：少し騒がしくて気になってしまいました：」

ル「まあいい、ちょうどよかった、君に用があつたんだ入りたまえ」
ガチャ

オ？ルドルフオカエリー

ツチ：テイオーノタンジヨウビジャナイカ

断る理由も見つからないまま、クズトレーナーは会長に連れられたル「まあ立ち話もなんだ、座ってくれ」

そう言われ、ソファに腰がけるクズトレーナー

彼は周りを見た、

窓側ではナリタブライアンがあいつのウマホを触りながら、その持ち主と話していた

ブライアン「ツチ、クリークやマルゼンスキーの誕生日でもないぞ!？」

ト「はははwさて誰の誕生日だろうな!!」

ブライアン「教えろ!誰の誕生日だ!？」

ト「えー嫌だわ」

パスワードの入力でもめている2人

それを笑顔で見ているマルゼンスキー

会長は私の対面にあるソファに座る

エアグルーヴは会長の後ろに立っていた

ル「さて、本題に入ろうか、先日アグネスタキオンが作った薬が何

者かに盗まれたのだが…」

ま…まさか…

会長から出た言葉に思わず心臓の鼓動が早くなったのを感じた

ル「盗んだのは君だね?そして私のトレーナー君に飲ませたね?」

先ほどまではほんのり笑顔だった会長は今では怒りと皇帝の顔付に変わっていた

……………

そして現在

ト「というわけで、犯人は拘束されてるっていうわけ、ちゃんちゃん」

テ「いや、端折りすぎだよトレーナー…、それにしてもどうしてあいつが犯人だってわかったの?」

ト「えつと最初は何が起きてるのかまったくわからなくて、本気できつかったんだけどさ、異変があった日の夕方、トレーナー室に行つた時にルドルフがいてさ」

……………

3日前、

私は、キタちゃんに嫌われ…なんか事あるごとにいろんな子に暴力を振るわれ…ウララに嫌われ…いやマジでウララに嫌われたの死にたくなった…

なんか悪いことしたかな…本気でへこむ…でもクリークとかテイ

オーはふつうだったんだよなあ…

そう考えながら、トレーナー室に向かっている時、ドアの前にルナが立っていた

ル「やあトレーナー君今日は大変だったね、ところで…」

あれ？ルナのやつ…なんかすごく怒ってないか？俺死ぬのか?!なにしたかわからないけどオワタ…

そう考えていたのが顔に出たのか、それを見たルナは

ル「安心してほしい、別に君に危害を加えるつもりはない、ひとまず生徒会室まで来てくれないか？」

あれ？大丈夫なのか…ひとまず…言われたとおりにすべきか…

ト「わかった…」

ルナに連れられ生徒会室に入った、エアグルーヴがお茶をだしてくれ、ソファに腰掛けるトレーナーと対面に座るルナ

ル「さて、トレーナー君、聞きたいことがあって、先ほど君の部屋の中で君を待っていたんだが…君の部屋に隠しカメラと盗聴器が見つかってね…」

ト「え？」

マジで？…誰が仕掛けたんだ…思い当たるとしたら…あいつか？

ル「君が思っている人物では、ないことは確かだ、彼女が仕掛けてたら、私もたぶん気づかないだろう」

ト「そ…そうか…」

ル「今日それが見つかって、そして君は今、色んな子に嫌われている…関係がありそうだとは思わないか？」

「さらに、アグネスタキオンから薬が盗まれたと報告が上がっているね、なんでも飲んだ人が嫌われるものらしいんだ」

ト「つまり…薬を盗んだ犯人が俺にそれを飲ませたと…でカメラや盗聴器をしかけたのもそいつだど？」

ル「その可能性が高いと思っている、そして一番怪しい人物も特定した」ツス

そしてルナは私に一枚の写真を取り出した

ト「…この人は、先輩トレーナーさん…どうしてこの写真を？」

ル「トレーナー君が暴力やいじめを受けているとサクラバクシンオーが聞いて、助けに入ろうとしたとき、彼が隠れて君を監視していることに気付いたらしい」

ト「それで証拠にもなるかもと写真を撮ったのか」

ル「そうみたいだ、ちなみに普通に助けに行ったり下手に行動したことでそいつに警戒されたらいけないと思ひ動けなかったらしい、本気で危なくなった時は行くつもりだったみたいだが、助けに行けなくて本当に申し訳なかったと彼女が言っていたよ」

ト「そうか…この話が終わったらバクシンオーのところに行くよ」
うちのバクシンオー妙に頭いいよなあ…賢さトレーニングさせまくっただけあるわな…この前速さを追求するために難しい本読んたし

ル「さて、これからどうする」

ト「ひとまず、これだけだとまだ証拠にもならないし、証拠集めするしかないだろうなあ…」

ル「そうだね…私も手を貸そう、今回の件は正直怒っているんだ」
ト「そつか…ひとまずチームはキタちゃん以外は大丈夫そうだし事情を伝えてくるよ」

ル「わかった、彼の動向や聞き込みなどは私やエアグルーヴに任せ
てくれ」

ト「すまない、助かる、エアグルーヴもありがとうな」

エアグルーヴ「気にするな、流星に貴様が可哀そうだからな」

……………

現在

ト「と…まあ…ルドルフと一緒に証拠集めが始まったわけですよ」
テ「ふーん、そうなんだあ…そのあとにボクたちが知ったというわけか」

ト「そうそう、んでまあ外の雑務はタイキやスキーが代わりにやってくれたり、食事の時は弁当にしてチームメンバーでトレーナー室で食事したりとみんな協力してくれたから被害は最小限だったなあ」

テ「そういえばキタちゃんは？」

ト「ああ…嫌われ薬の効果切れたとき、今までの記憶とか思いだしたら可哀そうだから、クリークに赤ちゃん返りさせてる…」

テ「ええ…」

ト「薬切れるまでクリークに任せてたらきつと大丈夫だと思うぞ？」

テ「記憶もだけど尊厳もなくしそうだねそれ…」

ト「だ…大丈夫…」

「で…証拠は順調に集まってきたんだよね、ただ」

テ「ただ？」

ト「決定的な証拠がなくてさ…そんな時、アグネスデジタルが持つてると聞いてさ」

テ「決定的な証拠を？何を持っていたの？」

ト「なんでも、最近タキ×モルやタキ×カフェにハマってるらしく、タキオンにお願いして、彼女のラボにカメラを設置してもらってたらしいんだよね」

テ「そ…そうなんだ…」

ト「で、盗んだ犯人がわかるかもと彼女にその録画データをもらいに行ったわけ」

……………

昨日

ト「なあなあデジタルさんやラボに設置してるカメラのデータ見せてくれないかい？」

デジタル「うげえ…なんですか？なんであなたに見せなきゃいけないんですか？いやですよ」

あちゃーやっぱ嫌われてるよ…尊いものを共有してきた同志だったのに、なんか悲しいなあ…

ト「頼むって…どうしても見なきゃいけないんだよ…」

デジタル「いやです…もう私にかかわらないでください…次関わつたらけりますよ」

ダメか…こうなったら仕方がない…こちらもあれを使うか

ト「ならデジタルさん、交換といかないか？俺が今からすごく尊い映像を見せる…だからさカメラのメモリーを貸してくれ」

デジタル「す…す…ごく…尊い…映像…しかたがありませんね…いいでしょう…」ジュルリ

そーいいデジタルはメモリーカードをトレーナーに渡した…

ト「交渉成立！ありがとうデジタル、じゃあ、みせるぞ」

トレーナーはウマホを取り出し、映像を流した

そこに映っていたのは1匹の子猫

デジタル「まさか子猫の動画ですか」ジー

ト「違う違う、まあ見てなつて」

………

子猫「ニャー」

？「おや？子猫か…」

そーいうと子猫に気付いたウマ娘

ブライアン「ふむ…」

ナリタブライアンだった、

ブライアンに近づく子猫、人懐っこい猫のようでブライアンの足元をすりすりしてきた

ブライアンはそのまま子猫を抱き上げた

ブライアン「…」

じつと子猫を見つめる

子猫「ニャー」

ブライアンは周りを少し確認し、

次の瞬間子猫を顔にすりすりしだした

ブライアン「もお!!可愛いなあー」ギュー

………

デジタル「!？」

あまりの出来事にデジタルは混乱した

………

す!!」ツダ

そういつた瞬間ブライアンがガチギレ状態で襲ってきた…

……………

現在

テ「トレーナーもよく生きてたよね？」

ト「こつちも命がかかってましたので…」

「ちなみに猫と戯れてるデーターは先ほど消されました」

テ「流石にね…」

ト「まあそのあとデジタルにもらったやつを確認したら、見事にこいつが薬を盗んでるところが映ったわけ」

「それと同時に、食堂で俺の飲み物に薬を入れてるのも確認とれた」

テ「これにて証拠が出揃ったわけだね…で…これどうするの？」

そう指さすテイオーそこには先ほど丸坊主にさせられたクズト
レーナーがぐったりしていた

ト「たずなさんに預ける予定、とりあえずルドルフ達がきつちりメ
たおかげかまだ起きないのか…」

ドアへコンコントレーナーサーン

ト「ほら来た」

たずな「トレーナーさんそれを受け取りに来ました」ニコニコ
物扱いかな？たずなさんもおこやんこわあ

ト「はいはいーどうぞー」

たずな「それでは失礼しますね〜」

そういい引きずられていくクズトレーナー…あいつたぶん死ぬ
なあ…自業自得だし…

ト「それにしても…」

テ「うん？」

ト「なんでお前らは薬が効かなかったんだらうな？」

テ「…」

……………

ラボにて

タキオン「ふむ：確かにあの薬は好感度をがつつり下がってしまう代物だった…」

「好感度を数値化したら1000がマックスと仮定しよう、ならその倍の数値2000下がって—1000になってすごく嫌われるはず…」

「だが彼女らはそれすら気にしないような、1000程度では表せないほどの数値だったのかもしれないね」

「なるほど実に興味深いね…ただ：薬は絶対だったはず、皆何かしら効果はあつたはずなのだが…」

「さて、私はこの好感度爆上がり薬から得た知識で作った惚れ薬をモルモット君に飲ませなくては」ククク

.....

生徒会室

シンボリルドルフは窓から外を見ていた。その先にはトレーナーがいるであろう、トレーナー室の方であつた

ル「：トレーナー君…」

その目は少し濁っているような気がした

ドアへコンコン

ル「入りたまえ」

？「失礼するわ、ルドルフお疲れ様」

ル「マルゼンスキーか…、ああ…今日は本当に疲れたよ…」

マ「あんなに取り乱して怒ってるルドルフを見たのも久しぶりだったわ」

.....

クズトレーナーに自白させた後

クズトレーナー「つぐう…もう許して…」

クズトレーナーの胸倉をつかみ、今でも殴り殺しそうな雰囲気のリドルフとそれを止めようと後ろから抑え込もうとするマルゼンスキー

ル「放せ、マルゼンスキー！こいつだけは許さない！私の…私のト

レーナーに手を出したんだ!!絶対許さない!!絶対に!!」

ル「ああ取り乱して本当にすまない…あの時は抑えてくれて本当にありがとう」

マ「いいってことよ、それにしても…薬のせいかしらね…」

ル「ん?なぜそう思うんだい?」

マ「あのトレーナーを問い詰めるとき、なんて言ったか覚えているかしら」

「私のトレーナー君って言ったのよ…」

ル「そ…それは…」

確かに…彼は私のトレーナーではない…だが自然と私のトレーナーと言ってしまった…

マ「それに、ルドルフ…あなたは普段トレーナー君に会いに行つて不在の時は、部屋に入らずドアの前で待っていたのに、なぜ今回は入ったのかしらね…」

ル「…」

普段彼が不在の時は、確かに部屋には入らず待っていた…ただ…今回は…それをいいことに…

マ「ルドルフ…あの頃の独占欲が戻ってきてるわよ」

そういう彼女はルドルフの胸ポケットから何かを取り出す、それは、あの不在の時拝借したトレーナーの私物であった…

ルドルフは下唇を噛みしめ…俯いてしまった…

きつと…私もだが皆、彼に対する思いや好意が変動したことで、昔あつたあの、どす黒いものが戻ってきたのだろうか…

目の前にいるマルゼンスキーもきつと…そして…テイオーも…

……………

その夜・学生寮

マヤノ「テイオーちゃん…あのね…トレーナーちゃんが見つからないの…」

マヤノトップガンは寝る前に同室のテイオーに相談をしていた、どうやら彼女のトレーナーが行方不明らしい、ちなみにメジロマツク

イーンのトレーナーである

マヤノ「必死に探したのに：同じチームのカレンちゃんと一緒に探したんだけど：どこにも見つからないの：マヤチンの事嫌いになったのかな：」グスグス

テ「そんなことないさ：きつと何かあったに違いないよ（主にマツクイーンのせいで）」

マヤノ「それに、トレーナーちゃん最近大人のお店にいったみたなの：なんでマヤチンがいるのにそんなお店に行くんだろう：ねえ：なんでだと思う？ねえ：なんでなんでなんでなんでなんでなんで」ハイライトオフ

あちやーマヤノがしつとりしでした：

あそこのチームはなかなか重たいなあ：

それにしても：懐かしいなあ：ボクもこんな感じになったときがあったっけなあ：

ただこのまま暴走させたら大変だよね：うーん：どうしようか：

テ「そ：そうだ：もしかしたらマツクイーンが知ってるかもしれないよ」

これでいいや：たぶん彼女のトレーナーに会えるだろうし：落ち着くはず

マヤノ「テイオーちゃん、それ本当？」

テ「きつと知ってるはずだよ、しらばっくれてもしつこく聞いてみてね」

マヤノ「テイオーちゃんありがとう、明日聞いてみるね」

そういうとハイライトが戻ったマヤノはそのまま自分のベッドに潜り込んだ

マヤノ「じゃあおやすみテイオーちゃん」

テ「うん、おやすみ」

そうして電気を消しベッドで横になるテイオー

テ「：」

テイオーは最近の事を思い出す、彼が薬を飲んだ日の前の日、彼は

酔った勢いで大人の店に行ったらしい、それをただ単に話し合いで問い詰めるつもりだったが、彼を見た瞬間暴力に、走ってしまった

それには理由があつた、あのまま何も考えず暴力に走らなければいけなかつた：

彼を見た瞬間、去年経験した、あのどす黒い気持ちが：

あんなボクにはもう戻りたくない：絶対戻つてはいけないんだ：

あんな事もう：

テ「トレーナー：」ボソ

絶対は今のボクだ!!あのころには決して戻らない、そう決意し、眠りにつくテイオーであつた

テイオーとトレーナーと新メンバー

あの薬の一件は犯人も捕まりましたして一件落着と…

ト「んなわけあるか!!」

テ「うわ?! 突然叫んでどうしたの?」

ト「薬まだ効果切れねーんだわ!! おかげこっちはチーム勧誘に支障きたしてて、マジでふざけんよ!!」

テ「あー大変だね…」

ト「今日もスペちゃん勧誘したらめっちゃ拒絶された。心が折れそうだ…」

テ「スペちゃん勧誘してたのね…」

ト「次にエルを勧誘しようとしたらプロレス技かけられて、その後グラスに襲われた」

テ「トレーナーもよく生きてるよね?」

ト「最後にミホノブルボンを勧誘したら、エラー、エラー言いながら爆発した」

テ「ええ…」

ト「マジで薬の効果いつ消えるんだよ…」
そうぼやく

テイオーは少し俯いた

テ「…」 ハイライトオ…

(コノママ…ボクガ…)

テ「っ!?!」 ブンブン

ト「うん? どうした? 急に頭振って」

テ「い…いや…なんでもないよ」

ト「…そうか」

なんかテイオーの様子がおかしい気がする…ちよつと警戒しておいた方がいいのか…?

ブブブブ

なんて考えていたら、ポケットに入ってるウマホが震えだす

ト「うん? 誰からだろう…あ…先生からか」

ウマホの画面には先生からのメッセージですと通知が来ていた先生とは、私が大学生のころからサブトレーナーまでの間、トレーナーとして色々教えてくれた人だ、

今では60歳になり、数多くの圧倒的な最強と言わしめたウマ娘のトレーナーとして活躍し生きる伝説といわていた

シンボリルドルフ、ナリタブライアン、ミスターシービーはもちろん、

昔はセントライトやシンザンなどのトレーナーでもあった

またトキノミノルのトレーナーであったという噂もあったとか…

そんな先生に中学生のころ憧れて、私は、トレーナーを目指していた

だが先生も今年60…身体が限界なのか、チーム活動を休止、

チームメンバーであったマルゼンスキーやタイキシャトルを預かってくれとお願いされ、今では私のチームにいる

そして最近休職になり、残ったルナやブライアン達はそれぞれ自主的に活動してる状況だったりする

そんな先生から久しぶりのメッセージ…一体なんなのか…

ウマホを操作し、メッセージを開く…

ト「マジか…ちよつとテイオー急用ができた…理事長室行ってくる」

テ「え？トレーナー？」

私は急ぎ理事長室へ向かった

……………

理事長室

トレーナーはドアをノックし返事があったのではいる

ト「失礼します」

そこには、理事長のやよいさんとたずなさん、先生のチームに所属していたウマ娘達そして、

ト「先生…」

先生「お？来たか坊主」

ト「相変わらずですね…これでも、もう27なんですけどね」ハハ

先生「いくつになろうが私からしたらお前は可愛い坊主だ」

素晴らしい笑う先生

ト「先生：トレーナーをやめるって本当ですか？」

そう悲しく先生に問いかけた

先生「私も歳には敵わなくなってきたな…もう潮時かかってな」

ト「そんな…」

先生「それに…」

私を見て近づいた

先生「新しい世代は若者に任せていいかなって思ったからさ」ニカ

素晴らしい笑顔で私の頭をポンとたたいてくれた：

先生「では、理事長。今までお世話になりました」

やよい「感謝!!前代から今までこの学園を支えてくれ本当に感謝する!!」

素晴らしい感謝と2文字書かれた扇子を開く理事長

先生「たずなも今までありがとうな!これからも坊主やこいつらの

事頼んだ」

素晴らしい頭を深く下げる先生

たずな「本当にやめてしまっんですね…」

彼女は笑顔だが目が少し赤かく声も少し震えていた

先生「ああ…すまん…」

素晴らしいたずなに近づき

イママデアリガトウ：アイボウ：

小さな声でたずなに耳打ちした：

そうして先生は出口の方へ振り向いたが、ふとたずなの方へ向く

先生「お：そうだ、たずな酒はほどほどにな、お前酒癖悪いんだからさ」

素晴らしいニタニタ笑う先生

たずな「大丈夫ですよ、ちゃんと自制して飲んでます!!」ツム
素晴らしいたずなさんはほっぺを膨らませてた

先生「そうか？坊主と頻繁に飲みに行ってるみたいだが、酒癖悪いってたまに愚痴ってたぞ」

おい!!くそ爺そればらすなよ!?

周りの目が痛い、特にウマ娘からの：視線がガガガ

あとたずなさんも笑顔だが怖いオーラーが見える

先生はそのまま私の方へドアの方へ向かった

すれ違いざま先生のトレーナー室へ来てくれと言われた

.....

先生のチーム室

あれからたずなさんとよくお出かけしてるとはこういう事だと、ルナを筆頭に詰められた

なんとか逃げ切り、あのクソジz：先生の部屋についた

ト「なんでバラしたんですか：めっちゃ詰められたじゃないですか!!」

先生「ハハハ、すまんすまん、それにしても、お前はモテモテだなあ、昔の私を思い出すわ」

ト「はあ：で：」

先生「そうそう、私が引退するから私のチームメンバー何人が引き継ぐ気はないか？」

「しつかりやってるし、良いチームだとタイキやスキーから話は聞いているしどうだ？」

すぐくうれしい話なんだけど：そんなに入れてないんだよなあ：

チームレースだってまだ2枠までだし：

先生「何も全員引き取ってほしいわけではない、それに最近トラブって勧誘がうまくいかないんだろ？」

確かに：嫌われ薬の影響で勧誘が非常にし辛い状況だし：ここは素直に：

ト「先生、ありがとうございます」

「では、数名勧誘させていただきます」

先生「おう！頼んだぞ!!」

.....
トレーナー室

今はチームはトレーニングへ行ってるので、部屋には私しかない
.....

さて：勧誘へ行きますか：しかし誰を勧誘するか：

ドアへコンコン

ト「はいどうぞー」

そう答えるとドアが開き一人のウマ娘が入ってきた

ト「ん？」

初めて見る顔だな：それにしても：で：でかい：スキーくらいあ
るぞ：

てか私の部屋に来るってことは薬の効果効いてないのか：効かな
いウマ娘もいるんだなあ：

ト「何か用かな？えつと：」

？「あ：あたし：お願いがありました：」

.....

数時間後中庭

ブライアン「.....」スヤア

ブライアンは生徒会の仕事をさぼって日向ぼっこをしていた
ザツザザ

足音が聞こえるブライアンは近づく足音に反応し起き上がった

ブライアン「なんだ：お前か：トレーナー」

ト「よっ！ブライアン！相変わらずさぼりか」

そういうブライアンの隣に座る、ブライアンは再び寝転んで日向
ぼっこを再開する

ブライアン「そんなところだ：ところでどうした？」

ト「単刀直入に言うと、お前を勧誘しに来た」

ブライアンは再び起き上がり目を見開いてこつちを見ていた
ブライアン「私をか？てつきり会長を勧誘するかと思ったぞ」

ト「うーん確かに考えたんだけど…テイオーにルドルフ以外の絶対的な強さを相手させて、経験させたいかなつと思つたんだ、チームレースとはいえ、1位は1人チームでも競うことになる」

「テイオーはルドルフを超えたいという目標がある、なら担当トレーナーとしてそれをかなえさせたい」

「だがテイオーは絶対的な強さつてやつをまだ知らなすぎる、シービーは海外へ行ってていない、なら彼女と同等またはそれ以上の存在は今ここにはブライアンお前しかない」

「だから力を貸してほしい…」

「素晴らしいトレーナーは立ち上がり頭を下げた

ブライアン「わかった…いいだろう…最近レースにも出てなくて、ちようどレースに出たいと思つていたんだ」

ト「そうか…ブライアンありがとう、これからよろしくな！」

「素晴らしいブライアンと握手をする

ブライアン「ただし、シンボリルドルフより先にテイオーを潰してしまつても文句はいふなよ？」

ト「大丈夫だ、逆にブライアンがテイオーに潰されるかもしれないぞ？」

ブライアン「いったな…その言葉後悔させてやる…」

こうしてチームに新たなメンバーが2人決まつた

2人？2人決まつたよ

……………

翌日 生徒会室

今日ルドルフはご機嫌だった、昨日自分のトレーナーが退職した非常に優秀で惜しい人物がやめてしまった

同じ志を持ち彼ほどのトレーナーはそうそういないだろう…と結構落ち込んでいた

だが昨日とは違い。今日のルドルフはご機嫌だった

それは昨日

.....
元トレーナー「坊主にチームメンバー数名引き継いでもらうことになった」

「彼に誘われたら前向きに考えてほしい」

そう元トレーナーが私たちに告げてくれた

.....

トレーナー君は中距離担当を1名探していた...

つまり...やつと彼が私のトレーナーになるときが来たのだ...

この時をどんなに待ちわびたか...彼が私のサブトレーナーだった時はたくさんの時間を彼と共有できた

だが彼がテイオーのトレーナーになった時、その時間はほとんどなくなり、当初は絶望したものだ...

だが...ついに...彼の事を私のトレーナーと堂々と言える時が来たのだ...

ル「フフフ...」

ルドルフが不敵な笑いをするのでエアグリーブはすごく気になり、どうしたのかと考え、わからずそして...

←エアグリーブのやる気が下がった

そんな時、作業していたブライアンが立ち上がる、

ブライアン「会長すまない、今日から生徒会の仕事は16時までになさせてもらう」

ル「どうしたブライアン？何か用事でもあるのかい？」

ブライアン「ああ、昨日テイオーのトレーナーと中距離担当で契約したから、今日からチームで活動するために、早めに切り上げさせもろう、ではまた明日」

ル「え？」

そう言ったあとブライアンは生徒会室を出て行った...

ル「え？は？」

ルナ「え…」涙目

トレーナーがルナから逃亡開始

オッス！オラトレーナー！

昨日ナリタブライアンともう1名をチームに入れ、中距離とマイルが2枠になりました

あとは、短距離とダートだなあって喜んでいました

さて、本日彼女らをチームに紹介したり、初練習をしなきゃと思つて張り切つてました

ですが今は、どうして逃げ回つてるのかな…

？「トレーナーどこお？」

しかも追っているやつが…

ルナ「トレーナー？ルナの元からどうしていなくなつちやうの？」
やべーよ！なんで？なんでルナちゃんになつてるのお?!私何かしたあ？

……………

1時間前

トレーナーはこれからの方針やトレーニング表などを作成して
いた

ト「…」カタカタ

うーん…ブライアンは差しか先行か…テイオーは先行だから…一緒つてのも…両方を臨機応変にやらせてみるか…

新しく来たあの子は…昨日一通り見させてもらったけど逃げもだけどそれより先行が得意そうだったなあ…

校内スピーカーへピンポンパン!!

スピーカーへエアグルーヴ「トレーナー大至急生徒会室へ来るように」

ト「うん？」

エアグルーヴの声か…なんだろう…

スピーカーへエアグルーヴ「繰り返し返します、トレーナーだいsちよつ…会長暴れ…マイクとら…」

ト「え？」

スピーカーの向こう側で何やら…

ドアへガチャ

ブライアン「こんにちは、トレーン」

スピーカーへルナ「トレーナー!!早く来てえー!!ルナ早くトレーナーに会いたいからトレーン…」

スピーカーへエアグルーヴ「………た…大変失礼しました…トレーナーは大至急生徒会室へ来ていただきませうお願いします、以上」

ト「」

ブライアン「」

「」

唾然とする3人：うん？3人?!

ト「あれ？いつの間にか来てたの？」

？「はい、ついさつき来ました。ただトレーナーさん忙しそうだったので声掛けずに、待つてました」

声かけてくれればいいのに…それにしても…何だろう…雰囲気少し…スズカに…いや…大丈夫だな!

ブライアン「トレーナー？この子も新しいメンバーか？」

ト「お…そうそう…昨日わざわざこの部屋に来てくれてさ、紹介するよ、彼女はd」

ドアへバン!!

テイオー「トレーナー!こんにちは!!あれ?ブライアンと…スカレット!?!どうしてここに？」

ト「ん?今日からチームに入ったんだ、ところでテイオー、ダイワスカレットの事は知ってたのか？」

テイオー「同学年だよ！」

同学年…

スカレット「?」ドン!

テイオー「?」ストン

トレーナーは無言で悲しくなりながらテイオーを撫でた…

テイオー「急にどうしたの？というか…なんで悲しい顔をしてるのさ…ちよつとお!!」モオーツテバ!!

そんなやり取りをしていたら

ブライアン「それよりトレーナー、早く生徒会室へ行った方がいいのでは？」

そうだった…でも嫌だなあ…

ト「はあ…仕方がない…行ってくるか…あつブライアンとスカーレット、ほいこれ」

素晴らしい2人にノートを渡す

ト「トレーニングメニューと方針が記載してるから、これに目を通して、軽く練習しておいて」

「あとテイオーもサポートよろしくな、んじや練習頑張つてな」

テ「任せて!さあさあ2人とも練習しに行こう!あとブライアン同じ中距離担当として、ボクがビシバシ鍛えてあげるぞよ」ニシシ

ブライアン「ふん…言うじゃないか…その余裕すぐにへし折つてやる…」

スカーレット「はい!よろしく願います」

さてとウマホと財布だけ持っていくかな…ウマホ…は…

ウマホへ通知件数323件

ウマホへブーブ 通知件数324件

みなかったことにしよう…

1 人生徒会室へ向かうトレーナーであった…

念のため、もしもの事があつて場合、逃げるときの脱出経路確保にメッセージ送るか…

メッセージを送ると、「お任せください!!」とだけ返ってきた

ついでに、数秒に1回来るメッセージをみたら

「トレーナーまだ?」

「ルナ寂しいよ」

「早く来ないとこっちからいくよ?」

「もう待てないよっ!」

などなど同じ内容が繰り返し送られてきている…いやこえーよ

生徒会室前につく、ドアの近くでエアグルーヴがぐったりしてる…
大丈夫かと近づくと…「あ…あとは…頼んだぞ…」
素晴らしい…ふらふらとどこかへ行った…たぶん保健室だな…

彼女がふらふらと歩くのを見届け、いざ生徒会室へ入ろうとドアに手を掛けようとしたその瞬間、

ドアが少し開きその隙間から、俺の手をつかむ手が…
呆気に取られていた一瞬私は…

生徒会室へ引きずり込まれ、ソファに投げ飛ばされた…

ドアへガチャ

彼女はすぐさまドアにカギをかけそして…

猛ダツシユで俺の元へより…

ルナ「トレーナーエへ…」ギユ

私に抱き着き、私の胸に顔をすりすりしだした…

ト「ルナ…一体どうしたんだい…あと少し離れよ？」

ルナ「ヤダ！トレーナーと一生こうする!!」スリスリ

うーん…困った…とりあえず理由をきかねば…

ト「えつと…どうしたんだい？…早くチームの練習見に行きたいし
さ、俺を呼んだ理由を教えてください？」

そういうとルナはぴたりと止まった

ルナ「チーム…」

ト「ん？」

ルナ「えつとね…トレーナーなんでルナじゃなくてブライアンを
チームに入れたの？」

ト「そ…それは」

ルナ「ルナね、トレーナーに勧誘されることを今日ずっと待ってた
んだよ？なのになんで昨日すぐにブライアンを勧誘したの？」

「なんでルナじゃないの？ねえ…なんで？」

「なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なんで？なん
で？なんで？」ハイライトオフ

やばい…めっちゃしつとりしだした…

ルナ「もしかして、ルナの事嫌いななの？ルナはトレーナーの事大好

きなのに…」

ト「そんなことないぞ…」

ルナ「じゃあなんで、ルナじゃないの？」

ト「そ…それはだな…カクカウジカジカ」

(前話にて、ブライアンに話した内容をそのまま伝える)

ルナ「ふーん…」

ト「えつと…わかてて「テイオーなんだね」え？」

ルナ「いつもテイオーの事ばかり優先するんだね…ルナの事考えてくれないんだね…」

ト「そ…そんなことは…」

ルナ「ルナのが先にトレーナーと知り合ったのに…一番最初にトレーニング頑張ってきたのにね…」

ト「あれは…俺が高校生のころであつて…トレーナーではなかったし…」

ルナ「でも、ルナのが全部先だったのに…どうしてトレーナーはルナのトレーナーになってくれないの？」

「だからね…トレーナーがルナの物になってくれるまで…もうずっとこのまま…」

あかん…マジでやばい…ひとまず…状況が悪化するけど…色々とやばいから逃げよう

そうしてトレーナーは大きく息を吸い

「バクシンオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

サクバクシンオーを呼んだ!!

ルナ「ねえ…どうして他の女の子の名前をよb ドアへガチャ!!?」

閉まっていたはずのドアが少し開き…そこから何かが入れ込まれる…

次の瞬間…何かが爆発し、ルナが驚き私から離れた後、生徒会室がスモークで充満され視界が遮られた

ルナ「ケホケホ…トレーナー!?!どこお!見えないよ!!」

ト「よし!!今のうちに!!」

素晴らしいトレーナーは立ち上がろうとする…

だがトレーナーは立ち上がる前に抱き上げられていた、バクシンオーに

バクシン「さあトレーナーさん助けに参りましたよ！」

ト「バクシンオー助かったよ」

バクシンオー「では、どこまで行きましようか？」

ト「ひとまず、バクシンオーにもトレーニングノート渡したいし、トレーナー室まで」

バクシンオー「わかりました!!それでは、バクシン!!」

そーいい私を抱き上げたままトレーナー室まで駆けて行った

ルナ「トレーナー…やっぱ逃げるんだね…もうルナ怒った…絶対にルナのトレーナーになってルナだけのものにするんだから」ハイライトオフ

逃亡中へ続く

トレーナーはルナから逃走中

トレーナー室へ戻り

バクシンオーにトレーニングノートを渡し、トレーニングへ向かわせた

ちよつと心配はしていたが

バクシンオー「トレーナーさんがもしピンチになっても、学級委員長
の私ならすぐに駆け付けられるから：まあ大丈夫ですな！」

と自分で納得しトレーニングへ向かっていった

学級委員長「つてすごいなあ：

さて：私は：逃げるか！

とりあえず匿ってもらえる当てがあるのでそこへ行くことにした

ただ：まだ嫌われ薬の効果が切れてないんだよなあ：

ダメ元か：最悪怪我するかもなあ：

そう考えながらそこへ向かおうと廊下にでると

ドドドドドドド

うん？何の音だ？

音が出る方を見ると：

ルナが：全速力でこつちに向かつて走ってる：

なぜかエアグルーヴを引きずって：

ルナ「トレーナーアアアアアアアアアア」ドドド

エアグルーヴ「：カイチヨ：トマツテ：」ズルズル

反対側の廊下走っても絶対逃げ切れんやん：

なら：

トレーナーは自分の部屋に戻りカギを閉めドアの後ろに本棚と机

を倒し：

そして、窓から逃げた：

トレーナーは窓から出て当てがある場所へ走って向かう

途中、せつかく簡易的に作ったバリゲートもむなしく、トレーナー室

からドアとバリゲートが破壊される音が響いた：

3分ももたなかったか：

ルナ「トレーナーどこお？」

「トレーナー？ルナの元からどうしていなくなっちゃうの？」

エアグルーヴ「…カイチョコ…ウ…」バタ

エアグルーヴは力尽きた

やる気が絶不調になった

.....

マックイーン（トレーナ）の部屋

※ここではマックイーン達は

マックイーンのトレーナーをトレーナーと呼び

テイオーのトレーナーはゴミだのアレだの悲しい呼び名になります

マックイーンのトレーナーは今、

彼のチームメンバーにめっちゃ抱き着かれて困っていた

マ（ト）「あの…皆さん…もうそろそろ離れてくれませんか？（理性がきつい…）」

「…いや（ですわ）」

マヤノ「トレーナーちゃんマヤにもつとギューとして」ギュー

ライス「あ…マヤノさんずるい！お兄様ライスにも！」ギュー

マックイーン「まったく…お二人とも…私のトレーナーを取らないでいただけませんか」ギュー

マックイーン（ト）「（ここに…エデンがあつたんだなあ…やっぱ口体系って最高だZ E ☆）」

相変わらずロリコン変態なマックイーン（ト）…でも、こいつめっちゃイケメンだから解せぬとテイオーのトレーナーは毎度思う

なおそんないちやいちゃした空間でも動じず無言で本を読むサトノダイヤモンド

サトノ「…」ペラペラ

そんな時を過ごしていたらマックイーン（ト）のポケットに入ってたウマホが震える

マックイーン(ト)「うん?メッセージ:あいつ(テイオーのトレーナー)からか」

メッセージを見てみると

来週 叙々苑 おごる 重馬場 匿って 頼む

と送られていた

彼は了承とだけ送り

マックイーン(ト)「マックイーンさんその窓を開けてもらってもいいですか?」

マックイーン「ええ:わかりましたわ」ガラガラ

マックイーンはなぜ開けるのかわからないが指示されたとおりに開けた

窓を開いた瞬間!!

トレーナー「お邪魔します!」

2階にあるこの部屋にトレーナーがよじ登ってきた

マックイーン「キャアア!?あなたどこからいらっしやるの!」

トレーナー「誰にもばれずにここに来ようと思ったたらここよじ登るしかないから仕方がない」

あまりの出来事にポカーンとするマックイーン

マックイーン「:っは、それよりも!!ここであつたら100年目ですわ!!今日こそわたくしにボコられなさいませ」ボコボコデスワ

素晴らしいロツカーからバットを取り出すマックイーン

ライス「刺していく:刺していく:」ツス

勝負服の装飾品の短刀を構えるライス

マヤノ「テイオーちゃんには、悪いけど:それでも見てるだけでなんかむかつくし、私のトレーナーちゃんの悪影響だからおとなしくやられてね?」

構えるマヤノ:その構えアメリカ陸軍格闘技じゃね?

サトノ「見てるだけで気分が悪いので、グランド行って練習してきます、キタちゃんはなんでこんなゴミみたいなトレーナーを選んだんでしょう:」

素晴らしい部屋の外へ出るサトノダイヤモンド:正直傷ついた:め

げるわ…

トレーナー「ちょ…タイム！タイム！匿ってもらいに来ただけだから今回は見逃して!!」

マックイーン「だめですわ!!私のトレーナーさんの部屋に来るなんて…本当に虫唾が走りますわ!!お覚悟なさいまし!!」

そういうこちらへ全力で向かってくるマックイーン達

だがトレーナーの前にマックイーン（ト）が割り込む

マックイーン（ト）「みんなストップ！ストップ！」

マックイーン「トレーナーさん止めないでくださいまし！」

ライス「お兄様どいて！そいつ殺せない！」

マヤノ「トレーナーちゃん…どうして止めるの？」

マックイーン（ト）「みんな落ち着いて…俺の親友にそんなことしないでくれ…今日ばかりは協力してほしいんだ…頼む…」

そういう深々と頭を下げるマックイーンのトレーナー

流石にマックイーン達も大好きなトレーナーには嫌われたくない

苦虫を噛み潰したような顔しつつ

マックイーン「わ…わかりましたわ…トレーナーさんがそこまで言うなら…」

「ですが…もし何か変なことしましたらボコボコにしますわ!!」

素晴らしい…マックイーン達はテイオーのトレーナーを警戒しつつ離れて行った

たぶん近くにいたくないんだろうなあ…まあ蹴られるよりかはましかな…

トレーナー「マックイーン（ト）ありがとうな…」

マックイーン（ト）「別にいいよ親友だろ？あと叙々苑の件よろしくな!!」

トレーナー「おう！任せろ！」

………

10分後 マックイーンのとトレーナー室

ドアへドンドン！

行突破か!?

と思った矢先、ドアが開いた…そこから出てきたのは…

ル? 「メジロマックイーン…」

マックイーン「会長さん急にドアを叩かれてびっくりいたしましたわ、本日はどのようなご用件でしょうか?」

ル? 「メジロマックイーン、すまないがそこに私のトレーナーは来てないかい?」

マックイーン「あら? 貴方のトレーナーは、先日引退なさったはずでは? 生きる伝説と言われた彼の引退、衝撃的でしたわね、ちなみにおばあ様もそのことを知り、彼を追いかけようとして今メジロ家では大変なことになってますわよ?」

ル? 「すまない…彼の事ではない…」

マックイーン「あら? 誰でしょう…まさか、テイオーの、トレーナーさんでしょうか」

ル? 「その通りだ…あとなぜテイオーのを強調しているんだい?」
マックイーン「お気になさらず、彼ならここにはいませんわよ?」
ル? 「そんな事あるはずない! ならどうして彼の匂いとその部屋からするんだ!？」

マックイーン「あら?…さつきまで私のトレーナーさんとお話してもしてたのでしょ? 今はいませんわよ」

ル? 「そ…そうか…疑ってすまなかったな…では…」

ここで無理に押し通そうとしても、トラブルが起きたりするかもしれない、まだある理性が止めている…この場を後にしよう…別の方法で彼を捕まえよう

マックイーン「全く…私のトレーナーさんも困ったものですわ…なぜあんなクズと…」

ルナ「は?」

逃亡の果てにへ続く

トレーナーはルナから逃げれないのか？

どうも

トウカイテイオーのトレーナーです

ドカ！バキ！ドオン！

隣にいるこいつは、マックイーンのトレーナーです

こいつは学生からの付き合いで同期で親友です

ドン！ズドン！バキ！

今私はルナに追われていたので、彼の部屋で匿ってもらっています

ズドン！ドン！ドドン！ガシャーン！

ですが、ルナは居場所を突き止めこの部屋の前まで来ました…

なので、マックイーンに対応してもらったのですが…

ドン！ドン！ドカ！バキ！ガシャーン！ドシャーン！

対応ってなんだっけ…

彼女は今…

ルナ「トレーナーの悪口を言うなあああ」シュツ

マックイーン「そっちこそおおお」ブン

屋上で死闘を繰り広げていた…

いやウマ娘同士のガチのやり合いはまずいって…

轟音がこのトレーナー室まで届いている…

どうしてこうなった…

両トレーナー「はあ…」

……………

30分前 マックイーンのトレーナー室前

ルナ「今なんて言ったの？」

マックイーン「どうなさいました？」

ルナ「今なんて言ったのかと聞いているの!!」ドン

そう叫び床を勢いよく踏みつける彼女の足元にある床に亀裂が走る

マックイーン「私のトレーナーさんも困ったもので…」そのあと!!」な

ぜあんなクズ 「っ！」ドン!!」

もう一度踏みつけ床がさらに割れる

ルナ「なんで、ルナのトレーナーの事を悪く言うの？」

マックイーン「はい？あんな奴クズで構いませんわ！（ルナって誰かしら…）」

ルナ「ルナのトレーナーはクズじゃないもん!!」

マックイーン「それより…会長…ルナって…のトレーナーのが…っえ？」

ルナ「貴方のトレーナーの方がロリコンだし、変態で気持ち悪いじゃん！ルナのトレーナーよりクズだもん！」

マックイーン「は？」ドン

その言葉を聞いた瞬間マックイーンは、マックイーンのリレーナールームとは反対側にある壁を殴った

壁は粉碎し…その壁の部屋でいちやいちゃしていたナイスネイチヤとそのトレーナーが晒された…

ネイチヤ「キヤアアアア！え…なんですかこれ…」

ネイチヤと彼女のトレーナーは顔を赤面させつつ…この異様な光景に混乱しながら固まる

マックイーン「誰のリレーナーが変態で気持ち悪くてクズでゴミですって」ワナワナ

ルナ「そこまで言っていない！でもそうじゃん!!」

「小さい子が大好きなんておかしいもん！」

マックイーン「は？」ブチ

マックイーンは目にハイライトも消え、青筋を立て

マックイーン「ここじゃ死人が出ますわ…屋上へ行きませんか？

…ひさしぶりに…キレちまったですわ…」

………

現在

ルナ「オラアアアアア」ドガ

マックイーン「ナンノオオオ」ドン

ドン！ドガ！ズドン！ドガシャーン！

かれこれ30分は経ったのだが…

まだ死闘が繰り広げられているらしい…

てか屋上めちやくちやになつてそう…

後始末どうしよう…

マックイーンのトレーナーも彼女らを心配しているみたいだが、行っても返り討ちにあうか巻き込まれて最悪死ぬ…なのでどうしたものかと苦笑いしている

マヤノとライスは恐怖してマックイーンのトレーナーにしがみついて震えている

ズドン！ドン！ドン！！…

最後のすごい大きな音が鳴り終わると、静寂が戻ってきた…

終わったのかな…

マックイーンのトレーナーは立ち上がり

マックイーン(ト)「ちよつと様子を見てくるよ…マヤノとライスも付いてきて、トレーナー君はそこにおいて」

素晴らしいマヤノとライスを連れ外へ

数分後…

マックイーンのトレーナーが帰ってきた、なぜかすごく申し訳なさそうな顔をしていた

マヤノとライスと…ボロボロになったマックイーンと…ルナが入ってきた…

なん…だ…と…

トレーナー「ど…どうして…うお!？」

そうつぶやくが次の瞬間タックルされた…ルナに

ルナ「ルナのトレーナーやつと捕まえた！」ギュー

めっっちゃ抱きしめてくる…苦しい…背骨折れるううううう

マックイーンがなんか笑顔だ…その後ろで彼女のトレーナーがめっっちゃ平謝りしてる

トレーナー「ど…どうして…」

マックイーン「会長さんと拳を交わらせていくうちに友情が芽生えましたの！」

「あと話しているうちに、会長さんの恋を応援したくなりましたわ!!」

この駄目ジロめ…

ルナ「さあトレーナー行くよー」ギユ

こうして私はルナに捕まった…

トレーナー「」

……………

夕方廊下

あーチームの練習見に行きたかったなあ…

ブライアンやスカーレットの練習見たかった…

特に、ブライアン…テイオーとどんな感じで練習したか見たかった

…

並走とか、レースとかしたのかなあ…結果とか気になる…

ルナ「♪」

鼻歌を歌いながら上機嫌なルナ

トレーナー「…」

今連行されている…どこへ行くのだろうか…監禁されるのかな…

困ったなあ

逃げようがないし…バクシンオーを呼ぶしかないか…

などと…逃げる方法を考えているトレーナー

ルナ「ツム」ピタ

進行先の何かに気付き、ルナが止まった

トレーナー「？」

私はルナが見つめてる先を見た…そこには

？「…助けに来たよ、トレーナー！」

トレーナー「テイオー…」

そこには、私の相棒、トウカイテイオーが立っていた

練習が終わってからずっと俺を探していたのか、

まだ練習着のまま、汗をかいており、少し息が上がっていた

そして…私は気づいた、彼女の目の奥が少し濁っていることに…

おまけ

キタサンブラックは

……………

寮、スーパークリークとナリタタイシンの部屋

クリーク「はあい、キタちゃん、ちゃんとミルク飲んでいいこでちゅね」

キタサン「…」ゴクゴク

今クリークはキタサンをトレーナーが飲んだ薬の効力がなくなるまで、赤ちゃん返りさせられていた…

ちなみに同室のナリタタイシンはそれまでの間サトノダイヤモンドのところへ引越している

キタサン「…」ツプ

クリーク「飲んだ後ちゃんとゲツプもしていいこいいこ」ナデナデキタサン「キャツキャ」♪

果たして、薬の効力がなくなった時、キタサンはいつものキタサンに戻るのだろうか…

おまけ（重馬場）

薬の効効果が効かなかった理由

……………

新しくチームに入ったダイワスカーレット

トレーナーは彼女と面識なく、そう言ったウマ娘にも殺される勢いで薬により嫌われていた

だがなぜか彼女だけ薬の効効果が効かなかった1人である

スカーレット「初めてのトレーニングなかなか悪くなかったわね、ただトレーナーが不在だったのは少し残念だったわ…」

彼女はチームに入り、初めてのトレーニングを行った

トレーナーが作ってくれたトレーニング表はなかなかいいもので、

すごくためになると実感できた

同じマイル枠のマルゼンスキー先輩と並走：私より圧倒的に早かった

私も負けずと本気を出し久しぶりにトレーニングで心が燃えた気がした

このチームに来て正解だったと実感する：

それに：

スカーレットは寮の自室に入る

スカーレット「ただいま：」

ただいまに対し返事がない

それもそのはず同室のウォツカは、アメリカへ行っており現在には不在

では、誰に：

スカーレットが部屋の明かりをつけるとそこには：部屋の壁一面、トレーナーの写真が貼られていた

スカーレットはそのままベットに飛び込み：

トレーナーの写真がプリントされている枕を抱きしめた：

スカーレット「ふふん♪：トレーナーさんの一番は私なんだから」
ハイライトオフ

どうやら効かなかったわけではなく

好感度がガッツリ落ちる程度の薬では、しつとりする程度のウマ娘だったようだ：

テイオーとトレーナーとルナ

テイオー「助けに来たよ、トレーナー！」

トレーナー「テイオー……」

ル？「テイオーすまないが、そこをどいてくれないか？これからトレーナー君に用事があるんだ」

テイオーの前では、会長としてふるまいたいのか、ルナからルドルフに戻ってる……

テイオー「えーカイチョー、せっかくあつたんだし、お話ししようよ」

そういいニシシと笑うテイオーだが目は笑っておらず、その瞳には殺意すら感じる

ル？「すまない……これから用事があるから構ってあげられない……」

ルナはテイオーに進行の邪魔をされて少しイラついているようだ

テイオー「そっか、でもねボクもカイチョーに用事があるんだ」

食いつくテイオー

ル？「……私には用がない……テイオーどいてくれ……」

テイオー「ダメだよ……ボクの用事が最優先なんだ」

ル？「しつこいぞ！テイオーそこをどけ！これから私のトレー」「違う!!」は？

テイオー「カイチョーのトレーナーじゃない！彼はボクのトレーナーだ!!」

「カイチョーの方が付き合いが長くても！ボクがまだカイチョーやブライアンより弱くても!!」

「彼はボクのトレーナーだ!!」

ル？「ッ……」

テイオー「カイチョー……今……彼が欲しくて仕方がないんだ」

ル？「当たり前前だ……私は彼が……好きなんだね」 つ……

テイオー「わかるよ……ボクだってそうさ」

「好きで、好きで……でも自分の物にならない……すごくつらいよね……ボクだってそう思ってた事があつたよ」

素晴らしいながらテイオーは近づく目にはハイライトがなくなっていく…

テイオー「でも、自分の物にしようとして、今やろうとしてるような事をしてダメなんだ…トレーナーは手に入るかもしれない…」

「それでもトレーナーが欲しい、ボクもそう思ってた時もあった…でも去年…ボクは暴走して、トレーナーを…」

素晴らしい…少し俯いたテイオー

テイオー「そして気づいたんだ、こんなことをしたら、ボクやカイチヨウがそしてみんなが大好きだった優しく、時に馬鹿なことを言い合ったり、ボクたちのために一生懸命なトレーナーは、一生手に入らなくなるんだって」

「それに、自分がよくても、周りを不幸にしてしまう…」

その声は、少し震えていた…だがすぐに顔をあげる…

テイオー「だからボクは二度とこんなことをしてはいけない！させてはいけないって決めたんだ!!」

先ほどまで濁っていた目ではなく、その目には決意を宿していた

私は、その決意を聞いて…去年シニアの時を思い出した…テイオーにされた事を…

それを許し、これからも共に頑張ろうと約束した判断は正しかったの…テイオーが大人になったなあと感じ感動した…涙が出そうになったが耐えた…心が大人になったんなら身体も…テイオーが一瞬睨んだきがする…

ルナは…「チガウ…ソレデモ…ルナハ…」とブツブツ俯いてつぶやいている

テイオー「それに、カイチヨウ言ったよね、ウマ娘誰もが幸福になれる時代を目指したいってこんなんじゃないよ」

ルナ「うるさい！うるさい！うるさい！何がわかる！ルナがどれだけ我慢してたか…テイオオオ！」

痛いところを突いたのか、我慢の限界が来たのか、テイオーにつかみかかろうとする

トレーナー「おい！やめ」

私がそう言おうとした瞬間

？「シンボリルドルフさんダメですよ」

誰かが横切った…次の瞬間テイオーに向かって行つてたルナが倒れた

彼女の元に立っていたのは…たずなさんだった

たずな「トレーナーさんのお部屋の現場確認、エアグルーヴさんを保健室に連れて行ったり、屋上の現場確認をしてて、遅くなりました、すみません…」ペコリ

トレーナー「い…いえ…たずなさん助けに来てくれてありがとうございます…ございます」

たずな「では、私は今からメジロマックイーンさんにも屋上や壊した壁について、お聞きしなきゃいけないので失礼しますね」

「トレーナーさんは、またあとでお話ししましょうね♪では、トレーナーさんテイオーさんお疲れさまでした」

素晴らしいルナを担いでマックイーン（ト）の部屋に行つた

またあとでつてことは…今日も飲みかな…

そうして、残された、私とテイオー

テイオーは、ぺたんとその場に座り込んだ

テイオー「あははは、腰が抜けちゃった…」

素晴らしい笑うテイオー私もつられて笑いそうになるが我慢し背中を差し出す

トレーナー「ほら、つかまれ」

テイオー「うん」ギユ

テイオーをおんぶし、歩いていると

テイオー「トレーナー」

トレーナー「なんだ？」

テイオー「今日ねブライアンと模擬レースしたんだ」

トレーナー「そっか…どうだった…」

テイオー「ボク全く勝てなかった…クラシック3冠とって春も秋のシニアも3冠取って無敗だったのに…ブライアンには歯が立たなかつたよ…」

延期してもらった

.....

次の日

うーん…昨日はたずなさんと飲みすぎたな…

昨日の事情はちゃんと伝えたけど、あんなに酔ってたら忘れてそう

…

さて、ルナとの一件が終わった…さてとどうしたものかね、私事態はあまり怒ってないが気まずいよなあ

などと考え事してたら、普通に校門から何も対策せず来てしまった

…

あ…やべえ…最近は誰にも会わないために裏口から来てたけど…

あいつら以外のウマ娘に見つかつたら何されるかわからない…

冷や汗をかき、もう一度引き返して…裏口に戻ろうとした時

？「お…おはようございます…」

振り向くとそこには、今にも泣きそうな顔をしたスペシャルウィークがいた

トレーナー「スペちゃん…」ツバ

今まで罵声やらされた事を思い出し身構えるトレーナー

その動作を見たスペシャルウィークは

スペ「うえええん…ト…レ…ナーさ…うえ…ごめん…な…さい…」

グスグス

トレーナー「え？」

突然のスペちゃんの号泣にびっくりするトレーナー

流石に周りに観られたら気まずいつてかまずいと思ひ、あたりを見回すと、なぜか私を見て泣いてるウマ娘が…

ま…まさか…薬の効果が…切れたのか…

ひとまずスペちゃんに薬の効果だし、怒ってないし大丈夫と伝えるも、

なかなか泣き止まず、大変だった…その後が大変だった…

ウマ娘に出会う度に泣かれるし、すごく謝ってくる

.....

エル「あ…トレーナーさん…」

グラス「トレーナーさん…」

トレーナー「エルとグラス…」

エル「エル…トレーナーさんにひどい事たくさんしてしまい本当にゴメンなさい…」グラス

グラス「トレーナーさん…誠に申し訳ございません…」ドゲザ

トレーナー「ちよ…グラス…土下座しなくても…エルも泣くなつて…怒つてないからさ!!大丈夫だから!」

グラス「…本当にすみません…トレーナーさん…」ナミダメ

トレーナー「これからも仲良くしてくれたらいいからさ!な!」

エル「グス…ハ…ハイ…」

グラス「…グス…はい…」

トレーナー「じゃあ俺はこれ「あ…あと」ん?」

グラス「私がノーパンだの…僧侶の衣装着てるけどザキやザラキなどの死の呪文しか使えないだの…淫乱だのと噂をエルと流してた件でお二人にお話が…」ニツコリ

トレーナー・エル「」

.....

アグネスデジタル「トレーナーさん…尊いものを共有してた同志なのに…傷つけて本当にごめんなさい」ドゲザ

ここでも土下座か…

トレーナー「デジタル…まあ暴力振るわれてないし、そんなに実害なかったしさ!全然大丈夫だよ!気にすんな!」

「それよりさ…昔エアグルーヴとき、ものすごく怖い映画を見た後の反応を動画でおさm」

?「ブライアンが言ってた通りやはり消してなかったのか…」

トレーナー「やば…」

.....

トレーナー「!!」キピーン

トレーナーは咄嗟に後ろからくる蹴りを避けた、蹴ったのは

マックイーン「テイオーのトレーナーさん！ここであつたら百年目ですわ!!」

クズ呼ばわりはしなくなったから効果はきれてるんだよね？

トレーナー「マ：マックイーン!? どうして!？」

マックイーン「貴方のせいで、今週朝は清掃活動、放課後は屋上の掃除になりましたの!! おかげでわたくしのトレーナーさんとのデートも中止ですわ!! 許しませんわ!!」

トレーナー「ええ…」

………

などなど他にもモブの女の子にすぐ泣かれたり、謝れたりされたハルウララにも泣いて謝られた…逆に私が耐えれなくなつて号泣してしまつた…

泣くの見るとなつてなんかこっちのメンタルがきつい嫌われで罵倒や暴力振るわれてた方が楽な気がする…

まあ…これから関係修復に努めたらいいか…大変だけど頑張ろう

…

そして、へとへとになりながら…

トレーナーは自分の部屋に行くと、かつてドアがあつた場所の前でルナが申し訳なきさそうに待っていた

テイオーとトレーナー、一難去つて

キタサン視点 放課後

キタサンブラックはいつものように授業を終えトレーナー室へ向かっていた

ただよくわからないがここ一週間程、授業を欠席していたという事実

なぜ欠席していたのか思い出そうにも彼女はここ最近の記憶があいまいで思い出せないでいた

キタ「私…どうしたんだろう…」

ダイヤちゃんに聞いても教えてくれなかったし…

他の友人にも聞いても同じだった…

ただ…今日の朝起きる前の記憶をあやふやだが覚えてはいた…

放課後自主練をした後に、クリークさんがやってきて…

キタ「この後が…思い出せない…」

そういえば自主練？なぜ自主練してたんだろう…トレーナーさん達とトレーニングすればいいだけなのに…

トレーナーさん…あれ？トレーナーさん…なんだろう…よく覚えていないけど…

キタ「トレーナーさんに謝らないと…」

なぜだろう…トレーナーさんに謝らないといけない…そう…思う

…

……………

トレーナー視点 グラウンド

トレーナーと休憩中のテイオーはベンチに座って練習を眺めていた

テイオー「トレーナー今日もいい天気だねー」

トレーナー「そうだなあ」

テイオー「トレーナーあそこ見て見て」

トレーナー「エルが薙刀持ってるグラスに追われてるなあ」

テイオー「平常通りだねー」

トレーナー「そうだなあー」

テイオー「チームの皆、今日も元気に練習してるねー」

トレーナー「そうだなあスカーレットもスキーと並走トレーニング頑張ってるルドルフがタイム計ってるなあー」

テイオー「クリークは今日から復帰するキタちゃんを待ちながらストレッチしてるね」

トレーナー「あっちでは、ブライアンが筋トレしてるな次一緒に並走な」

テイオー「うん！わかったよ！あそこではタイキはバクシンオーとダートで足腰鍛えてるね」

トレーナー「そうだなあー」

テイオー「ところでさートレーナー」

トレーナー「なんだい？」

テイオー「どうして練習にカイチョーがいるの？」ニコニコ

トレーナー「…」

テイオー「ねえ…なんで？」ハイライトオフ

トレーナー「えつと…色々とあって…サブトレーナーとして…」

テイオー「色々って何？」ガシ

テイオーはトレーナーの腕首をつかむ

トレーナー「強く握りすぎ…痛い折れる折れるうわかった話すから

！いったん離そう!!」

「今日朝俺の部屋に来た時ルドルフがいて…」

……………

回想 朝、トレーナー室前

ル「トレーナー君…」

トレーナー「ル…「本当に申し訳ございません」え？」

ルナは、トレーナーに頭を下げ謝った

ルナの身体は震えていた

ル「ほんとうに？」

トレーナー「ああ…いつになるかわからないけどさ…」
ル「じゃあ…」

ルナは笑顔で私にある提案をした

……………

トレーナー視点 現在

なんて、テイオーに全部言ったことがルナにばれたら後々面倒だし
ここの部分は端折るか…

トレーナー「ルドルフは3枠目が空いた時に誘うって約束したんだ
けどさ」

テイオー「え？そうなんだ！カイチョーと一緒に走れるんだ！」

トレーナー「ただ…3枠目を増やすためにはレースに勝たなきゃい
けないだろ？」

テイオー「うん…」

トレーナー「んでルドルフがより勝利が確実になるために私もサブ
トレーナーとして皆を支えたいと言い出して…」

「最初は申し訳ないと思いつただけ…どうしてもって言うてき
かなくて…まあそこまで断る理由がないし、いいかなって」

テイオー「あートレーナーってそういうときの押しには弱いよ
ねえ」

トレーナー「強くなりたいよ…」

テイオー「そこも含めて良いところだと思うよ」

トレーナー「そうかなあ」

うーんそんなもんなのかなあと考える

？「ト…トレーナーさん！テイオーさん！」

呼ばれたので、振り返ると、そこにはキタちゃんがいた
クリークに効果切れたからと伝えたその日に復帰だもんなあ…大
丈夫かな…

テイオー「キタちゃん…こんにちは!!」

トレーナー「や…やあ…キタちゃん」

キタちゃんは、悲しそうな顔をし、私に聞いてきた

キタ「トレーナーさん…あの…私…トレーナーさんに何かひどいことをしたのに…覚えてなくて…」

トレーナー「…」

流石に全部忘れるって都合のいい事はできないか…

隠し通せるわけもないし…誰かに言われるより、私が言った方がいいよな

怒ってないことや悪くないと伝えれるし…

トレーナー「キタちゃん…実はな…」

……………

ルドルフ視点

彼のチームのサブトレになったルドルフは、ダイワスカーレットとマルゼンスキーの練習を見ていた

だがトレーナーの方で誰か来たみたいだからそっちの方を見た

ん？キタサンブラックか…トレーナー君が深刻そうな顔をしているということはおおかた藪の件を話しているのか…

トレーナー君が何か伝え、それを聞いたキタサンブラックは、シヨックを受けた顔になる

次第に、悲しそうな顔になり、トレーナー君に頭を下げて謝っていた

トレーナー君はそんなキタサンブラックを落ち着かせようと必死に何か言ってる

ル「まったく、彼は優しいな…」

そうつぶやく

？「そうですね」

後ろから声が出た後ろを振り向くとそこにはダイワスカーレットが立っていた

ル「やあ…君はダイワスカーレットだったね…トレーナー君のチームに入ってくれて感謝するよ」

スカーレット「いえ、とても気になっていたチームだったので…」

ル「そうか…よろしく頼むよ（…これは…なんていうか…彼女と纏っている雰囲気似てる）」

ルドルフは…スカレットを見て…何かに気付いた…

スカレット「はい！これからよろしくお願いします」

素晴らしい練習に戻るスカレット

ル「ライバルが増えたか…私も含めてだが…トレーナー君も大変だな…」

スカレットを見ながらそういうルドルフ

ル「全くトレーナー君は…どうして…そう」

苦言をこぼしそうになる

ル「だが…」

最後に勝つのはこの皇帝だ！

そう心の中で叫ぶルドルフであった

……………

トレーナー視点

キタ「トレーナーさん…」

トレーナー「キタちゃん落ち着いたか？」

キタ「はい…」

テイオー「今日はたくさん女の子を泣かせてばかりで本当に罪な

トレーナーだねえ」ニシシ

トレーナー「うるせー貧乳！」

テイオー「ライスよりあるんですけどお!？」

そんな馬鹿なやり取りを見たキタちゃんは

キタ「フフフ」

まだ少し涙目だが笑ってくれた…

トレーナー「とりあえず、キタちゃん」

キタ「はい…」

私は、キタちゃんに頭を下げた

キタ「ト…トレーナーさん!？」

それを見て驚くキタちゃん

トレーナー「キタちゃん！こんなことになってしまったけど、もう一度、俺の専属としてチームメンバーとして続けて欲しい！よろしくお願いします」

キタ「トレーナーさん頭をあげてください」

「むしろこっちからお願います…よろしくお願いします！」

素晴らしいキタちゃんも頭を下げる

テイオー「これで一件落着だねトレーナー！」

素晴らしいスポーツドリンクを手に取り飲もうとするテイオー

トレーナー「そうだな」

これでひとまず終わりかな…色々あつて疲れたな

そんな事考えていたらスーパークリークが近づいて来た

クリーク「こんにちは、キタちゃん、今から一緒に練習しましょうね」

キタ「あ？ママ！」

は？今なんて言った？！

テイオー「ツブウウウウウウ」

トレーナー「ちよ…汚…俺の顔に吹くな！」

飲んでたスポドリを私に吹きかけるテイオー

そのままキタちゃんはクリークに近づき抱き着く

クリーク「ふふふ…では、トレーナーさん練習に行ってきますね」

トレーナー「あ…ああ…」

クリーク「じゃあキタちゃんいきますよ」

キタ「うん!!」

素晴らしいキタちゃんと手をつないで練習へ向かうクリーク

テイオー「トレーナー…どうすんのあれ…」

素晴らしい…疲れた顔で彼女らを見るテイオー

トレーナー「…まあ…なんとかなるっしょ…」

テイオーとトレーナーと出会い

トレーナー「え？俺とテイオーの出会いが知りたいて？」

キタ「はい！それとトレーナーになったエピソードも教えてほしいです」キラキラ

トレーナー「まあ隠したいこともないし…いいか」

「テイオーと出会ったのは夏前なんだよね」

キタ「え？春じゃないんですか？」

トレーナー「それまで、トレーナーが決まらなかったらしい」

「んで俺がサブトレやってたのは知ってたっけ？」

キタ「はい、確か会長さんの元トレーナーさんの所でしたよね？」

トレーナー「こそ、それでサブトレ4年目の頃、先生に専属が十分につけるなってお墨付きをもらった時にさ…」

……………

3年前 梅雨明け

トレーナー「専属トレーナーか…ただ、もうじき7月か…来年からかなー俺もついにトレーナーか…」

今年の入学生は、確かメジロ家のご令嬢がーとか話は出てたなあ
そのご令嬢は俺の親友がトレーナー契約してたっけ…あいつのが
一歩先にトレーナーか羨ましい限りだ

トレーナー「まあ俺は俺のペースで頑張りますか」

そう自分に言い聞かせ、先生の部屋でトレーニング表を作っていた
ドアへガチャ

？「やはりここにいたか、トレーナー君」

トレーナー「うん？あールナか、お疲れ様ー」

ル「ありがとう、トレーナー君もトレーニング表作成お疲れ様」

トレーナー「さて…ルナはもうトレーニングかい？」

ル「そうだった、トレーナー君お願いがあるんだ、ちよつと付いて
きてもらっていいかな？」

トレーナー「お願い？珍しいな…デートのお誘いかな？」

ル「そのお願いもしたところだが、今回は別件でね、トレーナー君に会わせたい後輩がいるんだ」

トレーナー「ふむ：後輩ね：急ぎの仕事もないし、いいよ」

素晴らしいルナに連れられ、その後輩の元へ向かう

なんでもルナにすぐく懂れてた娘らしい、もしかして、菊花賞のインタビューに乱入してきた娘かな？

なんて質問したらまさしくその通りだったらしい、ほーんあの娘か

：

まあその娘が今年学園へ入学した

模擬レースは常に1着、彼女をスカウトするトレーナーはたくさんいたらしいのだが、彼女とそりが合うトレーナーが見つからなかったらしく、そのままトレーナーがいまままここまで来たらしい

このままでは、公式レースにも出れずどうしたものかとルナに泣きついたらしい

それでお願いつてのが、よかったら彼女をスカウトしてもらえないかというものだった

こつちとしても出来れば親友が活躍してる年に私も一緒に切磋琢磨していききたい気持ちもあったし、それに、ルナ曰く、その娘のセンスはすごくよく、こんなことで1年不意にするのは、勿体ないのと

そうこうルナと話しながら歩いていると

？「あ？カイチョー！」

向こうからルナに気付き、走ってくる1人のウマ娘がルナの前に止まりニコニコしている

ル「やあ、テイオー」

テイオー：彼女がルナの言っていたトウカイテイオーか…

ふむ：どこことなく昔のルナに似ている

テイオー「ねえねえカイチョー聞いて聞いて、今日同学年のマツクイーンがさあ：あれ？」

テイオーはルナの隣にいる私に気付いた

テイオー「カイチョー？隣にいる、おじさん誰？」

…は？おじさん？私、まだ20代なのに…おじさん…うそでしょ…
おじさんと言われ軽くショックを受ける私を見て少しフフと笑う
ルナ

ル「テイオー彼は、私のサブトレーナーだ、君のトレーナーになつてもらおうとお願いして、きてもらったんだ」

テイオー「ふーん…」

私を見るテイオーひとまず挨拶しておくか

トレーナー「はじめまして、トウカイテイオー、是非とも君のトレーナーになりたく、勧誘しに来ただんだが」

そうテイオーに言うときテイオーは少し考えた後

テイオー「もしボクのトレーナーになったらボクの夢に付き合ってくれる？」

トレーナー「夢？ルドルフみたいに、無敗のクラシック三冠とかかな？」

テイオー「あれ？どうしてわかったの!？」

トレーナー「菊花賞の時、そう宣言してたから…あの時俺もいたんだ」

テイオー「え？そうなんだー!」

あの時の事を知る人に会えたうれしさなのかすごく笑顔になるテイオー

好印象な感じでこのままスカウトはうまくいきそうだと安心するルナ

だが

テイオー「うーんでも、やっぱりトレーナーの件はお断りするね」
ル「おや…どうしてだいテイオー」

テイオー「いやだって、カイチョーの紹介といっても、おじさんはまだサブトレーナーなんでしょ？」

「カイチョーのトレーナーみたいにすごいトレーナーってわけじゃないし、そんな実績もない人に見てもらおうくらいなら今まで勧誘してきたトレーナーの方がましだよ」

このガキ…でもまあ…至極正論だよな…

何も言い返せないでいるとテイオーは調子に乗ったのか追い打ちを掛けた

テイオー「それに、見た目頼りなさそうだし…なんかトレーナーとして駄目駄目そうだよねー」ニシシ

このメスガキ…さすがに説教するわ！

そう思い、行動に移そうと思ったが…

ル「は？」

私より先にブチ切れたやつがいたみたいだった

テイオー「カイチョーどうしたの？」

ル「いや、なんでもない…テイオーが言うならこの話はなかったことにしよう」

テイオー「うん、カイチョーせっかく紹介してくれたけどごめんね」

ル「いやいいんだ…ところでテイオー今から暇かな？せっかくだし私と模擬レースでもしないかい？」

テイオー「え!?カイチョーとレース!?やるやる!」

ル「では、テイオー行こうか…」

あールナ…ほどほどに…

こうして始まる模擬レース結果は…まあ酷かった

圧倒的にルナが勝ち、テイオーは追いつこうにも全くついてこれてなかった…

おい先輩…大人げないぞ…テイオーが泣きそうになってるやん…

そうして、レースが終わった

ル「どうだいトレーナー君！皇帝の力は！」ドヤア

トレーナー「あ…うん…」

テイオーが近づくと

テイオー「あはは…やっぱりカイチョーには敵わないや…」

そう言った後、後ろを振り向きそのまま走っていった

若干泣いてたな…可哀そうに…

流石のルナもそれに気づき、我に返った

ル「しまったやりすぎた！トレーナー君！どうすればいいんだ！」
トレーナー「いや知らんし…とりあえず、ルナが慰めに行くのは

返ってダメだし…俺が行ってくるよ…」

ル「本当にすまない…ついカツとなってしまうた…」シヨンボリ
それからテイオーを探してみるも、学園にはいなかった…

夜遅くなってきたし、流石に寮の門限だし帰ったかな俺もコンビニ
で弁当でも買ってトレーナー寮へ帰るかな

そうして私も学園から出て帰路へ着いた

コンビニで適当に弁当や食料を買い寮へ向かっていた

向かう途中公園があったのだが、そこでトウカイテイオーがベンチ
に座っていた

寮の門限ギリギリだし今日の事もある流石にほってはおけないな

そう思い彼女の方へ向かう、近づくとうちにあることに気付きすぐに
彼女の元へ向かった

テイオー「グス…ウウ…あ…おじさん…」

私に気付いたテイオー

トレーナー「おじさんじゃない…テイオーお前…怪我したのか…」

テイオー「…ウン…」

テイオーは怪我した膝を抱え込んでいた

トレーナー「ちよつと怪我みるぞ」

テイオー「…ウン」

怪我を見て見る限り捻挫してるだけだった…折れてたりしてなく
てよかった…

ひとまずいつも携帯してるキットで応急処置を施した

トレーナー「これで良し…歩けるか？」

テイオー「アリガトウ…少し休んだら、歩けると思うよ」

トレーナー「そっか…これやるよ」

そう言って先ほどコンビニで買ったスポーツ飲料を渡し、テイオー
の隣に座る、少しするとテイオーがぼつりぼつり語った

テイオー「ボクね…今までレースで負けたことなかったんだ…」

「でも…今日初めて負けちゃった…しかもぼろ負け…」

「しかも相手が憧れのカイチョー…なんか色々な物があふれて…気づ
いたら…」

トレーナー「練習していたと…」

そう聞くと…テイオーは頷き、うつむく

テイオー「今必死に練習したって、すぐに追いつけるわけじゃないのね…怪我しちゃったし…ボク…馬鹿だよね…」

そういい、もつと落ち込む

それを見て、昔のルナもこんなことあったなあと思いだし…

懐かしいのと、本当に似てるなーってなり思わず少し笑ってしまっ
た…

まずいと思い、取り直そうとするが、テイオーには気づかれずに
で睨まれた

テイオー「むー今、笑ったでしょ!?真剣に悩んでるのにひどいよー」

トレーナー「いや…ごめんごめん…つい…今のテイオーがき、昔の
ルドルフに似ててき…」

そう答えたら、テイオーは少し驚いた顔をしていた

テイオー「え?ボクとカイチョーが似てるの?」

トレーナー「ああ…テイオーと同じ歳の頃、あいつも君みたいな感
じだったさ」

「すごく負けず嫌いでさ、模擬レースや練習で負けた後は、ル「練習付
き合って!」って駄々こねてさ、よく夜遅くまで付き合わされたさ」

テイオー「そうなんだ…カイチョーと付き合い長いんだね」

トレーナー「なんだかんだあいつが小学生高学年の時から付き合
いだなあ」

テイオー「そうなんだ…」

テイオーは少し考えた後、こちらの方に顔を向けた、何か覚悟を決
めたようだ

テイオー「もう一度聞きたいんだけどトレーナーはさ…ボクの夢に
付き合ってくれるかな…?」

テイオーは何か期待しているようだ…

だが、私はOKとは言わなかった

トレーナー「テイオー、俺は、君をルドルフみたいにする
ことはない」

テイオー「うん…そうだよね…ボクじゃ…」

テイオーは再び、耳を下げ…悲しそうな顔になっていく

トレーナー「でも、君をそれ以上の存在にすることはできる」

「ミスターシービーだろうがお前の憧れシンボルドルフだろうがそれを超えさせてみせる！」

テイオー「ボ…ボクが…カイチョーを…」

今まで、憧れになりたいと思っていたテイオーにとって超えるという発想はあまり思いつかなかったんだろうな…

トレーナー「テイオーはどうしたい？」

テイオー「ボ…ボクは…」

先ほどとは違いテイオーの瞳には灯がともっていた

……………

次の日 放課後 生徒会室

ル「はあ…テイオーに謝らないとな…」

ドアへコンコン

ル「開いているよ、どうぞー」

ドアへガチャ

テイオー「カイチョーこんにちは」

ル「やあテイオー…昨日は本当にすまなかった」

そーいい頭を下げる

テイオー「昨日？大丈夫もう平気だよー」

ル「そうか…ならいいんだが…」

少し安心し、テイオーに次のトレーナーを紹介しようとしたところ
テイオー「それより大人げなくボクをコテンパンにして少し引いたってボクのトレーナーが言ってたよ！」ニシシ

ル「うん？ボクのトレーナー？テイオー、契約したのか!？」

テイオー「うん！カイチョー昨日は断ったりしたけど彼となら…」

ル「うん?」

テイオー「彼とならボクは、カイチョーを超えられる！超えてみせれる！」

そうルドルフに宣言するテイオー

ルドルフは少し目を見開き、そして

ル「ふふふ…テイオー、君が私に挑んでくるその時を楽しみにしているよ」

テイオー「うん！だからカイチョーも首を洗って待っていてね」ニ
シシ

ル「ああ…私も負けるつもりはないし、その時は、全力で相手しよう」

……………

現在

トレーナー「こうして、テイオーのトレーナーとなりましたとき」

キタ「へえーなんかスポーツ漫画の王道的な展開ですね」

トレーナー「確かにそうだなあ」

「ところでさ…キタちゃん」

キタ「はい、トレーナーさんどうしました？」

トレーナー「い…いや…なんでもない…」

キタ「そうですか…」

いやツツコミを入れない…なんであいつ…

哺乳瓶片手にベビーベット（大人サイズ）で寝転がってるんだ…

てかトレーナー室にそんなもん置くなよ…

トレーナー「…キタちゃん遅くなったしお開きにするか」

キタ「はい！」

おまけ

……………

マックイーン（ト）室

マックイーン（ト）「えつと？サトノさん私とマックイーンさんの出会いが知りたいのですか？」

サトノ「はい！あと、あの当時メジロ家のご令嬢となれば専属契約の倍率も高かったはず…どうして契約できたのか気になります」キラ

キラ

マックイーン(ト)「言っているものなのでしょうか…まあいいかな
…あれは模擬レース後なんです…」

……………

3年前 春

マックイーン(ト)「模擬レースみんなすごかったなー流石メジロ家
のご令嬢だったな…いいフォームだった…」メモメモ

「あと、中距離で出てたトウカイテイオーって娘も素質が素晴らし
かったなあ」メモメモ

模擬レースを終え、私含めトレーナーたちは気になる娘をスカウト
しに動いていた

私もひとまずトウカイテイオーさんにスカウトを試してみたけど、結
果は、新人トレーナーってこともあり、お断りされた

次にメジロ家のご令嬢ことメジロマックイーンさんにスカウトへ
行く、流石メジロ家…ものすごくたくさんのスカウトが来ている…

これはすごく厳しそうだな…

でも、まあ当たって砕けるですね

当たってみた結果、砕けましたね…

断られました…まあ新人だから仕方がないですよ…

こうして、マックイーンさんのファーストコンタクトは失敗に終
わった

が…その1週間後

マックイーン(ト)「♪」

彼は、趣味であるお菓子作りをしていた

意外な趣味だなと親友でありサブトレーナーの彼に言われたこと
もある

ただ彼もいつか担当になる子にバランスの取れた料理を食べさせ
たいと言い料理が趣味だったりする

私も似たような動機なのだが…ただ担当じゃなく小さい子の笑顔
のためについて言ったら彼にドン引きされた…解せぬ…

彼とは料理という分野では趣味が一緒なので、お互いに試食などしたりして、評価し合う仲間でもある

今回も彼に試食してもらうために、最近流行ってるマリトッツォつてのに挑戦してみた

マックイーン(ト)「さてとできましたし、彼の部屋まで行きますか」彼の元へ向かうため部屋を出ると…そこには思わぬ客人が…

?「スイーツの匂いが…ジュルリ…っあ…」

マックイーン(ト)「えつと…メジロマックイーンさん…どうしましたか?」

そこにいたのは、メジロマックイーンさんがドアの前で立っていた確か…彼女はまだトレーナーが決まってなく…トレーナーしかないこの館に来てどうしたのでしょうか…

マックイーン「あ…あの…こちらから甘い香りがしまして…気になり伺いましたわ」

マックイーン(ト)「甘い香り…これですか?」

そーいい手に持っていた箱を見せる

マックイーン「そちらは何でしょうか?」

マックイーン(ト)「マリトッツォつていう最近流行ってるスイーツだよ」

マックイーン「最近流行ってるスイーツ!」

スイーツって言葉に反応し、尻尾がものすごく高く上がる

そしてすぐ欲しそうに見てくる…ナニコレカワイイ…てか私的にドストライク…

マックイーン(ト)「よろしければ、食べますか?」

マックイーン「いいんですの!」

マックイーン(ト)「はい、とりあえず立ち食いもあれですので…入ってください」

マックイーン「はい、失礼しますわ」

その後、紅茶も入れ彼女にマリトッツォを渡す

マックイーン「これが…最近の流行ってるスイーツ…」

マックイーン「では、いただきますわね」

そういいマックイーンはマリトッツオを口にしたら

その瞬間目を見開き、一気に食べてしまった

マックイーン(ト)「どうかな?」

マックイーン「お…美味しいですわ!これはどちらでお買いになられたの?是非ともおしえてくださいまし」

マックイーン(ト)「それ私の手作りなんだ」

マックイーン「本当ですか!」

マックイーン(ト)「趣味がお菓子作りでして…」

マックイーン「手作り…ですって…」

その後、マックイーンがワナワナ震える…何かまずい事したかな…

マックイーン「…ださい…」

マックイーン(ト)「え?」

マックイーン「わたくしのトレーナーになってくださいまし!!」

マックイーン(ト)「ええ!!」

……………

現在

マックイーン(ト)「で、トレーナーになりました…」

サトノ「ええ…スイーツでトレーナー契約するって…」

マックイーン(ト)「私もびっくりしましたよ…あなたのスイーツが食べられるなら絶対トレーナーになってもらいます!!毎日スイーツパクパクですわ!!ってそのあとは、もう流れで契約しました…」

サトノ「ええ…なんていえばいいのか…」

マックイーン(ト)「…ですよねー」

サトノ「あ…もうこんな時間…トレーナーさんお先に失礼しますね」

マックイーン(ト)「ああ…ところで、サトノさん」

サトノ「はい?なんででしょうか?」

マックイーン(ト)「…いや…気を付けて帰ってくださいね」

サトノ「はい、お疲れさまでした」

マックイーン(ト)「ああ…」

サトノは、カバンを肩にかけ、手提げバックをもって部屋を出た
さて：あの手提げバッグ：中身に赤ちゃんのガラガラやおしや
ぶりや哺乳瓶が入ってあったが：
マックイーン（ト）「いったいなんであんなのが入っていたのでしょ
うか」

テイオーとトレーナーと出張

トレーナーは、残りのチーム勧誘を相変わらず悩んでいた
短距離とダート、短距離はまだ芝だし、なんとかなる

問題はダート…

砂が得意なウマ娘は中央でもなかなか居ない、タイキも芝みたいに
得意じゃないが、チームの中では一番走れるので、申し訳ないがダ
ートをお願いしてた

ただ今では、芝より走れるまで行ってるらしい
さて、ダートかあ…

スマートファルコンは、砂のサイレススズカと言われているだけあつ
て、すごくしつとりしてる、勧誘は上手くいくが後は血の雨が降りか
ねないから却下

エルコンドルパサーもダートは得意な方らしいから勧誘しようと
するが、なぜかグラスが現れて刺される… 解せぬ

トレーナー「… どうしたものかなあ…」ノビー

悩むトレーナー

校内スピーカへトレーナー、トレーナー、理事長室へ

トレーナー「ん？なんだろう…」

なんかしたかなあ、この前やよいのお菓子食べたことかな… たづ
なさんの全ての制服をこっそり346プロの事務服に変えたことか
な…

思い当たる節しかない…

トレーナー「今日はなかなか辛い日になりそうだ」ハア

まあ自分のせいだから仕方がない、行くか

トレーナーは理事長室へ向かった

向かう途中

キタちゃんとかイヤちゃんにあつた

ダイヤちゃんがキタちゃんに哺乳瓶に入ったミルクを飲ませてい
た

見なかったことにした

.....

数分後 理事長室

トレーナー「出張ですか？」

たづな「はい♪1か月程地方のトレセンへお願いします♪」

トレーナー「視察ですか？それにしても1か月は長い気がします」

たづな「今回は、視察もですが、ここ中央から療養や私事などの事情で地方へ出戻りした彼女達を見てもらいサポートをお願いします♪」

「また、トレーナーさんが気に入った場合、地方のウマ娘をスカウトしても、構いません」

トレーナー「ふむ……」

確かに、今は地方もなかなか力をつけている

中央ではない、ダイヤの原石は絶対に居るはずだし…… ありがたい話だ

トレーナー「出張有難く引き受けます」

たづな「ありがとうございます♪」

トレーナー「チームはマックイーンのとレーナーに一旦任せるかな」

たづな「私のほうからもお願いしておきますね♪」

トレーナー「ありがとうございます。地方のトレセンか、行ったことないから楽しみですねー、ところで私は、何処に行くか決まっていますか？」

たづな「はい♪ある方が貴方を指名してましたのでそちらへ伺ってもらう予定です♪」

指名？嫌な予感がする……

たづな「確か……笠松で」

トレーナー「すみません！出張やっぱりなしで！」

そう言い部屋から出ようとしたが

たづな「ダメですよ♪」ガシ

肩を掴まれた

トレーナー「は…離して…」

たづな「先程言質は、取りましたから決定ですよ♪」ツス
たづなはボイスレコーダーを取り出す

トレーナー「たづなさん…私になにか恨みでも？」

たづな「いえいえありませんよ、強いて言うなら私の制服が何故か全部アイドルプロダクションの事務員が着そうな服に変わってた事ですかね」ニコニコ

トレーナー「」

たづな「では、トレーナーさん明後日から笠松へ出張頑張ってくださいね♪念の為付き添いを付けても大丈夫ですよ」ニコニコ

トレーナー「つらたん」

……………

放課後 トレーナー室

トレーナー「と言う訳で、地方へ1か月程いきますわ」

テイオー「えーいいいなーぼくも行きたい」ピョンピョン

タイキ「ワーオ出張ですか？頑張ってくださいサーイ」

バクシンオー「1か月もトレーナーさんが離れるのは、心配であります！学級委員長の私なら直ぐに駆けつけれるから大丈夫ですわ」
クリーク「トレーナーさん、安心してくださいねキタちゃんは私がかちゃんと面倒みますからねーねーキタちゃん♪」

キタ「うん！」ギュー

スカレット「え？1か月も…」ハイライトオフ

ル「ふむ、トレーナー君も出張と言う大任を任されるほどになるとは、私も嬉しい限りだ、ちなみに何処へ行くんだい？」

トレーナー「カサマツダッター」ボウヨミ

カサマツと聞いた瞬間、目を見開くルナ、そして

ル「岐阜県か…いやー楽しみだ、トレーナー君、下呂温泉や飛騨高山には行くこうじゃないか」

何故かついて行く気満々だった

トレーナー「いやいやいや、ついて行く気満々だがダメだよ？」

ル「な!?!ついて行つてはダメなのか?」

トレーナー「当たり前だろ…」

ル「そんな…なら笠松に行くのは辞めるんだ!!」

トレーナー「仕事だし仕方がないじゃん…」

ル「嫌だアアア」

そーうい崩れ落ちるルナ

そのあまりの異変に只事じゃないと悟ったのか

テイオー「トレーナー、ボクなら連れて行つても大丈夫だよね?」

「カイチョーと違つて☒ 担当☒↑強調 だし!」

その言葉が崩れ落ちたルナに刺さる

トレーナー「お願いしたかつたんだがなあお前はリーダーだろ?だからダメ」

からダメ」

テイオー「そ… そんなー」ガーン

それを聞き立ち上がるルナ

ル「ふふつ、残念だったなテイオー!トレーナー君、なら中央トレ

セン生徒会長の私はきつと役に立つぞ!だから私と共に!」

トレーナー「いや、生徒会長が1か月学園不在はダメやろ」

ル「嫌だ嫌だ嫌だトレーナー君と笠松に行くのー!」

おいみんなの前やぞ、皇帝の威厳をまた捨ててんぞ…

トレーナー「とりあえずダメだからな、ちなみに、スキーに車出し

てもらうから付き添いはスキーな!」

テイオー「は?」ハイライトオフ

ル「ほお… マルゼンスキー」ハイライトオフ

マルゼンスキー「チョベリバ…」

こうして、トレーナーは笠松に出張へ行く事になった

ただ

テイオー「トレーナー… ついて行くね」ハイライトオフ

ル「どうにかして、笠松へ行くんだ!」ハイライトオフ

スカーレット「トレーナーさんに笠松でたまたまあつても大丈夫よ

ね?」ハイライトオフ

そして

？「…すいたな…トレーナー…」

テイオーとトレーナーと笠松へ

出張前日

マルゼンスキー以外のメンバーのトレーニングも終わった

マルゼンスキーは出張へ向かうための準備があるためトレーニングは不参加

長時間運転してもらおうし、流石にトレーニングはさせられないしね
皆帰り、私は、出張の荷造りも終え駐車場で彼女を待つ

お？来たかな？エンジン音が聞こえてきた

あれ？タツちゃんじゃないのか

彼の目の前で車は止まる、いつものランボルギーニではなかった
てか：これまた、なかなか古い車で来たな：

マルゼンスキー「トレーナー君おまたせー」

トレーナー「スキー今日はよろしくな：それにしてもタツちゃんは
どうした？」

マルゼンスキー「あーそれね、タツちゃんだと荷物とか入れるス
ペースがなさそうだから知り合いに借りたの」

「どうかしら？この車もイケイケでしょ？この前友達からおすすめさ
れた流行りの漫画にも出てたのよ！」

トレーナー「お：そうか：その漫画って：」

「まあいいかとりあえずトランクに荷物入れてくる」

トレーナーが車に荷物を入れ、助手席に乗り込もうとした時、マツ
クイーンのトレーナーがお見送りに来た

マツクイーンのトレーナー「トレーナーさん、出張頑張ってください
いね」

トレーナー「お？すまんスキー少し彼と話してくる」

マルゼンスキー「はい、いってらっしゃい」メクバセ

?「!？」

トレーナー「お見送りなんかすまんな：1か月俺のチームよろしく
頼むよ」

マツクイーン(ト)「気にしないでください」

「これから1か月責任もって、彼女たちの事は任せてください」

トレーナー「すまん、ちゃんとお土産買って帰るからな」

マックイーン(ト)「甘いお菓子でお願いしますね、マックイーンが喜ぶので」

トレーナー「おう！じゃあ行くわ」

マックイーン(ト)「はい！笠松には、あの人がいますが…頑張ってくださいね」

トレーナー「…おう…」

トレーナーは少しテンション下がりつつも車に乗り、そのまま走らせた

マックイーン(ト)「しかし…ランボルギーニかと思ったんですけど…なぜ…86なんでしよう？」

………

スキーとトレーナーは岐阜へ向かったその道中のある峠

セリフのみでお送りします

マルゼンスキー「さあ！いつくわよー」

トレーナー「相変わらず、ハンドルさばきやベエーてか、峠だからって攻めるなよ…」

トレーナー「そういえば、前にいる黄色い車は走り屋かな…」

金色気味の茶髪男性「旧式の86ごときがこのFDが千切れないだど…悪い夢でも見ているのか…」

「俺は、○城レツ○サ○ズのナンバー2だぞ?!」

金色気味の茶髪男性「こいつ、先を知らないのか、この緩い右のあときつい左だ」

「減速しないと谷底へ真つ逆さまだ」

金色気味の茶髪男性「言わんこつちやねえ、スピードが乗りすぎてるぜ」

「立て直してスピードを減速するスペースはもうねえ」

トレーナー「あれ？次きつい左だけど大丈夫これ？」

マルゼンスキー「モチのロンよ」アクセルハナシ

金色気味の茶髪男性「何!?慣性ドリフト!?!」

.....

10時間後

マルゼンスキー「到着よー!」

トレーナー「有料道路使えば4時間程度なのに」

マルゼンスキー「せっかくのトレーナー君とのドライブだもん長く
したかったのよ」

トレーナー「そっか…それにしても10時間近くも本当にお疲れ
様」

マルゼンスキー「じゃあ私はホテルのチェックインしてくるわね」

トレーナー「おう!じゃあ俺は荷物運んでくるよ」

そして車のトランクをあける

トレーナー「ええ…」

トレーナーはものすごく呆れた顔をし、トランクを見る

そこには、

テイオー「ウウ…メガマワル… キモチワルイヨオ…トレーナー

…」ピクピク

トレーナー「…」

何も言わずトランクを閉める

トランクへちよ!トレーナー!!閉めないで!!開けてよおおお!

トレーナー「まったく…」ハア

.....

ホテルロビー

トレーナー「で…なんているんだお前」

テイオー「どうしてもついて行きたかったから…」

トレーナー「はあ…今更中央に戻すのもアレだし…仕方がないか
…」

テイオー「やったー」ピヨンピヨン

トレーナー「外泊届とか諸々たづなさんに電話してくるわ…」

テイオー「外泊届は出したし、学園には1か月合宿届だしたよー」
トレーナー「」

用意よすぎ…

マルゼンスキー「トレーナー君部屋の鍵取ってきたわよ…あらテイオーちゃんバレちゃったのね」フッフ

トレーナー「スキー…お前もグルかよ…まあ…いいや…じゃあ俺はこっちの部屋でお前らは隣の部屋な」

テイオー「えーボク、トレーナーと一緒にの部屋がいい！」

トレーナー「いやダメだろ…俺が社会的に終るから勘弁してくれ…」

テイオー「ブーブー」

トレーナー「ぶー垂れたつて駄目だ！とりあえず、今日は夕方から挨拶だから、それまで2人とも休んでくれ」

こうして笠松へ着く3人は自室で眠りにつく

……………

その数時間後 中央トレセン理事長室

ドアへガチャ

ル「失礼します」

たづな「あら、シンボリドルフさんどうなさいましたか♪」

ル「たづなさん、本日から1か月ほど笠松へ合宿へ行きたいのだが…」

たづな「うーん…シンボリドルフさんは臨時サブトレの仕事と生徒会の仕事がありますので…さすがに…」

ル「チームはリーダーのテイオーやメジロマックイーンのとレーナー君に任せれば大丈夫です」

「生徒会の仕事は、特に忙しい用事もないので、問題ないと思います」
たづな「そうですね…しかしですね…」ツス

たづなさんは苦笑いしながら2枚の書類を取り出した…

そこには、2枚の合宿届

名前にはトウカイテイオーとダイワスカーレットの名が書かれて

いた

ル「…は？」

ルナ「ウウ…」ジワ

……………

新幹線

スカレット「ふふん…待っててねトレーナー」

数時間後

スカレット「ふえ？…ここどこ？」

スカレットはなぜか博多に来ていた

テイオーとトレーナー、カサマツトレセン学園へ

博多

スカーレット「ハフハフ…トレーナー…待っててね…」ズルズル
「でも…その前に…」ゴクゴクプツハー

数分後…

店へアリガトウゴザイマシター

スカーレット「流石博多…とんこつラーメン美味しかったわ！」

「次はもつ鍋よ！博多に来たからにはグルメを制覇するんだから！」

「制覇したら今度こそ笠松へ行くんだから！待っててねトレーナー
！」

スカーレットは本来の目的を一旦忘れ、博多来てしまった事を楽しんでいた

……………

カサマツトレセン学園

トレーナー「ここが…カサマツトレセンか…」

やはり中央と違って、小さいな…とは言えレベルが上がってるだけ
あつて施設はしっかりしてる感じだな

テイオー「トレーナー中央より小さいねー」

トレーナー「そりやあなあ」

マルゼンスキー「それでも、彼女達のレベルは高いわね」

素晴らしいながらスキーは練習場を見ている

トレーナー「…確かに…すごいなあ…」

素晴らしい練習風景を見る、あの芦毛の長髪の娘、なかなかいい物をもつてるなあ…

トレーナー「…うん…あれは…」

まさかオグリキャップ!?…予想はしてたがやっぱ笠松にいたのか

…

それにしても、何だろう…以前のあいつとは覇気というかやる気が

感じられない…

マルゼンスキー「あら？あの娘…オグリキャップかしら？」

テイオー「え？オグリキャップってあのオグリキャップ?!」

トレーナー「…怪我してからこっちにいたのか…」

私がサブトレ時代に、オグリキャップは数多くの勝利をし、有馬記念で勝利を収めた後、体調不良により療養という形で、行方をくらましていた

故郷の笠松にいたと思ってたがやはりいた…

練習場

オグリキャップは遠くでこちらを見ていた一同に気付き、そしてあの人物が目に入る

オグリ「…あれは…トレーナー」

フジマサマーチ「ん？オグリどうした？」

オグリ「いや…なんでもない…ただ…」

フジマサマーチ「ただ？」

オグリ「久しぶりのご馳走を思い出しておなかがすいただけだ…」

……………

カサマツトレセン学園 理事長室

理事長「トレーナーさん遠路はるばる来ていただきありがとうございます」
「います」

トレーナー「いえいえこれも仕事ですし」

理事長「1か月と長いですが、よろしく願います」

「長話もアレなので、さっそく施設のご案内や業務内容については秘書の方から、おーい入ってくれー」

そう理事長が呼ぶと、扉が開く

？「失礼します♪」

トレーナー「この度は、よろしく…たづな…なんている…」

テイオー「ワケガワカラナイヨ」

マルゼンスキー「アララ」ニガワライ

たづな「あら、何のことでしょう？ 私は駿川たづなではないですよ？」

トレーナー「いやフルネームで言ってる時点でアウトだろ」

理事長「えーまあ…とりあえずよろしく頼むよ…」

トレーナー「…はあ」

大きなため息をつき理事長室を後にする

？「…トレーナーさん来てくれたんですね…」

たづなさんに施設案内や業務内容の確認が終わり、せつかなので
テイオーやマルゼンスキーもカサマツのウマ娘たちと練習をさせた

流石テイオーとマルゼンスキー…知名度が高い事もあり、周りのウ
マ娘達から黄色い歓声が起こり

サインや握手などを求められたりしてた

トレーナー「おい…トレーニングしろよ…」

スぺのトレーナーの物真似風に言いつつ

まあこんな日もいいかと思えば彼女らを眺めていた

よく考えたら2人ともトップアスリートだもんなあ…

？「あ…トレーナー」

トレーナー「うん？」

呼ばれた方向を向く

トレーナー「あ…君は…ハッピーミック」

同期の担当ウマ娘ハッピーミックがいた…ってことは…

？「お久しぶりですトレーナーさん」

後ろから声がする…やばい…ついにエンカウトしてしまったか

…

出来れば会いたくなかった…だってこいつと関わると碌なことに
ならないもん…

色々問題起こして、ここに左遷されたから安心してたのに…こつち
が来る羽目になるとは…

トレーナー「…花京院」

葵「桐生院です!!」

「名前間違えるなんてひどいじゃないですか！同じ志を持つ仲間なのに…」ムー

トレーナー「ハハハ…久しぶり…」

葵「もう…それよりトレーナーさん今夜予定空いてますよね？」

空いてること前提で来たよこれ…

トレーナー「いやあい「空いてますよね、では今夜お食事へ行きましょう！」…人の話を聞いて…」

葵「それでは、よろしくお願いしますね」ニッコリ

トレーナー「」

……………

同時刻

たづな「!？」

ルドルフ「!？」

スズカ「!？」

テイオー「？」

彼女らに電流が走る！

……………

中央トレセン

ブライアン「…」スヤア

ル「エアグルーヴ、少したづなさんの所へ行くよ」

エアグルーヴ「はい、何か用事でも？」

ル「いやなに、笠松へ行く件について、もう一度交渉しに行こうか
と思っただけ」

エアグルーヴ「そうですか…でも…」

ル「うん？どうしたんだい？」

エアグルーヴ「たづなさん今日から1か月ほど有給を取ってまして
…なんでも笠松に旅行へ行くとのことですが…」

ル「…」

エアグルーヴ「…」

テイオーとトレーナーとカサマツトレセン前編

私やマックイーンのトレーナーの同期に桐生院葵という女性がい
た

彼女は、私達と同じ高校大学一貫のトレーナー専門学校を常に成績
トップ、

そして主席で卒業した

その後中央トレセンの試験も歴代最高得点を取り期待の新人とし
て取り上げられていた

その功績もあり、私たちと違い、サブトレからではなくそのままト
レーナーになることを認められた

だが彼女は、1年で担当と一緒に笠松へ左遷された

彼女には、残念な点が1つあった

それは、

貞操観念がものすごくおかしいのだ

生まれてきてから今まで、異性におろか同性の友人がいなかったの
か

対人スキルが壊滅的に意☆味☆不☆明な状態だった

例えば、ソフトタッチは当たり前、抱き着いてくるのも当たり前、

性の賢さ0なせいで、

キスってどんな味がするんだろうって聞いてきて、

試しに唇を奪われそうになるのも当たり前、

おじいちゃんが孫が見たいから跡取り作りましようって言うってく
るのも当たり前、

やり方わからないくせに、逆うまぴよいしようとすることもあった

しかもそれを私ら男性トレーナー全員にやるんだ…しかも悪気が
ないし、どういふことなのかあまり分かってないっての言うのがまた

：

この時、マックイーンのトレーナーはまだ担当もいなく、被害は少
なかったが

結構しつとりしてた頃のルナとかがいた私やスペちゃん・グラス担

当トレーナーなど

親しい娘や担当がいたトレーナーは地獄であった
最終的に、大半の男性トレーナーの親しかったウマ娘達がブチ切れて、暴動が起きてしまった

珍しくいつもそうだったのに止めに入るたづなさんもブチ切れて
：

先代理事長が必死に止めに入り事無き事を得たのだが

そのせいで、理事長は早期辞職、まだ子供なのにやよいが理事長になるという事態になった

またその責任で、桐生院は左遷となった

だが当本人は、栄転だと思ってるからもう…ダメだこいつ…
さて簡単な説明をしたわけだが、

私は、半ば強制で桐生院と飯へ行くことになった

たづなさんが助けに入り3人でご飯を食べに行くことになった

非常に生きた心地がしない、食事だった…

たづな「あら桐生院さん、まだトレーナーやってたんですね♪」ニ

ニコ

葵「たづなさんお久しぶりです！まだまだこれから頑張って、家の名に恥じぬ一流のトレーナーになりますよ」ニコニコ

たづな「そうですね…ツチ」ニコニコ

たづなよ…桐生院に何言っても全部いい方にとらえられるから…
無駄だぞ…

葵「それよりトレーナーさん！トウカイテイオーさんのトレーナーとして大活躍だったらしいじゃないですか！」

トレーナー「あ…ああ…」

葵「今晚！私の部屋でテイオーさんの事や色々とお話ししませんか？」
？

トレーナー「流石n「いいですよね！」話聞いて…」

たづな「いい加減にしろよ○豚？」ニコニコ

おいたづなキャラ変わってんぞ…

はあ…胃が痛い…こうしてカサマツトレセンでの初日を終えた

そして数日後

私は、なぜか…たくさん料理を作っていた…

あいつのために

オグリ「…うまい」モグモグ

テイオー「スゴイ…」

先ほどテイオーと廊下を歩いていたら行き倒れのオグリキャップが居たので、

助けた結果…こうして厨房を借りて彼女に料理を振舞っていた…

オグリ「久しぶりのトレーナーの手料理…もう食べれないかと思っていたが…また食べれるとは…」モグモグ

テイオー「久しぶり？…トレーナー…オグリキャップとも仲がいいんだねえ…」フーン

テイオーの視線が刺さる…

オグリ「ああ…一時期トレーナーには、毎日お世話になったな」

テイオー「は？」ハイライトオフ

トレーナー「あ…」

……………

同日 札幌

スカールレットとスぺの母ちゃんは千歳空港前に来ていた

スカールレット「スぺ先輩のお母さん色々とお世話になりました」

スぺのお母ちゃん「別に良いってことよ、私もあの子の話も聞けたしね」

「本当に元気そうで安心したわ」

スカールレット「はい！私も今度スぺ先輩に会ったら元気だったって伝えておきますね」

スぺのお母ちゃん「ありがとうね」

スカールレット「では」

スぺのお母ちゃん「これから東京？」

スカールレット「はい！ひとまず中央に帰ってから笠松へ行くこうと思います」

「飛行機なら降りる駅間違えたり寝過ごしたなんてありませんから

！」

スぺのお母ちゃん「そ…そうね…気を付けてね」

スカーレット「はい！ありがとうございます」

素晴らしいスカーレットは空港へと向かう

スカーレット「トレーナー！待っててね！」

スカーレットは数日間せつかく来た北海道で美味しいものを食べていたが、

本来の目的を思い出し東京に向かった

……………

同日 中央トレセン学園

生徒会副会長のエアグルーヴは本日の生徒会業務を行うため、生徒会室へ向かっていた

エアグルーヴ「会長…あれからずっと生徒会室で縛っているが…大丈夫だろうか」

会長がたずなさんも笠松にしていると聞いて暴れてから私とブライアンで抑えてはみるもうまくいかず、

この騒ぎに駆け付けたビワハヤヒデやナリタタイシンなども抑えるのに加わった

最終的に、アグネスタキオンが鎮静剤なのか睡眠薬なのかかわからないが薬を投与し、無事落ち着いてくれた

だが、いつまた暴れだすかわからないので、ひとまず生徒会室にいてもらっている

エアグルーヴ「…頭が痛い」

これで何度目の片頭痛だろうか…後で保健室へ行かねばな…
そうこうしてるうちに生徒会室へ着いた

エアグルーヴ「会長、入りますね」ガチャ

エアグルーヴが生徒会室へ入る、だがそこには誰もいなかった

エアグルーヴ「え？会長？確かこの椅子に縛り付けてたのに…うん？手紙」

エアグルーヴは机の上に置かれてた手紙を読む

エアグルーヴへ
笠松へ行きます

探さないでください

シンボリルドルフ

エアグルーヴ」

P・S・ダジャレを考えたんだ見てくれ、【新幹線の機内飽きない】
どうだ面白いと思わないかい？

エアグルーヴのやる気はこれ以上下がらない

既に偏頭痛持ちだ

既に夜更かし気味だ

.....

話は戻り 夕方、笠松トレーナー達が泊っているホテル

トレーナー「テイオーさん離れてくれないかい？」

テイオーはトレーナーに引っ付いて離れない

テイオー「いやあ！」ギュー

「オグリキャップには、毎日お世話してあげたのに！ボクのお世話は
しないんだね！」

トレーナー「だーかーらー食べ物を作ってあげただけだって!!」

テイオー「ボク、トレーナーにご飯作ってもらったの指で数えられる
だけしかないのに、ずるいよお」ギュー

トレーナー「あんときは、趣味で作った料理をオグリキャップがも
のすごい笑顔で食べてくれるのがついつい嬉しかったから…」

テイオー「じゃあボクにも毎日弁当作って！」上目遣い

トレーナー「最近忙しいから面倒！」

テイオー「ええ…いいじゃん！作って！作って！」頭でグリグリ

トレーナー「だいたいお前に作り出したらルドルフとかも欲しがっ
たりして、最終的に俺の負担でかくなるからダメ！」

テイオー「ケチー、じゃあ離れない」ギュー

トレーナー「部屋に戻れないから離れなさい！」

テイオー「いいもん今日はトレーナーの部屋で寝るもん！」ギュー

トレーナー「年頃の女の子が1人で男性の部屋に行くのはダメだつて…それに私は指導員で君は生徒なの？そういうことはダメだつて…」

テイオー「離れないもん」ギュー

？「ほお…テイオーだけがダメなら私もトレーナーの部屋へ同行しよう…」

トレーナー「?!」ツバ

振り向くとそこには

ルナ「トレーナー、やっと会いに来たよ」ニッコリ

ルナが満面の笑みでそこにいた

ルナ「そして、テイオーよチームリーダーでありながら、私に全部丸投げしてきた笠松は楽しかったかい」ハイライトオフ

テイオー「」

トレーナー「」

……………

1日後 ？空港

スカレット「まさか…飛行機乗るのにパスポートがいるのね…」

「けどどちらようど持ってたからなんとかなったわ…ふん流石私ね」アハハ

「素晴らしい笑うスカレットだが次第に俯き…身体がプルプル震えだした

スカレット「…なんで」

そうつぶやいた後

スカレット「なんでアメリカに着くのよおおおおおおおとおおお」

「そうただただ叫ぶしかなかった

だが彼女は、自分が決して方向音痴だとは認めようとはしなかった
スカレット「そ…そうよ…これは久しぶりにライバルである、あ

いつ（ウオッカ）に会いに来たのよ！そうよ！うん!!」

「そう自分に言い聞かせポジティブになるスカレット

「その場に居合わせた1人のウマ娘が彼女を見ていた
スズカ「あの子は確か：最近あの人のチームに入った：」
こうしてスカーレットはなぜかアメリカへ行ってしまった

テイオーとトレーナーとカサマツトレセン中編

朝 ホテル

ウマホへピピピピピピ

トレーナー「うーん…朝か…」

ウマホのアラームで目が覚めるトレーナー

次第に眠気が覚めながら、身体に違和感があるのを感じてきた

トレーナー「…」ジー

トレーナーは自分のおなかの方を見る

その先は布団なのだが、

おなかのふくらみと到底思えない大きなふくらみがある

トレーナー「チラ

布団を少しめくり、お腹の方を見る

テイオー「…ウーン…トレーナー…モウタベラレナイヨ…ニシシ

…」スヤスヤ

私のおなかにテイオーが抱き着いて寝ていた…

トレーナー「うそでしょ…」

ヤバくね？え？なんでテイオーがいんの？あれ？こんなこと世間

にバレたら社会的に死ぬやん…ヤバいですね☆

じゃなくて…ヤバイヤバイヤバイひとまず、テイオーを起こして…

あれ？

トレーナーは左手を動かそうと思ったらなぜか左手が動かなかつ

た

誰かに掴まれてる…

トレーナーは恐る恐る左に顔を向けると

ル「…／／」ジー

ルナが顔を赤らめながら見つめている

どうやら先ほどまで私の左腕をギュツと抱いて横で一緒に寝てい

たみたいだ…

トレーナー「…うそでしょ…」

ル「おはよう／／／トレーナー君。／／／」

トレーナー「お：おはようございます…」

その後、テイオーとルドルフはトレーナーにたくさん怒られた
ついでにたづなさんにめっちゃ怒られた

それから何日か

ルナが桐生院と久しぶりに対面したのだが、

目が殺意に満ち溢れた状態だった

桐生院は、そんなことも感じず、中央の生徒会長が来たことに喜び
めっちゃ普通に接してた：いやこいつ：いつか死ぬぞ：

また、桐生院は久しぶりの同期に会えた事が嬉しいのか

トレーナーがトレセンに来ると、もう引っ付いて離れないくらい常
に一緒にいた

何も知らないカサマツにいるウマ娘たちはカップル？なんて誤解
していた

それを見ながら、目にハイライトがなくなるルドルフとテイオー、
それを抑えるスキー

たづなは笑顔だが、さつき「あのアマ：いつか：潰す：」つてつづ
やっていた：怖い：

私の業務は順調で、一通りの視察は終わり、今は自分のチームに入
れる娘を探しながら

中央からカサマツに出戻ったウマ娘を見ていた：つてまあアイツ
しかないんだけどな

オグリ「トレーナーすまないがお腹がすいた」

トレーナー「ついさつき食べたじゃん…」

そう言いつつも、フライパンで炒め物を作るトレーナー

トレーナー「そういえばさ」

オグリ「なんだ？」

トレーナー「ここにきて数日、お前がちやんと走ってるのを見たこ
とないな」

そう言うと、オグリキャップは少し顔を強張らせた

オグリ「私は、もう走らない…」

トレーナー「え？どうしてだ？」

もう走らない…なんで？

オグリ「私は、もう走る理由がないんだ…」

トレーナー「走る理由…」

オグリ「もう…走つてもう楽しくないんだ…あのジャパンC敗北以降まったく楽しくなくなつたんだ、そして私は、あの年の有馬記念が終わつたらもう走らないと決めただ…」

トレーナー「…」

ジャパンCの敗北…秋の天皇賞に続き大敗したあれか…

？「走るのが楽しくない？」

トレーナー「ルドルフ…」

そこにはルナがいた、そしてオグリキャップに近づく

ル「オグリキャップ、久しいな」

オグリ「会長か…」

ル「現役だったあの頃、強くなるのに貪欲で私にも食つて掛かるあの威勢、今ではその面影もなく腑抜けてしまったようだね」

オグリ「…」

ル「君と走れる日が来ることを楽しみにしていたんだけどな…」

オグリ「…すまない」

トレーナー「まあ…走れないなら…仕方がないか…ただ俺としてはできれば走つては欲しいけどな」

「ほら、オグリキャップにんじんチャーハンできたぞ」ドン

ル「トレーナー君、またオグリキャップにごはん作つてあげてるの

か」ハア

トレーナー「まあカサマツにいる間は、いいかなって」

そう言うと、オグリキャップがトレーナーの手を握る

オグリ「トレーナー、中央へ戻るのか？」

トレーナー「え？1か月の出張だし…そうだよ」

オグリ「ダメだ…ここにずっと居てくれ、トレーナーのごはんが毎日食べたいんだ」

ル「は？」

トレーナー「いや…流石に」

オグリ「すまないが、ずっと居てくれ…」ギユ
手を握る力が強まる

ル「オグリキヤップ、そこまで言うなら私と勝負をしないか？」
オグリ「勝負？」

ル「君の得意の距離で私にレースで勝ってみせろ」

オグリ「レース…」

トレーナー「お…おい…ルドルフ」

ル「トレーナー君、私に任せてくれ」

「それとも私に勝てる自信がないから諦めるかい？何ならダートで競争してもいいんだぞ？」

トレーナー「…いや流石にダートは…」

流石にダートでは勝てないからやめておけて…

オグリ「私が勝てば、トレーナーはカサマツにずっと居てくれるのか？」

ル「ああ…約束しよう」

オグリ「いいだろう…なら明後日勝負を頼む」

ル「いいだろう」

トレーナー「ええ…」

……………

同日 アメリカ

スカーレット「スズカ先輩、色々とお世話になりました」

スズカ「いえ」

スカーレット「あれから色々練習や私の走りを見てくれて、本当にありがとうございますでした」

スズカ「あの人のチームの一員ですもの、あの人のためにも頑張ってくださいね」

スカーレット「はい！」

スズカ「それに、貴方とは、どこか…」

スカーレット「？」

スズカ「いえ、何でもないは、ただしあの人を渡すつもりは毛頭ないので」

そうスズカが言うのとスカーレットは目を見開いた

スカーレット「え…なんのこですか？」

スズカ「トレーナーさんの事好きですよね？一目でわかったわ」

スカーレットは凶星をつかれ、少し俯き、またスズカの方へ向き直る

スカーレット「はい、なので、スズカ先輩には絶対負けません！」

スズカ「ふふふ…そうね今回は、最初で最後の塩を送ってあげただ、次からは仲間でもあるけど敵同士ね」

スカーレット「はい！今回色々と教えてくれたこと後悔させてあげますね」

スズカ「ふふふ…じゃあこれで、お別れね、あ…それともう一つ、これを」

そう言い、スズカは一枚の手紙を渡した

スカーレット「これはなんですか？」

スズカ「もし何かあったときはその手紙を読んで、では無事に日本へ帰れることを祈ってるわ」フリフリ

そう言い、スズカはスカーレットの元を後にした

スカーレット「さて…日本へ帰るわよ!!」

こうしてスカーレットは日本へ向かい搭乗ゲートへ向かう

……………

夜 ホテル

トレーナー「はあ…疲れた…」ガチャ

そう言いながらホテルの部屋を開けると

葵「あ!?!トレーナーさんおかえりなさい」ニコニコ

桐生院葵がその場にいた

トレーナー「なんでいるのお!?!」

葵「それは、トレーナーの同期だからです」

トレーナー「ワケガワカラニヨオ」

葵「トレーナーさん友達同士お泊り会もいいかなって」

トレーナー「いやダメだろ…てか友達じゃ「私たち仲良しですもん

ねー」人の話最後まで聞けや卑しか女」

そう言いあつてると

ドアへガチャ

テイオー「トレーナー！まだ寝る時間じゃないし、あそ…は？」

ル「トレーナー君、寝る前には帰るからいいか…は？」

トレーナー」

＼（^o^）／オワタ

その後、生きた心地がしない状態で、トランプで遊んだ、

なおお開きになった時、ルナとテイオーが無理やり桐生院を引かずって行つた

……………

翌日？

最初は博多、次に札幌と来て、前はアメリカ、そして今は、

少なくとも東京にはついていない

スカレット「ああもう！認めるわよ！私は方向音痴だつて認めるつてば！」

スカレットは自分が方向音痴だということを認めた

だが、認めたからといってどうしようもない

スカレット「あ…そうだ！スズカ先輩に貰った手紙が」

そうしてスズカに貰った手紙を読む

読み終えたスカレットは

スカレット「私が向かおうとしてもたどり着きそうにないし…迎えに来てもらうしかないよね…」

「ただ、方向音痴でつてのは、流石に恥ずかしいし、トレーナーにドン引きされちゃうよね…」

なら…

スカレットはある建物を見ながらウマホを取り出し、手紙を見ながらある番号へかける

ウマホへBonjour. (こんにちは)

テイオーとトレーナーとカサマツトレセン後編

トレーナーはふらふらと歩いていた

今朝、なんというか…ひどい目にあい、やる気が今年初の絶不調になっていた

歩いていると掲示板に1枚の紙が貼られていた

辞令

桐生院葵 殿

貴殿に来月付けをもつてして、ベトナムトレセン支部へ勤務を命ずる

以上

トレーナー「やっぱりなあ…」

……………

今朝 トレーナーが宿泊するホテル

葵「スー…スー」Zzz

トレーナー「うそでしょ…」アオザメ

トレーナーは隣で寝ている、なぜか全裸の葵を見る

一体どういうことだ…ちゃんとカギをかけて寝たはず…

なのになんで起きたら、こいつがいるんだ…

しかも…全裸だと…何? やっちゃったの? え? うまびよいしたの

?

童貞歴28年なくなったの?!

あと2年で魔法使いになれたのに…え? いや…そんなことはどうでもいい

落ち着け…考えるんだ…OK落ち着け…とりあえず深呼吸を

トレーナー「ヒツ・ヒツ…フー」

「つてラマーズ法!」

ひとまずだ…ひとまず…誰かが来る可能性があるし、それまでにこの卑しか女を叩き起こして、事情を聞かねb

ドアへコンコン

たづな「トレーナーさん、おはようございます。一緒に朝食でもどうですか？」

oh: たづな...

どうする...まだ寝たふりをして流すか...ただこの時間は起きてることは彼女は把握しているはず...

どうするか考えていると

たづな「あれ？珍しくまだ寝てるのですかね？仕方ありませんね」

お:これは...そのまま諦めてくれるパターンか!?

ドアへガチャ

たづな「トレーナーさん、起こしにきました...あらトレーナーさん起きてたんですね♪」

トレーナー「あ...ああ...たづなさんおはようございます。ちょうど今起きたところだよ...」

たづな「そうですか♪ところで、どうしてあの女が寝てるんですしよ
うか？」

トレーナー「...」

たづな「トレーナーさん？」

トレーナー「お:起きたら...なぜかいた...」

たづな「そうですか...」

「トレーナーさんちよつとその連れて行きますね♪」ニコニコ
トレーナー「あ:はい...どうぞ...」

後々聞いた話だが、どうやら未だにやり方がわからないのかうま
ぴよいは未遂で終わったらしい

.....

現在 カサマツトレセン

桐生院は流石にたづなさんにガチで怒られたのか

少しシユンとしていたが、午後からはそんなことを忘れたのか
相変わらず、こつちに引っ付いてくる...

綱すぎるメンタルやばい...ちなみにベトナムへ行く件は、なぜか本

人は喜んでいた…ポジティブすぎる…

さて私は、グラウンドに来ていた

今日は、ルナとオグリキャップがレースをする日、テイオー「いいなーボクも走りたいなー」と言っていたので、テイオーも参加することになった

私とスキーは彼女らを見る

トレーナー「さて…どうなることやら」

マルゼンスキー「うーん…芝1200mルドルフもテイオーも得意と言える距離じゃないわねー」

トレーナー「今のオグリキャップの走りを見てないが、もし全盛期の頃だったらテイオーは勝てないだろうなあ…」

マルゼンスキー「ルドルフもこの距離だったら厳しかったわね、でも今のオグリキャップだったらルドルフの圧勝ね」

トレーナー「うーん…やっぱそうなるかな…」

ストレッチをするテイオーとルドルフ

そこにオグリキャップが近づいた

オグリ「会長…本日はよろしく頼む」

ル「こちらこそ、よろしく頼む、共に全力を尽くそう」

オグリ「それで、私が勝てば、トレーナーはカサマツにずっと居てくれるんだな？」

ル「ああ…約束しよう」

テイオー「カイチョーのトレーナーじゃないのに…ボクのトレーナーなのに…」

その言葉がルナに刺さる

ル「んぐ…まあ…そういうな…」

テイオー「まあいいやどうせ勝つのはボクだし」ニシシ

ル「ほお…その余裕全力で潰してあげるよ」

そんなやり取りも終わり、それぞれがスタート位置に着いた

トレーナー「それじゃ始めるぞー」

「位置についてーよーい」

テイオー「ボクが勝つー!」

ル「さて…」

オグリ「…」

「ドン！」

こうしてレースが始まった

そして結果、まあ分かつてはいたが…

ル「トレーナー君、観たかこれが皇帝の走りだ」ドヤア

テイオー「あと少しなのに…」グヌヌ

オグリ「ま…負けた…」

予想はしてたけど、こうきれいに決まるとは

1位はルナ、ハナ差でテイオーでオグリキャップは…4馬身差か…

オグリ「ま…待ってくれ…もう一度頼む！」

テイオー「いいね！カイチョーもう一回やろ！今度はボクが勝つか
らさ！」ニシン

ル「つぶ…何度やっても負けはしないさ」

素晴らしいまたスタート地点へ移動する

数分後

これで5回目か…

ル「つく…テイオーに負けた！」

テイオー「やったーボクのかちー」

オグリ「…」ハアハア

ル「だが4対1だからまだまだだな」

テイオー「グヌヌ…」

オグリ「…す…すまない…もう一度…」ゼエゼエ

それを聞いたルドルフが首を振り

ル「オグリキャップ、何度やろうが私達には勝てないよ」

そういうとオグリキャップは俯いた

ル「いくら君が怪物と呼ばれてた化け物だったとしても得意な距離で
走ったとしても、現役で走ってる私たちに勝てるほど甘い世界じゃな
い、それは君もわかってたはずだ」

オグリ「…」ギリ

ル「ふむ…いくら睨んでも状況は変わらないよ」

オグリ「…それでも…」

ル「もしかしてだが、負けたのが悔しいのかい？」

オグリ「!？」

ル「なら悔しいのであれば、また走れるし、きつと楽しくなるはずだよ」

そう言った後、ルドルフはトレーナーの元へ歩いて行った

オグリキャップは固まる

オグリ「私は…」

握りこぶしが震える

テイオーがオグリキャップの元へ近づき、何かを話してた

テイオー「オグリキャップ…ボクと1つ勝負しない？」

そして

出張最終日

トレーナー「ここの生活もこれで最後かあ…」

ル「長いようで一瞬だった」

トレーナー「さて、グラウンドにいきますか」

グラウンドへ行くと、人混みができていた…何だろうと思い、近くにいた人に聞く

トレーナー「この集まり、どうしたんですか？」

モブ「なんかオグリキャップ先輩とトウカイテイオーさんがレースするみたいです」

トレーナー「え？ちよつとすみません」

そういい、人混みの中に入り抜け出したさきには、スタート地点で始まるのを待つテイオーとオグリキャップがいた

テイオー、一体どうしたんだ…

そう思っていると、スタートしたのか、2人は走り出す

結果は、ハナ差でテイオーが勝った

テイオー「数日でここまで強くなるなんて…流石オグリキャップだね」ハアハア

オグリ「…」ハアハア

テイオー「オグリキャップ…」

オグリ「ああ…会長やテイオーの言う通り、負けて…悔しかった…
勝ちたい…」

テイオー「そっか…じゃあまだ走れるね、勝てたら楽しくなれるね」
ニシシ

オグリ「ああ…そうだな…」

テイオー「じゃあボクが勝ったから、約束は果たしてもらおうね」ニッ
コリ

約束？何の約束をしたんだろう…

テイオーは私の元へ近づいた

テイオー「トレーナー」

トレーナー「どうした？」

テイオー「紹介するね、新しいチームメンバーのオグリキャップだ
よ」

トレーナー「え？」

ル「え？」

オグリ「よろしく頼む、トレーナー」

トレーナー「え？え？ええー！」

ル「アゼン

こうして、新たにオグリキャップがチームに加わった

数時間後

オグリキャップは早速中央へ行くということで、テイオー、ルドル
フとたづならと新幹線で中央へ帰った

そして私は、今

どこかの峠（セリフのみのダイジェスト）

トレーナー「GTRってあんなに直線遅かったっけ？」

マルゼンスキー「ちゃんと踏んでないわね…私を待ってるのかしら
…」

N里「ストレートにちぎってももったいねえだろ…俺がバトルがし
たいんだよ」

T兄「こうして近くで見ているとまるで芸術だな、あのドリフトは」
「ほとんどカウンターの当てない全開の四輪ドリフト」

「あれがどんなに凄いこと分かるか」

「奴はハチロクという車を限界領域で、まるで自分の手足のようにコントロールできるんだ」

「オレでもあそこまではFCをコントロールできていない、感動的だ」
N里「全身から血が沸騰したようなハイテンション！これこそバトルだ！」

数分後

マルゼンスキー「うーん…ブロックされてなかなかコーナーで抜けないわね…」

トレーナー「諦めて普通に走る？」

マルゼンスキー「うーん…次のコーナーでダメだったらそうしましょ」

N里「屈辱だぜ、大勢ギャラリーが出てる前で、良いように外からつつつかれちゃなあ」

「無理にインに着こうとするから不自然なラインになって突っ込みが甘くなるんだ…」

コーナー

N里「よーしインには来ねえな」

マルゼンスキー「!?」カットイン

N里「86が消えた!?!」

「外に行くと見せかけておいて、ブレーキングしながらラインを変えやがった!?!」

「86つてのはあんなことができる車なのか?」

トレーナー「まだ乗って2回目の運転なのにすげえ…」

マルゼンスキー「ちゃんと練習してたはよ?」

トレーナー「いつのまに…」

「あ?GTR後部がガードレールにぶつかった…」

マルゼンスキー「まあほかに仲間がいるみたいだし大丈夫っしょ」

.....

数時間後 昼 中央トレセン トレーナー室

トレーナー「とうわけで、無事に帰ってきました」

マックイーン(ト)「おかえりなさい、先に帰ってきた彼女らに事情は聞きましたよ、オグリキヤップさんをチームにいれたんですね」

トレーナー「まあ…成り行きでな、ところでさ…なんでルドルフがダートに埋められてるんだ？」

マックイーン(ト)「ああ…あれは…外泊許可も合宿許可も出さず、生徒会の仕事も丸投げして逃げ出したので、その罰だそうですね」

ダートに埋まったル「…」シヨンボリ

トレーナー「マジかよ…てつきり許可取ったものかと思った…」

マックイーン(ト)「と…とりあえず、本日からお預かりしてたメンバーをそちらに戻すということだ」

トレーナー「ああ…預かってくれてありがとうな」

マックイーン(ト)「いえいえ、バクシンオーさんには色々賢さ練習でお世話になりましたし、うちのダイヤさんがキタさんやクリークさんと練習出来て喜んでましたし、ナリタブライアンさんに負けないとマヤノさんが頑張りましたし、タイキシヤトルさんの走り方でライスさんやマックイーンさんがよりフォームに磨きがかかりましたのでこちらこそお礼が言いたいですよ」

トレーナー「そう言ってもらえると嬉しいよ…ん？」

マックイーン(ト)「どうしました？」

トレーナー「いや…その話にスカーレットが出てこなかったからちよつと気になってさ…スカーレットはどうだった？」

マックイーン(ト)「スカーレット？ダイワスカーレットさんですか？こちらでは預かってませんよ？そちらに行ったと聞いたのですが…」

トレーナー「え？全く知らないし、来てないぞ…」

マックイーン(ト)「え」アオザメ

トレーナー「…」アオザメ

2人がスカーレットが失踪したことに気付き青ざめているとドアへバン！

たづな「トレーナーさん！大変です!!」

トレーナー「たづなさん？どうしました…ちょうどよかったこつちも大変で…」

たづな「そんなことより、これを見てください」ツピ

そう言うのとたづなはトレーナー室にあるテレビをつけた

.....

テレビ映像

記者「さて、先日の凱旋門賞について、ブロワイエさんにインタビューしたいと思います」

「ブロワイエさん、先日の凱旋門賞お疲れさまでした」

ブロワイエ「ええありがとうございます（フランス語）」

記者「しかし、連覇達成できず、本当に惜しかったですね」

ブロワイエ「負けてしまったのはとても残念ですが、この経験を活かし、次は絶対勝ちたいと思います（フランス語）」

記者「それにしても、ジャパンCに続き、今回も日本のウマ娘に負けてしまいました。それについてどう思われますか？」

ブロワイエ「日本のウマ娘は、もう世界でトップレベルに達していると認めざるえないです、最大のライバルとして今後もっと全力に挑みたいです（フランス語）」

記者「ありがとうございます」

「続いては、凱旋門賞で見事勝利し、日本の刺客として送られてきたと噂されている、ダイワスカーレットさんに、インタビュウしていきます」

.....

トレーナー「は？」

マックイーン（ト）「え？」

今なんて言った？ダイワスカーレットって言った？

え？なんで凱旋門賞？てかなんでフランスにおるねん…

てかブロワイエに勝つって何？え？なにこれ？

.....

記者「ダイワスカーレットさん本日は、凱旋門賞勝利おめでとうございませう」

スカーレット「ありがとうございます」

記者「今回凱旋門賞を出るきっかけなどありましたらお願いしませう」

スカーレット「はい、今回たまたまフランスへ行く機会がありまして、そのさいブロワイエさんにご連絡をして少しの間お世話になったのがきっかけで出場いたしました」

記者「つまりブロワイエさんの推薦ということでしょうか」

ブロワイエ「彼女の走りを見て勝負したいと思います、その舞台として凱旋門賞を選びました（フランス語）」

記者「そうですか…いや…まさかそのような経緯があったとは」

「それではスカーレットさん今後の予定とかをお聞きしてもよろしいでしょうか？これからもフランスで走るのでしょうか？日本へ戻られるのでしょうか？」

スカーレット「そうですね…ひとまず私のトレーナーさんが迎えに来てくれると思うので、そのまま日本へ戻ろうと思います」

記者「そうですか、日本での活躍楽しみにしております。以上フランスからの中継でした」

.....

トレーナー「たづなさん…」

たづな「はい…2日ほど出張延長しました…」

トレーナー「ありがとうございます…ちよつと行ってきます…マツクイーン（ト）すまんがもう2日ほど頼むわ…」

マツクイーン（ト）「は…はい…」

トレーナー「行ってきます…」ツダ

ドアへガチャ

ティオー「あれ？トレーナー？どうしたの？」

トレーナー「すまん、テイオー少しフランスに用事ができたから2
日ほどあける…」

テイオー「え?どういう…ってトレーナー!まってよお」

トレーナーはフランスへ向かった

トレーナー達のお疲れ様会（他トレーナー前編）

スカーレットをフランスから連れ日本へ戻り次の日

フランスで観光？行つてすぐにとんぼ返りしたけどお!?

ブロワイエに初めてあつたけど…なんていうか強者つて感じだつたなあ

スぺちゃんに次は負けないと伝えておいてくれて頼まれたっけな…

そのブロワイエに勝つたのかスカーレット…

帰りにスカーレットにどうしてこうなったのか経緯を聞いたけど理解できなかった

なぜ笠松へ行くのにフランスへ行くんだ!?

てか途中で博多、札幌、アメリカつてどういうこと?

あとアメリカでスズカに会ったとか…

ちなみに彼女がスズカにもらった手紙は私宛でもあつたらしく読むと

近々日本へ戻るとのことと、チーム開けておいてくださいねって書いてあつた…

うん…断ろう!!そう心に誓つたトレーナーであつた…

そして、スカーレット…

方向音痴だつていうのがよくわかつた…

スカーレット「あ…トレーナーこつちみたいよ!」

トレーナー「いやそつち中国行き…」

スカーレット「トレーナーここであつてるの?あつちの便もう行きそうよ?あつちのがいいと思うんだけど!」

トレーナー「そつち…オーストラリア行きだつて…」

成田空港

スカーレット「ねえ!トレーナーこつち行きましよ!」

トレーナー「いや、そつち飛行機搭乗口…お前また海外行くのかよ…」

つかれた…

てかそもそもチケット確認したりして、本来目的地と違った飛行機に乗れないはずなのに……こいつチケットも適当に買いやがったな……

迷子にもなりそうだったから手をしっかりと握って、しっかりとトレセンまで連れて帰った

手を握ってる時はものすごくしおらしくなって大人しくなるので助かった……

そして今、出張お疲れ様会ということで、居酒屋に来ていた

マックイーンのトレーナー主催で、スぺちゃんのトレーナーやタキオンのトレーナーなど男性トレーナーほぼ全員が来てくれた

……………

……………

……………

一步そのころ学生寮

テイオー「うーん」ポチポチ

ル「テイオーまだかな？」

テイオー「うーんボクも機械弱いからよくわかんないよーカイ
チョーがやってよ」

ル「つぶ……私はミホノブルボンの次に機械がダメだから無理だな」
ドヤア

テイオー「どや顔で言ってもカッコよくないよ……」ジトー

オグリ「ちなみに私はミホノブルボンより機械がダメな自信があるぞ」

テイオー「ダメじゃん……」

マルゼンスキー「ごめんね、テイオー、私ができたらよかったんだけど……知らない線ばかりで……」

マルゼンスキーも試してみたのだがUSBやHDMIとか未知の配線に思考がフリーズして断念したようだ

黄色い配線どこ？赤は？なんて言ってた……コンポジット端子かな？

ル「テイオーもうじき始まるし、ここは無理やりつなげてみるしかない、私がやろう」

スカーレット「いや、やめた方がいいと思います…」

テイオー「もし壊れたりしたら…元もこうもないしダメだよ…うん」

バクシンオー「あれ、皆さんどうなされたのですか？」

テイオー「あ？バクシンオー、この機械をテレビにつけたいんだけどね…」

バクシンオー「ふむふむ、私にらせてください」ツス

「はい、できましたよ！」

テレビから居酒屋の映像が流れる

テイオー「はや…あ…ついた」

バクシンオー「優等生ですから！」バクシーン

「ところで、こちらの映像はなんででしょうか？」

テイオー「あーこれ？マックイーン（ト）に仕込んでる隠しカメラ」

バクシンオー「ちよわ!？」

「いったい、全体どういうことですか？」

テイオー「えつとね、今日マックイーンの特レーナーが特レーナーの出張お疲れ様会をやるらしいんだよね」

バクシンオー「ふむふむ、飲み会があるとは言ってましたがお疲れ様会なのですね」

テイオー「で、お酒が入ったりすると本音って聞けたりするじゃん？」

バクシンオー「ええ…まあそうですね」

テイオー「だからね…」

……
……
……

前日の練習後 生徒会室

マックイーン（ト）「あのお…私はどうして呼ばれたのでしょうか？」

君「来てもらってすまないね、ところでマックイーンの特レーナー君、君は明日の飲み会の幹事らしいじゃないか」

マックイーン（ト）「ええ…まあ…そうですね」

ル「そこで、君にお願いがあるんだ」コト

「そういうあるものテーブルの上に置く」

マックイーン（ト）「これは？」

ル「隠しカメラだ」

マックイーン（ト）「え？」

ル「これをネクタイに仕込んで懇親会へ行ってもらいたい」

マックイーン（ト）「えっと…理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

ル「お酒の席なんだろう？」

マックイーン（ト）「ええ…まあ私含め皆さんお酒は好きですし…」

ル「聞くところによると、お酒の席では、本音で語り合う場だと聞く」

マックイーン（ト）「まあ…そうですね…」

ル「ならこれを付けて、是非ともトレーナー君が私達ウマ娘達をどう思ってるか聞いてほしいんだ」

マックイーン（ト）「ええ…そんなことお酒がなくても、彼なら正直に答えてくれると思うんですけど…」

ル「いや…勿論それは知っている、だがどうしても男同士、特に友人同士なら出る話もあると思うんだ…それが知りたくてね、協力してくれるかな？」

マックイーン（ト）「なるほど…」つとつばやき考えたがマックイーン（ト）「やはり、友人を騙すというのは気が引けますので…お断りします」

ル「そうか…それは残念だ」

マックイーン（ト）「すみません、あきら」

ル「先日、担当でもチームメンバーでもない、ニシノフラワーと遊園地に行ったそうだね」

マックイーン（ト）「ど…どうして…それを…」

ル「いやなに…たまたま知り合いが見つけてね、証拠写真もあるんだが…これをメジロマックイーンにみせ」先ほどの件、是非ともやら

せてください」

「そうか…いい返事が聞けてうれしいよ、それではよろしく頼むよ
マックイーンのとレーナー君」

マックイーン（ト）「」

……………

……………

……………

テイオー「というわけで、カイチョーがお願いしてくれてね」

バクシンオー「それは、お願いというのでしょうか？」ムムム

ル「まあいいじゃないか、それよりもとレーナー君の本音が聞ける
んだ、細かいことは気にしたら負けだ」

バクシンオー「うーん…まあ大丈夫ですね！」

「あとーっいいですか？」

テイオー「何？」

バクシンオー「どうして、他のチームの方もいるんでしょうか？」

スペ「私のとレーナーさんの本音が聞けると聞きました」エへへ

グラス「少し気になっていましたので」ニコニコ

タキオン「モルモット君がどう思ってるのかき…いや実験の参考にな
ると思っただけ」

ネイチャー「わ…私は…別に…とレーナーさんがどう思ってるかな
んてき…気にしてないけど…皆が集まってるから気になって／／／

テイオー「ネイチャーすごく乗り気できたよね？」

ネイチャー「そ…そ…そんなことないし!？」

……………

……………

……………

居酒屋

とレーナー「おろ？スペのとレーナーまだ来てないな…」

マックイーン（ト）「そうですね…あ？来ましたね」

タキオン（ト）「おそいぞー」

スペ（ト）「すまない…少し遅れた…」

ネイチャー（ト）「俺たちとりあえず生頼んでるけど、どうする？」
スペ（ト）「ミルクでももらおうか？」

タキオン（ト）「ええ……」
数分後

トレーナー達「カンパーイ」カン

ネイチャー（ト）「ゴクゴク：プツハー!!それにしても：男性トレーナー全員でこれだけって本当にトレーナーの男性数すくないですよー」

トレーナー「それな：圧倒的に女性トレーナー多いよなー」

タキオン（ト）「女性トレーナーと言えば、トレーナーさん桐生院さんと会ったんだって？」

トレーナー「ああ：そういえばあいつがやらかしてからだな：男性減ったの……」

ネイチャー（ト）「辞職者と行方不明者たくさん出ましたよね……」

スペ（ト）「そうだったのか？」

タキオン（ト）「いや：結構被害にあってたじゃん君……」

スペ（ト）「担当のために水族館の下見にいたり、温泉へ行ったりだが：仕事に一生懸命で流石だと……」

トレーナー「スペ（ト）さんらしいよ：ちなみに、彼女は、ベトナムへ行きました」

スペ（ト）とトレーナー以外「あっ……（察し）」

タキオン（ト）「あの頃は地獄だったな：タキオンのやつ荒れてさ：飲ませる薬の量が日に日に増えるし：最終的に桐生院に薬盛ろうとしてさ：止めるの必死だった……」

ネイチャー（ト）「私は、担当いなかったから被害はなかったけど：その時お世話になってたチームにいたフジキセキが自分のトレーナーを監禁未遂おかししたりして大変だった……」

マックイーン（ト）「私は、喧嘩に巻き込まれて、怪我したくらいですかね……」

……………

……

テイオー「桐生院さん…何したんだ…」

スベ「テイオーさんは、知らなくてもいい事もありますよ」ハイライトオフ

グラス「ええ…それにしてもスベ（ト）さん…本当にトレーナー業以外の事は全く興味ないですね…」ハイライトオフ

ル「…あの時を思い出すだけで…」ハイライトオフ

バクシンオー「あの頃は大変でしたねー」ハア

マルゼンスキー「ええ…そうねえ」ハア

マックイーン「え？マックイーン（ト）さんが怪我したですって?!」

テイオー「え？マックイーン？いつの間に来たの?!」

ネイチャー「あちやうちのトレーナーさんも災難だったねえ…」

タキオン「私のモルモット君は誰にも渡さないよ…」ハイライトオ

フ

……

……

……

数分後

皆お酒を飲んだりとほどほど酔ってきた

さて…そろそろ…話を進めるか…

マックイーン「トレーナーは意を決し行くのであった

マックイーン（ト）「皆さん、担当やチームメンバーの話でもしませ

んか？」

タキオン（ト）「あれ？お前からそんな事言われるとは珍しいな」

マックイーン（ト）「いえ、たまにはこういう話もいいかなって…」

ネイチャー（ト）「たまにはいいね！そういうの！」

トレーナー「まあネイチャー（ト）さんの話は惚気話になるけどな」

ニヤニヤ

ネイチャー（ト）「え？聞きたい？俺とネイチャーのラブラブな話聞

きたい？それとも俺の愛を語ろうか？俺ネイチャー好きすぎてさあ」

トレーナー「やっぱいいや…糖分摂取量過多で死ぬかもしれんし

…」

ネイチャー（ト）「ええ?! いいじゃん!!」

スペ（ト）「にぎやかになってきたな…」

………

………

………

ネイチャー「／／／」ボン

ネイチャーは顔を真っ赤にし爆発してた

テイオー「…」ニヤニヤ

スペ「仲がいいんですね」

グラス「そうですねー」

マックイーン「そういえばこの前、会長さんと喧嘩致してて、そのはずみで壁を壊したとき、お二人が…」

ネイチャー「きゃああああああ／／／言っちゃだめええええええええええ／／／」

………

………

………

マックイーン（ト）「じゃあ、ネイチャー（ト）さんは、長くなりそうですね、最後で…最初は…スペ（ト）さんお願いします」

タキオン（ト）「お? いいね!」

スペ（ト）「うん? 俺か?」

マックイーン（ト）「はい、あ…そういえば、スペ（ト）さん最近エルコンドルパサーさんをチームに加えたそうですね?」

トレーナー「え? マジ?」

スペ（ト）「ああ…グラスが誘ってくれたんだ」

トレーナー「なるほどな…」

通りで…俺が誘おうとするとグラスに妨害されたのか…

タキオン（ト）「そうなんだな、じゃあエルコンドルパサー含めて、チームメンバーの事と最後に担当について行ってみようぜ」

スペ（ト）「ふむ…チームか…」

スペ（ト）「そうだな…彼女らとの絆を信じて、ここまで来れたことは、本当に感謝しているし、みんないい子だと思っている」

「これでいいか？」

タキオン（ト）「相変わらず難しいねえ…まあお前らしいけどさ、じゃあ担当については？」

スペ（ト）「スペか…彼女を日本一のウマ娘にするために、今もこれからもずっと応援していきたいな」

……………

……………

……………

テイオー「普通だね」

キタサン「普通ですね」

マツクイーン「ただ…いい信頼関係が築けてていいですわね」

スペ「トレーナーさん…私…これからも頑張ります！」

グラス「うーん…聞きたいことではないのが残念ですねー」

……………

……………

……………

トレーナー「あ？そういえば、スペ（ト）さん」

スペ（ト）「どうした？」

トレーナー「グラスの体重最近はかりました？」

スペ（ト）「体重？」

トレーナー「彼女、スペちゃんに感化されたのか、めちやくちや食べるようになって、絶対太ってるよ」

スペ（ト）「そうか…太り気味は良くないし、明日にでも聞いてみるよ」

トレーナー「絶対太ってる、胸は相変わらずなのに太ももとおなか回り大きくなってから間違いない！」

……………

……………

……………

スぺ「アセ

グラス「ニコニコ

エル「ガクブル

グラス「トレーナーさんはいつも私をおちよくるのが好きですよ
ね」ニコニコ

テイオー「あ…あの…グラスさん？」

グラス「はい…大丈夫ですよ…明日までは我慢します」ニコニコ

テイオー「トレーナードンマイ…」

……………

……………

……………

マツクイーン(ト)「では次はタキオン(ト)さんお願いします」
飲み会はまだ始まったばかりである

トレーナー達のお疲れ様会（他トレーナー後編）

タキオン「どうやら、モルモット君の出番みたいだね」

テイオー「そういえば、タキオンのトレーナーって頑丈だよね」

スぺ「ですね、食堂爆発に巻き込まれても全治半年で済んでますし」

マルゼンスキー「この前、夜間ドライブしてたら虹色に発光してたわね…」

ル「先日、自爆したけど次の日には完治してたな…」

マックイーン「？せる薬を飲んだら膨らんで、どこかへ飛んで行ったあと、効果が切れて上空数百メートル落下してもぴんぴんしてましたわね…」

サトノ「もはや化け物ですね」

ブライアン「この前、タキオンと並走してたぞ」

テイオー「ええ…」

タキオン「つぶ…実験の成果さ」

………

………

………

マックイーン（ト）「タキオン（ト）さん、タキオンさんに色々と実験されてますけどお身体とか大丈夫なんですか？」

タキオン（ト）「うーん…最初は結構びっくりしてたりしてたけどさ、慣れちゃってもう気にならなくなっただな」

トレーナー「最初ってどんなことがあったんですか？」

タキオン（ト）「今と大して変わらないよ？体が発光したり、筋肉が爆発したり、幽体離脱したり…」

トレーナー「ええ…」

スぺ（ト）「すごいな…ん?!…もしかしたらエルの練習に活かせるかもしれない!？」

ネイチヤ（ト）「いや…エルが可哀そうだからやめなされ…」

………

………

……

エル「トレーナーさん!!それだけはやめてくだサーイ!!」

テイオー「それにしても…筋肉が爆発って何?」

タキオン「あーそれはだね、筋肉が膨張すれば、もっと力強く走れると思つて、筋肉が大きくなる薬を作つてみたんだが、膨張しすぎて破裂したんだ」

マックイーン「ドンビキ

ル「それで…よく君のトレーナーは無事だね…」

タキオン「生まれつき、怪我の治りが入らしいんだ」

グラス「治りが早くても…筋肉爆発したらそれどころじゃない気が」

……

……

トレーナー「それにしても、よくトレーナー続けれるよね、身体がいくつあつても足りない気がするわ」

ネイチャ(ト)「確かに」

タキオン(ト)「まあ最初は心が折れかけたけどな…ただ」

マックイーン(ト)「ただ?」

タキオン(ト)「あいつすごくかわいいからさ、全然許せるんだよな!」

ネイチャ(ト)「ほおー」フムフム

タキオン(ト)「弁当を食べさせてあげないと、直ぐに駄々をこねてさー可愛いんだよなあ」

トレーナー「自分で食べないのかよ!?!」

タキオン(ト)「そうだぞ、「はーやーくー食べさせてくれよー」つてさ抱き着いて駄々こねてさ…可愛すぎて尊死なりかけるから困るぜ…」

トレーナー「お…おう…」

タキオン(ト)「休日の時や長期休みの時も一緒に居ようと必死になるところや、駄々こねるところが愛らしくてさあ…」

.....

.....

タキオン 「∴／／／」

周り 「ジー

スカーレット 「タ∴タキオンさん？」

タキオン 「ま∴ま∴まったく∴モルモット君も仕方がない」 テレテレ

「さて∴新しい実験でもお∴思いついたから私はラボに戻るとする
かな」 テレテレ

テレビ へただなあ

タキオン 「ん？」

.....

.....

.....

タキオン (ト) 「ただなあ∴最近甘えすぎたかなって少し反省してる
んだよな」

トレーナー 「急にどうした？」

タキオン (ト) 「いやさ∴よくよく考えてみたらさ、タキオン本当に
何もできないんだ∴」

「いずれ近いかわからない将来俺が誰かと結婚するとする
じゃん？」

マックイーン (ト) 「え？結婚願望あるんですか？」

タキオン (ト) 「いやいや、もしもの話だよ、まあ俺もいずれはつて
思ってるよ？だからさもし俺が家庭を持ったらさ、あいつの世話がで
きなくなるかもしれないじゃん？」

スペ (ト) 「確かに、難しいかもしれないな」

タキオン (ト) 「そうなったときさ、あいつ1人で生きていける気が
しないからさ∴ぼちぼち甘えるのもやめた方がいいかなって思うん
だよな」

マックイーン (ト) 「ははは∴それは∴マズイ∴」 アセアセ

トレーナー 「ん？なんか言った？」

マックイーン（ト）「いえ…なんでもないですよ」アセアセ

………

ル「テイオー！スカーレット!!タキオンを押さえるんだ！」

テイオー・スカーレット「え？」

そう返事をした時には、すでにタキオンは…

部屋の入り口前で、エアグルーヴとブライアンに押さえ込まれてい
た

タキオン「はなせ!!嫌だ!!モルモット君が結婚なんて嫌だあああ
!!」

エアグルーヴ「落ち着け!!例え話だから!!」

ブライアン「力強!？」

タキオン「どうして…そんな事言うんだよ…モルモット君…」ハイ
ライトオフ

タキオンはへたり込んでしまった

ブライアン「ひとまず席に戻ろうな」

素晴らしい、席へタキオンを引っ張るブライアンとエアグルーヴ

タキオン「…」ブツブツ

………

………

………

さっきの発言まずいのではと考えるマックイーン（ト）

でもまあトレーナーさんのチームしか聞いてないだろうし、タキオ
ンさんは聞いてないから大丈夫だろう…

そう思い、そう考えることで、少しほつとしているマックイーンの
トレーナー

タキオン（ト）「そういうえげさ、さっき少し話題に出てたけどさ、結
婚願望とかお前らあったりするの？」

スペ（ト）「考えたこともなかったな」

タキオン（ト）「いや…お前はそうだろうと思うわ」

ネイチヤ（ト）「俺はあるぞ！ちなみに相手は…」

トレーナー「あーはいはい、式には呼べよな担当と結婚おめでとうって言つといてやるわ」

ネイチヤ（ト）「なんか反応ひどくない!？」

「で、お前らはどうなんだよ?」

マックイーン（ト）「うーん、ないって言ったらうそになりますかね」

トレーナー「でもお前の大好きな少女と結婚はできないぞ?」

マックイーン（ト）「いや…流石に…犯罪は犯しませんよ…」

マックイーン（ト）以外（…本当かな?）

トレーナー「でも、意外だな…一応そういう事も考えていたんだな」

マックイーン（ト）「ええ…まあ…いずれはできたらとは思いますがよ

?トレーナーさんはどうですか?」

トレーナー「俺?うーん…わかんないなーとりあえず先生を超えれ

たら考えるわ!」

ネイチヤ（ト）「そんな事言つてたら婚期を逃すぞ?」

トレーナー「うるせー」

………

………

………

ル「ほお…」

他「…」

マックイーン「…これはいい事を聞きましたわ…」

タキオン「…モルモツトクン…コウナツタラ…クスリ…」ブツブツ

………

………

………

トレーナー「さて…次は俺か?それともお前がやる?」

マックイーン（ト）「え?」

そうか…私もやらなきゃ不自然ですよね…ただ…マックイーンさんたちは聞いてないと（※聞いています）思うし大丈夫か…

ネイチヤ（ト）「トレーナーさんもマックイーン（ト）さんも1人づ

つ聞こうと思うからどつちでもいいぞ」

トレーナー「ええ…長くなりそう…」

タキオン(ト)「とりあえず数が少ないマックイーン(ト)さんから
行こうか！」

マックイーン(ト)「はい…それでは…」

トレーナー達のお疲れ様会（マックイーントレーナー
前編）

マックイーン「ついに、私のトレーナーさんの出番ですわね、結婚願望もあるみたいですし、ここで言質を取って……メジロ家に向かい入れ……次期跡継ぎをたくさん作りますわ！」ウマピョイデスワ

テイオー「うーん……うまくいくといいね」オチガミエテキタヨ

ダイヤ「マックイーンさんなら大丈夫です！ マックイーンさん応援してます！」

マヤノ「トレーナーちゃんはマヤチンに夢中だからマックイーンの思い通りにならないと思うの」

ライス「お兄様……」

……

……

……

マックイーン（ト）「では、まずは……ダイヤさんから行きますか」
トレーナー「お……いいね！ 入ってから結構経つけどどう？」

マックイーン（ト）「そうですね、すごくいい娘ですね、勉強熱心で、練習は一番頑張ってますし、本当に素晴らしいという言葉に尽きますね」

「マックイーンさんに追いつこうとする熱意は本物ですし、今はまだ名前だけにダイヤの原石ですが……しっかりと磨いて素晴らしいダイヤモンドにしていきたいですね」

トレーナー「おーいいね！ うちのキタちゃんも負けてられないねー」

スペ（ト）「最近の新人の娘も侮れないな……スペ達も負けずしっかりやっついていかねば」

……

……

……

ル「ダイヤ……だけにダイヤの原石か……マックイーン（ト）君も
なかなかやるではないか」ツフ

ネイチャー「あはははは」

テイオー「ダジャレだけど……笑うところなの?!」

ダイヤ「トレーナーさん……」キユン

マックイーン「つむ?!」

キタ「ダイヤちゃん！ 頑張ろうね！ でも負けないよ！」

……

……

……

マックイーン（ト）「ただ最近ですね、少し困ったことがありますて

……」

タキオン（ト）「困ったこと？ どうした？」

マックイーン（ト）「キタサンブラックさんとの事なんですけど

……」

トレーナー「あ……」察し

マックイーン（ト）「はい……お察しの通り……彼女らの関係につい

ていささか苦情と言いますか……」

ネイチャ（ト）「もしかして……あれか……俺も見ただけど……」

スペ（ト）「？」

トレーナー「ダイヤちゃんがキタちゃんとでちゆね遊びしてること

か……」

マックイーン（ト）「はい……彼女らの交友関係にどうこう言いたく

はありませんが……」頭抱え

トレーナー「……間接的にクリークにキタちゃん預けた俺のせいだ

わ……ごめん……」

スペ（ト）「でちゆね遊びってなんだ？」

タキオン（ト）「知らない時もいい事もある……」

スペ（ト）「そうか……？」

……

……

……

キタ「」

ダイヤ「」

テイオー「ええ……」ヒキ

他の娘達「……」ヒキ

ダイヤ「えつとこれは違うんです！」

ル「サトノダイヤモンド……君たちの交友関係にどうこう言いたくはないが……生徒会として少しだけだけ……」

エアグルーヴ「流石に……風紀が乱れるから……その……学園内ではやめてほしいんだが……」

ダイヤ「違うんです!!」

キタ「そ……そうです……でちゅね遊びなんて！好きでやってたわけでは……「え……そうなんですか!」え？」

声がする方へ振り向く、そこには、ガラガラを落とし、クリークが少し悲しい顔をしていた

クリーク「キタちゃん……そんな……今まであんなに喜んだのは……嘘なの!？」

キタ「え……え……それは……」

クリーク「……そうよね……私の我儘だったのよね……ごめんなさい……キタちゃん……」

素晴らしい目に少し涙をためたクリークは部屋を出ようとするが

キタ「ママ！ 待つて!! 違うの!! 本当は好きなの!! ママ!! 待つてええええええええ！ ママああああああ!!」

クリーク「キタちゃん!？」嬉し泣き

ダイヤ「キタちゃん……ママは私ですよおおおおおお!!」
ル「」椅子から滑り落ちる

エアグルーヴ「」テールに頭をぶつける ←やる気が下がった
テイオー「ぶろうううう」飲んでいたハチミーを吹く

マックイーン「きやああああああああ」テイオーが吹いたハチミーを顔面に食らう

通りすがりのミホノブルボン「……? 想定外の事態が発生」宇宙

ブルボン

.....

.....

.....

マックイーン(ト)「……なんか悩みを打ち明けたら少し楽になりました……」

トレーナー「そ……そうか……」

マックイーン(ト)「これからどうするかは、ひとまず向き合って考えてみます……」

トレーナー「俺もそうするよ……キタちゃんがこうなったのは俺のせいでもあるし……」

ネイチヤ(ト)「ひ……ひとまず……続きやろうぜ!」

タキオン(ト)「そ……そうだな、次はマヤノトップガンなんてどうだ?」

マックイーン(ト)「そうですね……マヤノさんは、ライスさんの次にチームに加入してくれたんですけど……」

「彼女はすごい一言ですね……どんな作戦でも完全にこなす……天才なんだなって思いましたよ」

ネイチヤ(ト)「確かに、彼女はすごいですよね」

スペ(ト)「逃げや先行かと思ったら差しも追い込みもできるからな……」

マックイーン(ト)「それに、毎日元気で明るく人懐っこいですしね……正直最高です」

トレーナー「通報した」

マックイーン(ト)「まだセーフですよね!」

.....

.....

.....

マックイーン「グヌヌ……」

「わたくしも明るく人懐っこい感じになればもっとトレーナーさんに見てもらえるのかしら?」

テイオー「やめた方がいいよ……正直言って似合わない」
マックイーン「な……!?!」

……

……

……

マックイーン(ト)「ただ……彼女も最近……」

トレイナー「ん？ マヤノも最近なんか交友関係であるの？」

マックイーン(ト)「いえ……交友関係ではなくて、最近視線が怖いと言いますか……行動が過激になってきたと言いますか……」

ネイチャ(ト)「もしかして……しつとりしてるど？」

マックイーン(ト)「そうなんですかね……」

トレイナー「ちなみにどんなことがあった？」

マックイーン(ト)「はい……例えばレースが終わった時とか……」

「ランディングキーツス」って言って本気でキスしてくるし……」

トレイナー「うへえ……ガチやん……でしたの？」

マックイーン(ト)「ギリギリのところ回避してましたが……この前……逃げきれず……」

タキオン(ト)「それはあかん……」

スペ(ト)「キスしたのか……」

ネイチャ(ト)「俺はよくするよ」

トレイナー「お前はお前であかん」

……

……

……

ネイチャー「なんで、そんな事言っちゃうのおおおおお!!」

／／カオマツカ

テイオー「ネイチャー進んでるね……」イイナー

ル「ワタシモ……トレイナークンと……」ブツブツ

スペ「いいなー私もトレイナーさんとそのくらい仲良くなりたいで
す」

グラス「あらら」フッフ

なんてキャツキャウフフと話に花が咲いている横でマックイーンは

マックイーン「は？ キスした？ は？ マヤノさんとした？ は？」

ハイライトが段々と薄くなってきた

.....

.....

.....

マックイーン（ト）「まあ.....事故だから.....マヤノも本気じゃなかったはずだと思いますし.....」

トレナー「お前、俺より先に刺されるぞ？」

ネイチヤ（ト）「お前も大概だな」

マックイーン（ト）「後は.....アクティブすぎるのか.....よくデートに連れまわされますね.....」

トレナー「どんどん彼女の思い通りに事が進んでるやん.....」

マックイーン（ト）「ただ.....なんといいかまだまだ子供な感じなんです.....ずっとそのままできてねって祈ってます」

タキオン（ト）「まあ実際まだピュアなお子様だからねー」

トレナー「幼いうちにしつとりが治るといいな.....」

マックイーン（ト）「ええ.....」

.....

.....

.....

マックイーン「.....最近のお誘いよく断られてる理由はやっぱりマヤノさんとデートだったのですね.....」ハイライトオフ

テイオー「うわあ.....めっちゃしつとりしてる.....」

スペ「これがしつとりですか.....」

エル「スペちゃんとトレナーさんが仲良くしすぎてると、グラスがよくなってるやつですね!!」

グラス「エ〜ル〜?」

エル「ひえ!?!」

……

……

マックイーン (ト) 「次は、ライスさんですかね……一言で言えば……あんな妹が欲しかったので……すごくうれしかったですね」

「理想の妹!! 私がお兄様だ!!」

トレーナー 「お……そっか、口調変わってんぞ」

マックイーン (ト) 「あ……すみません、私、姉がいるんですけど、妹に憧れがありました……」

「妹が来てくれたと思えば、本当にうれしかったですね」

トレーナー 「そんなもんかねー? 一人っ子だけどよくわからないや」

スペ (ト) 「マックイーン (ト) 姉がいたのか」

ネイチヤ (ト) 「あれ? 知らなかったんですか? こいつもイケメンだけど姉もすごく美人でさ!!」

マックイーン (ト) 「いや……イケメンって……」

トレーナー 「ロリコンじゃなければいうことないのにな……」

マックイーン (ト) 「べ……別にいいじゃないですか……」

スペ (ト) 「そうなのか」

ネイチヤ (ト) 「そうそう、トレーナーが一目惚れするくらい超美人なんだよね!」

マックイーン (ト) 「ア……マズイ……」

……

……

……

エアグルーヴ・ブライアン 「会長落ち着いて (落ち着け)!!」

ル 「離せ!! 今すぐトレーナーに聞かねばいけないことがあるんだ!!」

テイオー 「マックイーン? 離してくれない? ボクちよつと用事

ができたんだから邪魔しないでくれるかな?」

マックイーン 「テイオー……少し落ち着きましよう?」

スペ「そうですねよテイオーさん……少し落ち着きましょう」

テイオー「ボクは落ち着いてるよ？　だから離して？」

マルゼンスキー「スカレット……止まりなさい……貴方が行くと……方向音痴でブリーダーズカップあたり勝つてきそうだからやめなさい」

スカレット「あたしだけ扱いひどくない!？」

キタ「バブー」

クリーク「よしよしいこでちゆねー」

ダイヤ「おねんねしましょうねー」

サクラバクシンオー「あれ？　ライスシャワーさんがいませんね？」

なんてカオスな現場であつたが

テレビへまあ……振られたんだけどな！

この一言で現場が収まった

……

……

……

マックイーン（ト）「まあ話は脱線しましたが、彼女も最近ですな……」

トレーナー「今度はなんだ？」

マックイーン（ト）「至る所で偶然出会ってますよね……あとずつと後を付いてきてて、軽くホラーなんですよね……」

「流石に怖いと言いますか……いくら何でもやりすぎかと……」

トレーナー「お……おう……そうだな……」

トレーナーはある席を見る、そこには見慣れた黒いウマの耳をした、娘がいた……

？「お兄様……」

マックイーン（ト）「さて、最後はマックイーンさんですね」

トレーナー「あれ？　カレンチャンは？」

マックイーン（ト）「ああ……彼女は一時的に預かってただけなので、チームではないですよ？」

タキオン(ト)「あれそうだったんですね、じゃあ専属やってた彼女の所に戻ったんだ」

マックイーン(ト)「はい」

トレーナー「なら……今度短距離枠でスカウトしてみようかな……」

マックイーン(ト)「いいんじゃないですか？」

……

……

……

マックイーン「ついに……ついに……私の出番ですわ!! さあ酔った勢いで私の愛を語るのです!」

テイオー「トレーナー振られちゃったんならしかたがないなー今度ボクが慰めてあげなきゃね」ニシシ

ル「……しかしマックイーン(ト)君のお姉さんも見る目がないな……明日私がトレーナー君を慰めてあげねば……」

スペ「なんといいですか……」

エル「カオスですね!!」

グラス「ええ……」

タキオン「モルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクンモルモットクン」

……

……

……

トレーナー達のお疲れ様会（マックイーントレーナー 後編）

※トレーナーは（○）表記 例（テ）↓テイオーのトレーナー
昔ある曇りの日

わたくしは、足に違和感があり検査をした

検査してから少したってから、メジロ家の当主であるおばあ様に呼ばれ、

左前脚部繋靭帯炎を発症していることを告げられた。

そして、もう走るのをやめるよう言われまして…

そのあとのことはあまり覚えていなかった

気づいたら雨が降る中、自宅の練習グラウンドで足の痛みに耐えな
がらひたすら走っていて…

次第に痛みに耐えれなくなって…

今にも今まで積み上げてきた物が崩れかけて…壊れてしまいそう
になった時…

？「マックイーンさん…」

目の前が涙で曇る中に彼が…わたくしのトレーナーさんがいたの
です…

ふと思いだした辛い過去

たぶん彼の事を本当に愛おしくなったのは、

その一件からなのだろうと…彼がいたからこそ今わたくしは、
こうして再び走れている彼の為にわたくしは恩返しをしたい、

それとともに彼とは、これからもずっと一心同体として支え合っ
ていきたいとわたくしは思っていた

そんな彼からの本音が今まさにこの飲み会の席で聞ける…

マヤノさんとデートしたとか色々聞き捨てならない事もありま
したが、

わたくしが彼にとって一番であることをこの場で証明してくれる
に違いないと

わたくしは、期待していた

……………

(テ)「さてと、次はマックイーンだな!」

(マ)「マックイーンさんですか…何から話せばいいのでしょうかね…」

(ス)「そういえば、話は変わるんだけど。噂で聞いたんだが、(マ)は元々医療関係のスペシャリストなのか?」

(タ)「あーそんなことタキオンが言ってたな」

「マックイーンのトレーナー君は医療関係でとても素晴らしい学者だったと、この学園のトレーナーになってたからびつくりしたよって」

(マ)「懐かしいですね…そんなこともありました。元々親が医者だったりと医療関係の家系なので…」

(テ)「学生の頃、最初は医学部だったのに、気づいたら俺と同じ学科に切り替わってたんだよな医学部にいたころは、そりや世界が騒ぐくらい優秀だったらしいぞ」

(マ)「まあ色々と事情がありました、トレーナーになりました」

(タ)「なるほど…マックイーンが左前脚部繋靭帯炎になっても今はこうして走ってるのはなんとなく納得した」

(テ)「本当にこいつには、お世話になったよ」

「だってテイオーが三冠取れたのはこいつのおかげかもしれないし」
(ネ)「そうなのか?」

……………

テイオー「え? そうなの?」

ルドルフ「どういうことだ…」

……………

(テ)「テイオーが日本ダービー後太り気味で色々と苦勞してたじゃん?」

(タ)「ああ…確かそうだったな…その数日後に調理室爆発に巻き込まれて入院してたからあまり覚えてないが…」

(ネ)「色々とありましたねえー、うちのネイチャーもすごくテイオーの事心配してたけど、菊花賞のテイオーが少しトラウマになったり大変だったなあ〜」

(ス)「で？テイオーの太り気味がどうしたんだ？」

(テ)「実はさあ…俺が太り気味つての知ったの皐月賞後なんだよね」

(タ・ス・ネ)「え？そうなのか？」

……………

テイオー「え？」

……………

(テ)「それでまあこいつに相談したわけなのよ」

(回想)

テイオーが皐月賞勝利後のある日

(マ)「太り気味ですか…」

(テ)「そうなんだよなあ…あいつさあ事あるごとにハチミーばかり飲んでるんだけどさ、こう最近太もとか腹回りが膨らんできてるんだよね…」

(マ)「はあ…それは…重量も増えてますね…」

(テ)「だけど胸回りに肉がつかないのは…なんというかどんまい…つてまあそこはおいておいて、ダービーに支障きたしそうなんだよね…ダイエツトかなあ…」

(マ)「うーん…ダイエツトはダービー後まで待つてもらっていいでしょうか？」

(テ)「え？どうして？」

(マ)「実は皐月賞もそうですがテイオーさんの走りを見てて少し気になることがあります」

(テ)「気になるところ？」

(マ)「はい…彼女の走り方は確かに素晴らしいですが、少し足に負担をかけているっぽいんですよ、もしかしたら骨折などの危険性もあります」

(テ)「マジか…なら走り方を見直したり…ってダービーまで間に合わないか…」

(マ)「ですが、このまま重量が増えて行ってるのならもしかしたらダービーで骨折という危険性は回避できるかもしれません」

「重量が増えることでバランスが変わって、今まで一番負荷がかかる箇所が変わってしまうので、一旦は危険を回避できます」

(テ)「なるほど…」

(マ)「ダービーの後、菊花賞まで結構期間があるので、その時にダイエツトとその走り方を直してみるのがいいと思われれます」

「それに今の実力があれば、多少太り気味でもダービーは大丈夫だと思いますよ」

(回想終わり)

(テ)「ということがあってな、もしかしたらテイオーが骨折してたかもしれないなかったんだがこいつの助言通りにしたら…無事三冠は取れたんだよね」

(タ)「そんなことがあったんだなあ」

(マ)「あくまでも私個人の予測ですけどね…」

……………

テイオー「皐月賞の頃から太り気味ばれてたんだ…」

マックイーン「太り気味…クラシック…菊花賞…天皇賞…ツウ…頭が…」

ル? 「太り気味…ハチミー…菊花賞…」ガクガク

太り気味にトラウマの2人が頭を抱えている中

テレビからテイオーのトレーナーがある爆弾発言をする

テレビへ「ちなみにこいつマックイーンが太り気味だったの夏前から知ってたのに、お灸を添えたいからって天皇賞まで様子見してたらいいんだぜ」

マックイーン「…はっ…」

……………

(ネ)「え? そうなの?」

(マ)「いや…まあ…そうですね…彼女一人でなんでも強引に推し進め

たり等色々は無茶苦茶してたので、そこらへんも反省してもらいたかったですし…」

「でも…天皇賞では負けないように調整はしっかりはしました…けどまさか…ゴール後にスカートがずれて…公衆の面前でさらけ出すとは…」

(ス)「確かに、あの頃のマックイーンは無茶苦茶だったな」

(テ)「確かにぶっ飛んでた…合宿の夜中、練習で観れなくて録画してた野球観戦を大声でして隣の部屋で寝てたブライアンがガチギレしたり…」

(ネ)「合宿終わって帰るときは、無人島まであるはずもないスイーツ店を求めて泳いでいったり…」

(ス)「スぺとスイーツ食べ放題で張り合って学園近くにある数多くの店を閉店に追い込んだらしいな…」

(マ)「えっと何といいますか…ご迷惑おかけして申し訳ございません」

「なんて言いますかあの頃は、押しに弱かった私も悪かったんですが…」

「流石にこのままではよろしくないとしまして、これを機に反省してくれたらなあって思いました…」

……………

マックイーン「…」プルプルプル

テイオー「マックイーン…真っ赤にしてプルプル震えてる…」

ブライアン「まさか22時に隣からかつ飛ばせー!!なんて大声が聞こえてびっくりしたな…」

マヤノ「マックイーンちゃん…」

ルドルフ「ん?天皇賞でそんな事があったのか…」

エアグルーヴ「あ…会長は少しお休みになってたので、知らなかったのですね」

マルゼンスキー「ああ…あの時ルドルフは、幼児退行しててずっとトレーナー君と遊んでたんだったわ」

……………

(タ)「デビュー前はメジロ家のご令嬢だとかすごく噂になって何と
いうか今とイメージ真逆だったのになあ」

(ネ)「でも、今の方がいいけどね」

(テ)「今でもゴルシの次にぶっ飛んでるやべー奴だと思ってます」

(マ)「ハハハ」

(ネ)「話が半分それちやっただけど、実際(マ)さんはマックイーンの
事どう思ってるんだい？」

(マ)「そうですね」

色々と思い返してみた：

出会った当初、スカウトはしてみたが新人だったし断られた
だけど、私の手作りお菓子につられて専属になったんだっけ…

そこからは

デビューからクラシックまでは特に何事もなく彼女と私の二人三
脚で頑張ってきた：

いつからだろうなあ…テイオーさんのダイエット作戦で乗り気にな
ったあたりかな…

そこから素になったとか若干暴走気味になったんだっけ…

そこからの天皇賞でパンツ晒す事件か…

で有馬記念までスイーツ禁止にした結果、菊花賞のテイオーさんな
んか比でない勢いで有馬記念勝つたりと…

なんだかすごいウマ娘だなんて思ってたんだけど…

あの頃か…彼女が

左前脚部繋靱帯炎ってなった時…彼女が今にでも崩れて壊れてし
まいそうになったその姿を見て…

やっぱり一人の女の子なんだなって…夢があってそれに一生懸命
で、叶わなくなると泣いてしまう

か弱いところもあって、そう思うと居ても立っても居られなくなっ
たんだっけ…だから決めたんだっけ…

(マ)「守ってあげ…というか…うーん…一心同体ですかね」

(テ)「一心同体？」

(マ)「身も心もつてのは無理かもしれないですが、私は彼女を自分自

身だと思いい支えて行きたいですかね…」

「それに、メジロ家の方にも約束しましたしね、彼女は責任をもって私が支えます！…って」

(テ)「(これめっちゃ取り返しのつかない約束してるやつやん)」

(ネ)「(これ親に娘さんをください的なの奴してるやつやん)」

(タ)「(これは実質うまぴよいでは?)」

(ス)「(これが絆か…)」

……………

マックイーン「キマシタワー」ウマピヨイウマピヨイ

マヤノ「マックイーンちゃんずるい!!マヤもトレーナーちゃんと親に挨拶いく!!」

ルドルフ「親公認になっていたのか…」

テイオー「ボクもパパやママにトレーナーをあわせようかなあ…」

ルドルフ「む?ダメだぞ!テイオー」

テイオー「ええ…いいじゃん!」

……………

(テ)「メジロ家にすごいん事言ってるけど…お前メジロ家に行くの?」

(マ)「え?どうしてですか?」

(ネ)「いや?娘さんを支えますって言ったんでしょ?断られたの?」

(マ)「マックイーンさんのおばあさんによろしくお願いしますっつてものごく頼まれたけど?」

(テ)「(あーよくある勘違いというかこの重大さを気付いてない奴だ…)」

(ス)「まるで、親に婚約の許可をもらうやり取りだな」

(マ)「え?婚約?私とマックイーンさんが?いやいやありませんよ」

「一心同体とは言え、トレーナーとウマ娘の関係ですよ、そんなことになるわけないじゃないですか」

(テ)「(マックイーンに聞かれてたら死んでたな)」

(ネ)「ええ…(マックイーン可哀そう)」

(ス)「そうか…」

(タ)「これはひどい(そうなのか)」

……………

スペ「マックイーンさん止まってください!」

エル「ステイデース!」

マックイーン「離してくださいまし!わたくしは!わたくしは!」

スペとエルがマックイーンを押さえる

だがマックイーンに振り切られ

マックイーン「トレーナーさんに教えなくては!!わたくしが…」バ

タン

マックイーンが急いでドアに向かいそう言いかけた時であった

向かおうとしていたドアが開きそこから1人のウマ娘が

ゴルシ「お?マックイーンみつけ!確保!」バス

マックイーン「な!?!」

テイオー「ゴルシ!?!」

突如現れたゴルシがマックイーンにズタ袋を被せた

マックイーン「ちよつと!ゴールドシツプさん!なんですの!離し

なさい!!」

ゴルシ「これからゴルちゃんとSOP財団に殴りこみに行くからダ

メだ!」

マックイーン「なんですか!?!その危ないものを収容保護してそんな

財団は!?!やめてくださいまし!命がいくつあっても足りませんわ!」

ゴルシ「つべこべ言わずにいくぞ!閉園後のネズミの王国へ」

マックイーン「それだけはやめなさい!本当に消されますわよ!?!い

や…これから…トレーナーさんの元へ…ちよ…はな」バタン

そうしてマックイーンはゴルシに連れ去られていった

一同「…ええ」

ルドルフ「と…とりあえず…メジロマックイーンはゴールドシツプ

に任せよう…」

テイオー「…うん…」

……………

(ネ)「ちなみにだけど…一番つてなるとどの娘?」

(マ)「うーん…優劣はつけないですけど、1番ってなりますと私はマックイーンさんを選ぶかもしれないですね」

?「オニイサマ!」ガタ

……………

マヤノ「ハイライトセミオフ

ブルボン「!?!?:今ライスの気迫が!」キピーン

サトノ「マックイーンさんおめでとうございます!」

テイオー「マックイーンが聞いていたら…どんまい…」

……………

(テ)「さて、帰りますか!」

(ス)「おい」

(タ)「お前の番だろ」

(テ)「ええ…」

(ネ)「1番のメインディッシュ何だから逃げるのはなしだぞ!」

(テ)「はあ…分かったよ」

(マ)「まずは生徒会辺りから」

(テ)「チーム以外もやるのかよ!」

他一同「当然!」

(テ)「うへえ…」

……………

次回へ

おまけ

ゴルシ「よっしゃー!!やってきたぜネズミの王国!!」

マックイーン「どうして…こんな所に…」ヨヨヨ

?「ハハ!どうやら悪い子がいるようだね」